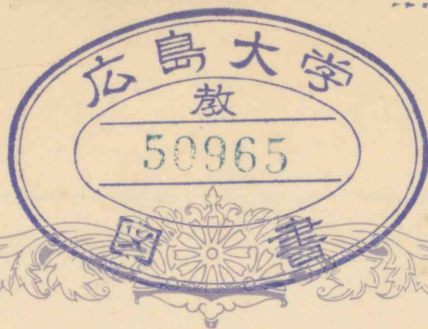


東 京  
文 光 社 藏 版





教科書文庫

4

910

42-1931

2000050965

資料室  
中央図書館

375.9  
In 15

# 現代 家事教科書

[再訂版]

曰本女子大學學務監家學部長

井上秀子



広島大学図書

2000050965



東京  
文光社藏版



再訂版ニ就テ

- 一、本書ハ文部省檢定出願中ニ付採用御内定ノ節ハ其旨御内報オキクダサラバ檢定済ニナリ次第月日御通知致シマス。
- 一、本書ノ定價ハ新規定文部省制定最高價格ヨリモ拾錢安ク昭和七年以後コノ定價デ供給致シマス。
- 一、本書ハ内容豊富改新ノとつぷチ切ルモノ、各篇面目一新殊ニ家庭管理篇ハ獨創的デ何人ノ追隨ヲモ許サヌモノデアリマス。十分他書ト比較御研究ノ程御願ヒ致シマス。
- 一、從來弊社發行ノ初版・改訂版御採用ノ學校モ此ノ再訂版ヲ御研究クダサツテ生徒ノ爲メ本書ニ御變更クダサイ。

發行者 識ス

例言

一、本書は女子師範學校高等女學校の家事科教授要目に準據し、著者從來の研究と經驗の結果に基づきて、此等諸學校の家事科教科書に充てんが爲め編述したものである。

一、本書の初版は、大正十四年九月、改訂版は昭和二年十二月の發行で、今回が再訂版である。此の機會に文體は口語體とし、内容にも大なる改善を加へた。家庭管理篇の如き其の著しいものである。一、本書編纂上特に留意したことは、初版當初の意見と何等變つて居ない。即ち左の如くである。

(1) 最新科學の基礎の上に合理的説明を爲し、理論と實際との結合につとめたこと。

(2) 一家は一國の單位であるとの信念のもとに、廣く國家の現状と



將來とを眼中において記述したこと。  
(3) 實際的方面は現代の中等生活を標準として記述し、東西兩洋の長所を採り、生活改善の促進につとめたこと。  
(4) 別刷挿畫は必要なるものに止め、裝飾的のものは之を採用しないこと。

(5) 生徒の實習事項・參考事項等は小活字を用ひ、授業時間の多少に應じ、取捨選擇其の取扱を自由ならしめたこと。  
一、家事科は地方化・實際化によつて其の効果を收め得るものであつて、此等は教師其の人の手腕と生徒の學習態度とに俟つべき所が多いのである。本書に拘束されることなく、師生協力本科の爲めに御努力あらんことを望む。

目白にて

昭和六年九月

著者 しるす

現代家事教科書 (再訂版) 下巻 目次

第一篇 看病……………一

第一章 看病と看病人の心得……………一

第二章 醫師の招聘……………三

第三章 病人の衣食住……………五

第四章 介抱……………八

第一節 病狀の觀察……………八

第二節 介抱……………一三

第五章 藥用……………一六

第六章 傳染病と豫防消毒……………二六

第一節 傳染病の種類……………二六

第二節 傳染病の豫防……………三六



第三節	傳染病の消毒	三六
第七章	應急手當	四三
第八章	繃帶	四九
第九章	特別の手當	五四
第二篇	養老	五五
第一章	精神の慰安	五五
第二章	身體の保養	五五
第三篇	育兒	六二
第一章	婦人衛生	六二
第二章	妊娠	六四
第三章	胎兒の發育	六八
第四章	妊娠中の攝生	七一
第五章	出産	七五

第一節	出産の準備	七五
第二節	出産	七六
第六章	產褥と攝生	七八
第七章	初生兒の取扱	八一
第八章	嬰兒の養育	八七
第一節	人乳哺育	八七
第二節	人工哺育	九一
第三節	離乳	九六
第四節	便通	九八
第五節	睡眠	一〇〇
第六節	啼泣	一〇一
第七節	運動	一〇三
第九章	小兒の發育	一〇四
第十章	小兒の衣食住	一〇九



第一節	小兒の衣服	一〇九
第二節	小兒の食物	一一一
第三節	小兒室	一一三
第十一章	小兒病	一一四
第十二章	感官の發達	一二一
第十三章	精神作用の發達と教育	一二三
第一節	精神作用の發達	一二三
第二節	言語	一二七
第三節	玩具	一二九
第四節	繪畫と手工	一三〇
第五節	童話	一三一
第六節	徳性の涵養	一三三
第十四章	就學學校家庭の連絡	一三六
第四篇	家庭管理	一三八

第一章	家庭の收入	一三八
第二章	家庭の消費	一四五
第一節	生産と消費との關係	一四五
第二節	合理的消費	一四七
第三節	消費行爲の考察	一五〇
第三章	一家の支出	一五四
第四章	豫算	一六〇
第五章	收入支出の調和	一六四
第六章	餘財の管理	一六六
第一節	貯蓄	一六六
第二節	一家の資産	一七四
第七章	家計簿記	一七六
第八章	家務の處理	一七九
第一節	家務の分擔	一七九



第二節	家務の處理と使用人	一八三
第三節	物資の購入	一八五
第四節	交際	一八八
第五節	家庭日誌	一九四
第九章	家風の振興	一九五
第一節	家庭の要素	一九五
第二節	東西家庭の比較	一九六
第三節	家風の振興	二〇一
第四節	家庭と公民的陶冶	二〇四
第五篇	結論	二〇七
附 錄	家計簿記例題と様式	一
	年中行事の一例	一〇
目 次(終)		

現代家事教科書 (再訂版) 下卷

井上秀子 著

第一篇 看病

第一章 看病と看病人の心得

看病

●看病 一家の主婦は、平素家族の衛生に留意して其の健康の増進をはかり、病を未然に防がなくてはならぬ。若し不幸にして病にかゝつた時は、速に醫師の診察を受けるがよい。

病の治療は、醫藥と養生とが大切であるが、其の經過の良否と恢復の遲速とは、看病の巧拙如何によることが多い。「一に看病二に藥」といふ諺は此の事實をいひあらはしたものである。

●女子と看病 女子は元來同情・緻密・柔和・忍耐等、看病人としての

女子と看病



看病人の心得

適性を備へて居る。然し、看病上の知識に乏しく、其の技術が拙であれば、如何に誠心を以て看病しても、醫療を輔佐して其の効果を收め、病人を慰安することは出来ない。故に、女子は看病法につき、其の要領を會得しておくことが肝要である。

●看病人の心得 看病人の心得べき主要條件は左の如くである。

- (1) 常に醫師の命に従ひ、決して我意を挟まないこと。
- (2) 萬事秩序清潔を守り、規律的に活動すること。
- (3) 自己の健康に注意し、病室内で飲食しないこと。
- (4) 身體を清潔にし、頭髮を整へ、衣服を正し、病人其の他の人々に不快感を起させないこと。
- (5) 傳染病人を看病する際は、手指の消毒を嚴重にし、又其の病室に出入する毎に衣服の外被の脱着を嚴守し、病毒を他に運ばないやうに注意すること。
- (6) 病人は身體の衰弱するに従ひ、神經過敏となり、感情が鋭くなるから、看護人は務めて精神を安靜に保たせるやう注意すること。同病人の不結果で

看護婦の選定

あつた經驗を話し、又は周圍の人と耳語するが如きは慎むべきである。  
(7) 病人は其の身體の不自由であるが爲め、非理の怒を發し、罵詈訾<sup>はりしや</sup>叱咤<sup>ちた</sup>することがあつても、看病人は顔色を和げ、言語を穩にして之に善處すること。  
●看護婦の選定 若し一家に人手が不足して、看護が行届かない虞のある時、又は重症で看護婦を雇ひ入れる際は、身體が強健で、性質が溫良親切正直で、看護の知識と經驗とに富む人を選ぶべきである。

## 第二章 醫師の招聘

醫師の招聘

●醫師の招聘 醫師は誠實懇篤で德望があり、學術經驗共に優れた人を選ぶべきである。醫業は内科・外科・産科・婦人科・小兒科・眼科・耳鼻咽喉科・皮膚病科等の専門に分れて居るが、重症でない限り、平素かゝりつけの病人の身體狀況をよく知つて居る醫師が便利で



ある。

醫師を招聘する際には、必ず其の容體を精細に記し、使に持たせ來診を求め、又電話で招聘する場合には、其の容體を精細に語るがよい。此等の注意を缺くと、應急手當の用意が整はず、手後れとなることがある。

一旦選擇した醫師は、あくまでも信賴して、萬事其の指圖に従ふがよい。病人が醫師を信賴すると否とは、疾病の恢復に大なる關係があるから、病人の傍では、醫師の技倆を疑ひ、不謹慎な言語や舉動があつてはならぬ。萬一合診を要する時は、主治醫にはかり、其の推薦によつて定めるがよい。

醫師來診時の心得

●醫師來診時の心得 醫師の來診に際しては、病狀を明細に語り、體溫・脈搏・呼吸・兩便等は疾病の診察に必要なものであるから、體溫表・病床日誌等を示すがよい。

診察が終つたならば、醫師に手洗湯・石鹼・タオル等を供する。

### 第三章 病人の衣食住

病室

●病室 病室は閑靜で空氣の流通がよく、明るくて、濕氣を帶びず、夏は涼しく、冬は暖かな所がよい。廣さは、六疊乃至八疊が適當である。副室があるならば、看護には便利である。

(1)溫度 室内の溫度は、攝氏十七度乃至二十度が標準であるが、貧血者や虛弱者の爲めには、之よりも稍高くしたがい。常に換氣に注意し、又火鉢や煖爐の上に水を入れた鐵瓶・金盞等を置き、水蒸氣を立てせて、空氣の乾燥を防ぐ。夏時室内を清涼にするには、(一)扇風器を設備すること、(二)氷塊を盆に盛つて臥床の附近に置くこと、(三)庭前に撒水すること等種々工夫を要する。

(2)換氣 病室は、呼吸・炭火・排泄物等の爲めに空氣が汚れ易いから、



少くとも、一日數回窓戸を開いて換氣をはかるべきである。但し、直接病人に風の當らないやうに、窓又は入口の方に屏風を引き廻し、寒冷の季節には、豫め病人の被衾を増しておいて換氣法を行ひ、窓戸を閉ぢた後、増した被衾を除く。

③掃除 掃除は毎朝病人の目覺めた後にする。病人を隣室に移し、十分窓戸を開いて清潔に掃除し、重病人で他に移すことの出来ない場合には、塵埃を避ける爲め、布片で病人の顔面を覆ひ、戸障子は雑巾で拭ひ、塵埃を飛散させないやうに注意すべきである。

④病褥 病褥は病室の中央に設けるのが普通であるが、狭い病室では一側に片寄せ、頭部を壁に接近させるがよい。病褥は、清潔と消毒とに便利な寢臺を選ぶやうにしたい。

床には藁蒲團を用ひ、掛蒲團には羽蒲團・毛布・軽い綿蒲團等を用ひ、清潔な白布で覆ふておく。白布は時々交換して清潔を保つ。

病褥

寢臺は木製の  
ものよりも金  
屬製のものが  
よい。

病人の衣服

### ⑤病人の衣服

病人の衣服は軽くて軟かな地質を選び、仕立は寛かなのがよい。發汗・失禁・吐物等により、汚れた時には、直ちに交換すべきである。すべて衣服・寢具等の交換は日中の暖かな時を選び、冬季は之を暖めて後になすべきである。重病人の衣服を交換するには、看病人は病人の右側に立ち、病人を左側臥位として帶を解き、右手の袖を脱がせて、半裸體とし、脱がせた衣服を病人の下に押し込み、新衣を右手に通させ、病人を右側臥位として舊衣を取り去り、新衣を引き出し、左手を通して帶を結ぶ。

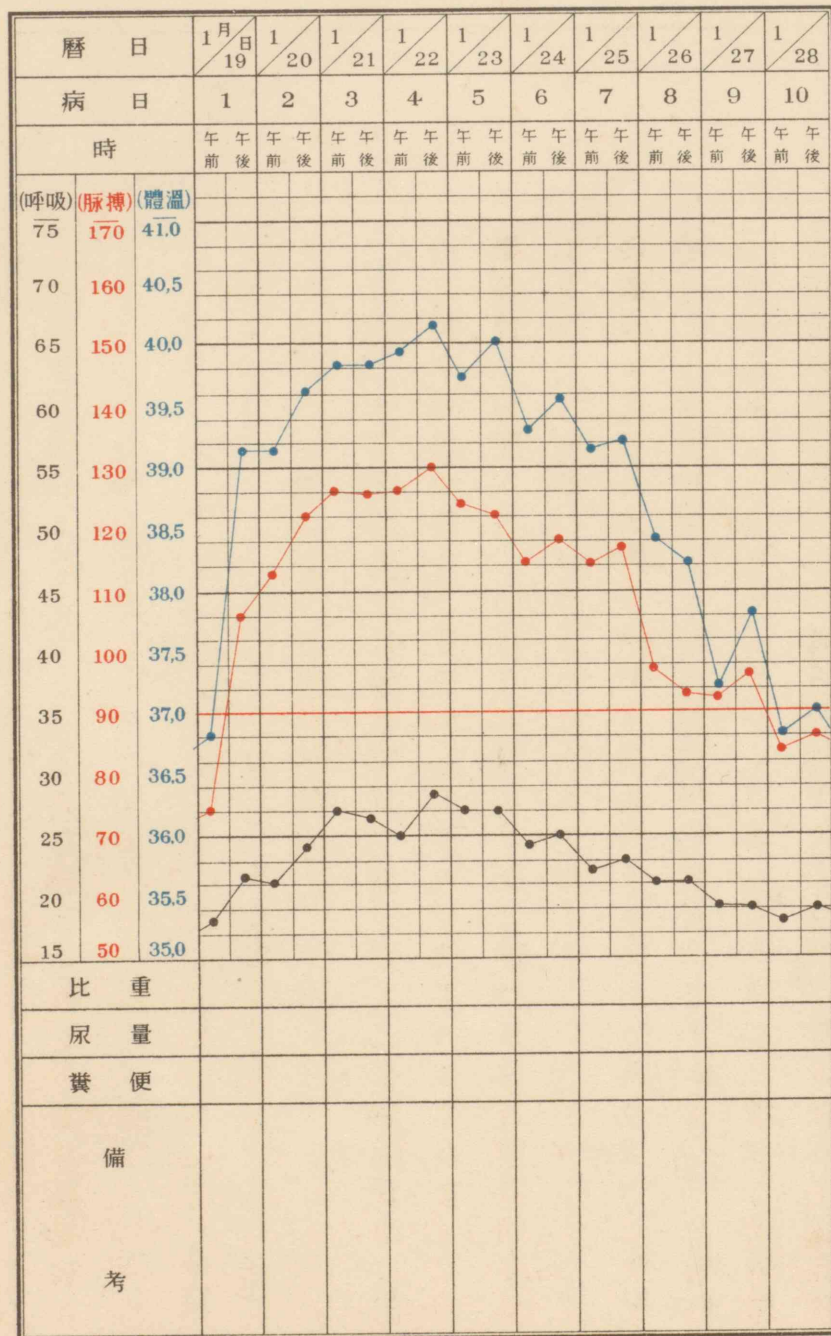
病人の食物

### ⑥病人の食物

適當な食物は病人の體力を維持し、病氣の回復を早めるものであるから、營養價值、消化の難易、病人の嗜好等を考慮して調理すべきである。然し、病氣の種類、容體の輕重により、食品の種類、分量、回數等を異にすべきであるから、すべて醫師の指圖に従ふを要する。食欲缺乏の病人には、食品の選擇、調理法、獻立等に



體 溫 表



一層注意し、攝取させるやうにつとむべきである。これは看病人たるもの、重要な任務の一つである。

## 第四章 介抱

### 第一節 病状の観察

看病人は常に病人の情態を観察し、測定して、之を病床日誌に記載し、醫師來診の際は、之を提出して参考に供すべきである。

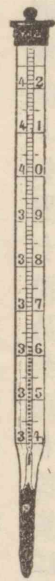
● 顔貌 病状はよく顔貌にあらはれる。赤熱、蒼白、苦悶の状を呈する等、異状のあつた時は特に注意を要する。

● 體溫 健康な大人の體溫は、攝氏三十六度三分乃至三十七度を常溫とし、小兒は之よりも二、三分高く、老人は之よりも二、三分低い。體溫が常溫以上に昇り、若しくは著しく下降した場合には、病氣の徴である。病人の體溫は普通午前七時頃が最も低く、午後五時



頃が最も高い。

検温に際しては、検温器をよく振つて水銀を全く降下させ、之を



検温器

腋下に挟む。一回の測定

時間は五分乃至十分間と

し、普通一日二回、午前八時と午後五時とにはかる。検温器には往  
往一、二分の狂ひのあるものがあるから、正確なものを用ひなくて  
はならぬ。

体温測定の結果は、之を体温表に記入し、其の経過を通覧する便  
に供する。

脈搏

●脈搏 健康な大人の脈搏は、一分間六十五搏乃至七十五搏が普  
通である。女子は之よりも稍多く、初生児は百四十搏を算し、五歳  
頃には百搏となり、成長するに従ひ、次第に其の數を減じて、大人に  
近づく。脈搏は、入浴、精神の興奮、神経作用等によつて増加するも



結代とは脈搏の不整にして一時休止するをいふ。

呼吸

呼吸困難に陥る時は鼻翼の顫動と喘音を伴ふものである。

のであるが、普通は發熱に原因することが多い。病人の脈搏は、體溫と共に病狀と極めて密接の關係があるから、其の測定は精密なるを要する。脈搏を測定するには、腕關節の内面拇指側でするのが常である。脈搏は其の數ばかりでなく、強弱、整不整をも検すべきである。二十秒間計算し、三倍して一分間の計測數とするのが例である。

大人にして脈搏が増加して百五十搏に達し、減少して五十搏以下となるか、又は不整結代を來す時は危険の徴である。

呼吸 大人の呼吸數は、一分間に十四回乃至十八回が常態で、初生兒は、三十五回乃至四十回で極めて不規則である。病人は其の病狀により、四十回乃至八十回、甚だしい場合には百回に及び、呼吸困難(呼吸促進)に陥ることがある。檢息は靜に手を胸部又は腹部に載せて數へる。呼吸困難の一種で、漸次増減する深呼吸困難と

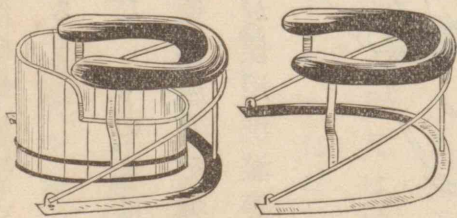
睡眠

無呼吸狀態とが交互に來るものを、シヤイネストック氏呼吸現象といひ、危篤の徴である。

睡眠 睡眠は病人の爲め最良の休息であるから、なるべく安眠させたがよい。病人が就眠したならば、周圍を一層閑靜にし、夜は燈火を覆ふて室内を薄暗くする。若し睡眠中に服藥檢溫攝食の時刻が來ても、強ひて目覺めさせるには及ばぬ。

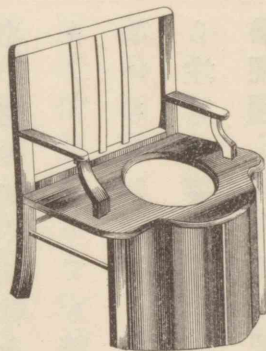
刺戟によつて目覺めても、直ちに睡眠し、長時間目覺めないものを嗜眠といひ、睡眠が持續して人事不省の如く、刺戟を與へても容易に目覺めず、たま／＼目覺めても精神が朦朧として人事を辨へないものを昏睡といふ。共に異常睡眠であるから注意を要する。

便通 病人の兩便も亦病症の診斷に必要なもの



器便良改





椅子式便器

のであつて、回数・分量・色澤・硬軟・異物の有無・臭氣等に注意を要する。  
重病人で上圖の出来ないもの、又は検便の必要あるものには、便器・尿器を與へる。便器には種々あるが、使用・洗滌等の

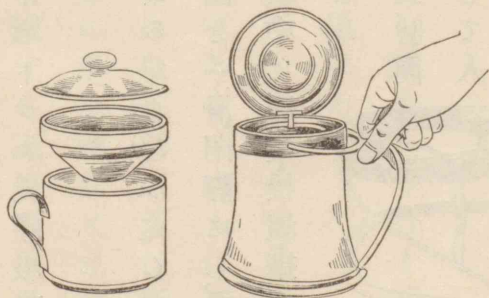
便利なものを選ぶべきである。

使用し終つた時は、直ちに室外に出し、病室内の換氣法を行ひ、傳染病人の兩便は必ず消毒しなくてはならぬ。

## 第二節 介抱

咳嗽

●咳嗽 咳嗽は、通常喉頭・氣管・肋膜・肺臟等の病の爲めに發するものである。喀出物を伴ふものを濕咳といひ、伴はないものを



壺

唾

乾咳といふ。喀痰は石炭酸水を入れた唾壺に吐かせ、又は紙片でとる。傳染病人の喀痰は消毒して後に棄てなくてはならぬ。

咳嗽の頻發する時は、稍枕を高くし、或は半臥の位置をとらせる。若し痰に血が交つた時は、醫師に報告すべきである。

嘔吐

●嘔吐 胃又は腸の内容物を吐き出すのを嘔吐といふ。嘔吐を

催した時は、速に受器を與へ、帶をゆるめて身體を寛かにし、左手で額を支へ、右手で靜に背をさすり、十分に吐かせる。氷片又は冷水は、嘔氣を醫する効があるから與へるがよい。吐き終つたならば清水で含嗽させ、吐出物は速に室外に出すべきである。

發汗

●發汗 氣溫が高く、被衾が重過ぎる時、神經機能が亢進した時、熱性病の場合等には發汗する。睡眠中の冷汗を盜汗といひ、呼吸器病人に多く見る現象である。病人が發汗した時は、被衾を脱がせないやうにし、發汗後は身體を拭ひ、衣服を更へさせ、感冒を防ぐ。



腹痛

④腹痛 腹痛は胃腸の疾患、食傷した時、消化不良の爲め腸内にガスの発生した時、又は寒氣の爲めに起るものである。病人を褥中に温保し、帶をゆるめ、身體を安靜にし、湯婆、懷爐等で温めるがよい。若し腹痛と共に下痢する時は、特に身體を安靜、温暖にし、食物は葛湯、粥汁の如き流動食を與へる。

痙攣

⑤痙攣 痙攣を起した時は、身體の一部又は全部の筋肉が硬くなり、無意識的に震動する。全身にわたる痙攣は多くは人事不省に陥る。此の場合には、病人を柔かな褥中に安臥させ、頭部を冷やし、舌を咬まないやうに保護し、手先、足先を温めるがよい。

虚脱

⑥虚脱 病人の生氣が著しく沈衰するのを虚脱といふ。病人は顔面蒼白となり、眼窩は陷没し、四肢は冷却し、脈搏は急速微弱となる。又體温は攝氏三十五度以下に下降して、冷汗を流し、精神は昏迷する。此の場合には、病人の頭部を低くして安臥させ、湯婆で身

褥創

挿畫

上下

陶器製湯婆

上左

ゴム製湯婆

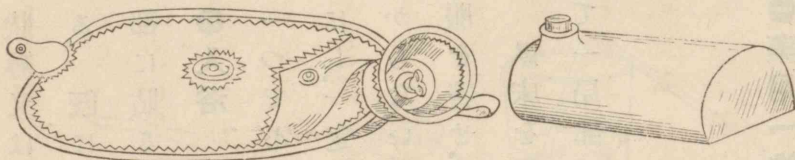
挿畫

下右

ゴム製

下左

綿製



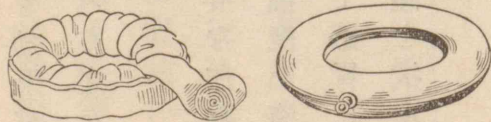
湯婆

體を温め、濃い茶、珈琲、温酒、卵黄にブランデーを混ぜたもの等を飲ませるがよい。

⑦褥創

病人が久しく臥床して、衰弱が加はり、動作が不自由となり、身體の一部にのみ壓迫を受けると、皮膚は赤色又は紫色を呈し、或は剝離することがある。之を褥創といふ。褥創は病苦を増し、病の経過を悪くするものであるから、看病人は、病人の身體を清潔にし、臥位を變へさせ、衣服や臥床に皺のないやうに注意すべきである。

褥創の徴候を認めた時は、其の局部を冷水又は冷水に少量の酢、酒精或は橙汁を混ぜたもので拭ふがよい。ゴム製環



褥環



入浴

状態又は綿を繃帯で巻いた綿製環状褥を當てることも効果がある。既に皮膚が破れた時は、硼酸軟膏を布片に厚く伸べて之を患部に貼るがよい。

⑧入浴 病人の身體を清潔に保つことは、看護人の主要な任務の一つである。入浴の出来る病人は、醫師の指圖に従ひ、溫度を適當にし、一定の時間入浴させるがよい。浴室は、戸を閉めて感冒にからないやうにし、浴後には乾いたタオルで手早く身體を拭ひ、衣服を着せ、臥床に入らせる。

臥床を離れることの出来ない病人は、手拭を熱湯に浸し、しばらく一局部づつ拭ふがよい。

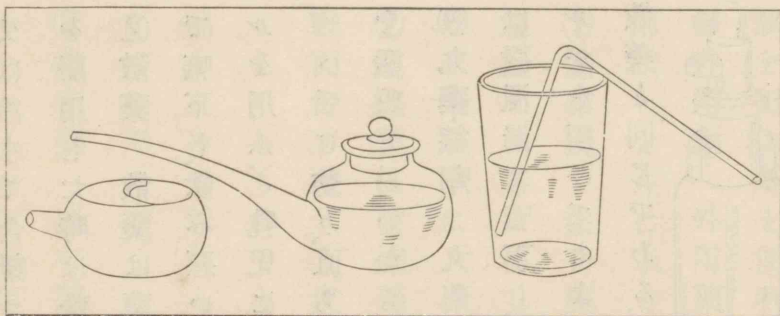
## 第五章 藥用

藥用一般の注意

①藥用一般の注意 藥劑の用法は最も大切なものであるから、醫

内服藥

水藥



管子硝

器吞吸

師の指圖に従ひ、適當の時刻に一定量を服用すべきである。藥劑は一定の場所に整頓し、他物と混在させず、瓶口は密閉し、其の上に白布を覆ふて塵埃のかゝらないやうにし、又内服藥と外用藥との區別を嚴にしなければならぬ。

②内服藥 内服藥には水藥、散藥、丸藥、錠劑、滴劑等の種類がある。

①水藥 水藥は藥劑を多量の蒸溜水に溶かしたもので、沈澱を生じ易い。故に、服用の際には、必ず藥瓶を振り盃又は藥匙に注いで用ふ。重病人には吸吞器、硝子管等で服用させるが便である。服藥後は微溫湯



散薬

丸薬・錠剤

滴剤

又は冷水で含嗽させる。苦味・酸味の強い薬剤を服用した時は、殊に其の必要がある。

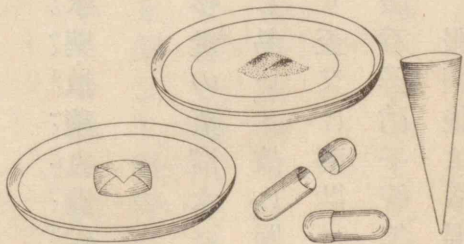
**②散薬** 散薬は薬を舌の上に載せ、水・微温湯等で嚥下し、飲み悪い薬はオブラート又はカプセルを用ふ。乳児には清潔な指先で薬剤を少量づゝ舌に塗り、直ちに哺乳させる。散薬は湿氣を吸収し易いから注意して保存するを要する。

**③丸薬・錠剤** 丸薬や錠剤は舌の上に載せ、水又は微温湯で嚥下し、決して嚙んではならぬ。オブラートかカプセルかを用ひてもよい。湿氣を受けないやうに保存すべきことは散薬と同じである。



滴剤瓶

**④滴剤** 滴剤は水又は砂糖水に適量を滴下して服用する。此の際滴



カプセルとオブラート

外用薬

塗布薬

塗擦薬

撒布薬

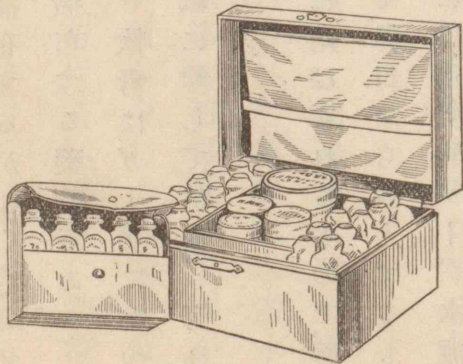
瓶を用ふると便利である。

**●外用薬** 外用薬も亦其の種類が頗る多い。其の主要な種類と用法とを左に示さう。

**①塗布薬** 塗布薬は薬液を患部に塗布するものである。薬液の適量を別器に移し、毛筆又は脱脂綿に浸して塗り、決して直接に毛筆を薬瓶中に入れてはならぬ。

**②塗擦薬** 塗擦薬は或る薬物を皮膚の表面から擦入し、皮膚の深部に透達作用せしめるものである。ガーゼ又は脱脂綿を丸めて球状とし、適當の分量を塗擦すべきである。

**③撒布薬** 撒布薬は、表在性の微傷にデアルマトールを撒布し、小兒の腋下・股間等



家庭薬箱



膏藥

に濕疹の生じないやうに亞鉛華澱粉を撒布するが如く、毛筆又は脱脂綿に附着させ、指頭で弾いて患部に撒布する藥劑である。

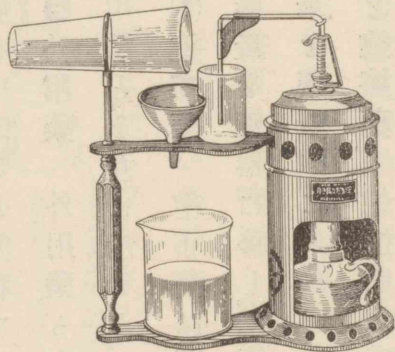
(4)膏藥 膏藥には軟膏と硬膏とがある。軟膏はガーゼに塗つて患部に貼り、硬膏は少しく暖め軟かにし紙に伸して貼る。何れも其の上を繃帶又は絆創膏で支へておく。

吸入藥

(5)吸入劑 吸入劑は主として呼吸器病に用ひられるもので、藥液

を蒸氣形として、鼻口から吸入するものである。藥液には重炭酸ソーダ水、硼酸水又は食鹽水を用ふ。

吸入を行ふには、蒸氣吸入器の湯釜に水又は湯を約三分の二入れ、アルコールランプに點火して之を熱し、沸騰させると、蒸氣の噴出によつて、別器の藥液は誘

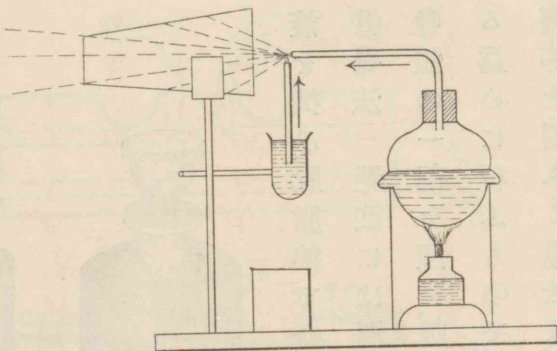


吸入器

湯の分量多き時は熱湯吹き出し危険である。

湯を入れると早く蒸氣が出る。

含嗽藥



吸入器の圖解

出されて飛散する。之を口中に吸入するのである。近來電熱應用の吸入器がある。これは點火・消火等の面倒なく輕便である。

吸入の際には、油紙・タオル等を胸・肩一面にあて、寢具・衣服等を濕さないやうに準備すべきである。

(6)含嗽藥 口腔又は咽喉内に病のある時は、食鹽水(一乃至二%)、過酸化水素水(三%)等の藥液で患部を消毒・洗滌するがよい。藥液の適量を別器に移し、口内に留めて含嗽する。幼者に對しては、布片又は毛筆に藥液を浸し、これで口内を拭ふがよい。

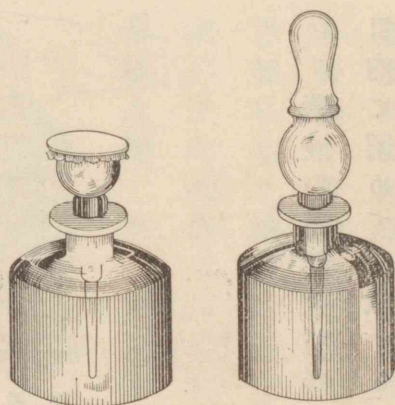


點滴藥

⑦點滴藥

點滴藥は、眼や耳の病に用ひられる。(一)點眼の際は病

人を仰首又は仰臥させ、左手で瞼を開き、右手に點眼瓶栓又は點眼管を持ち、其のゴムを壓して藥液を外眥に點入する。



器眼點と瓶藥眼點

液を拭ひ、脱脂綿で栓塞する。

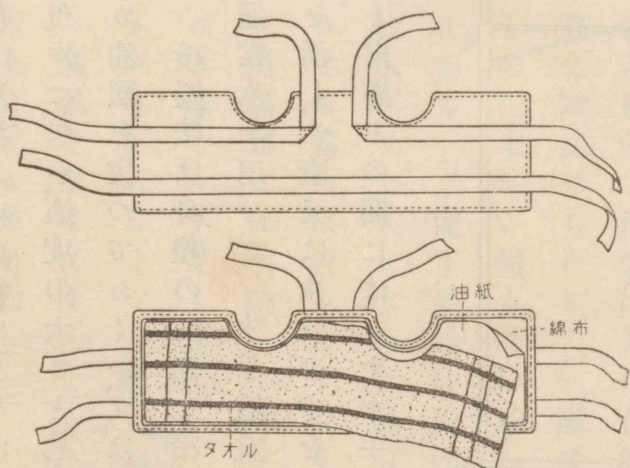
罨法

⑧罨法

罨法には溫罨法と冷罨法とがある。溫罨法は全身又は

身體の一部を溫め、吸収を促し、化膿を進め、時には局部に充血させる爲めに行ふもので、乾性と濕性との二種ある。湯婆・懷爐・溫石・燒鹽等を用ふる罨法は、乾性溫罨法の主要なもので、濕性溫罨法には、

單純性溫罨法・プリスニツツ氏罨法・巴布等の區別がある。(一)單純



具法罨氏ツッニスリプ

の疾患に用ひて有効である。

性溫罨法は溫湯又は溫藥液をガーゼ・タオル・フランネル等に浸し、軽く絞つて患部を溫めるものである。二、三十分毎に交換し、同一の溫度を長く保たせる。(二)プリスニツツ氏罨法は、綿フランネル・タオル等なるべく地厚の布を微溫湯に浸し、軽く絞つて患部にあり、水分の浸み出ないやう、亞麻仁油紙で蔽ひ、其の上を綿布で固定するのである。頸部・胸部・腹部等

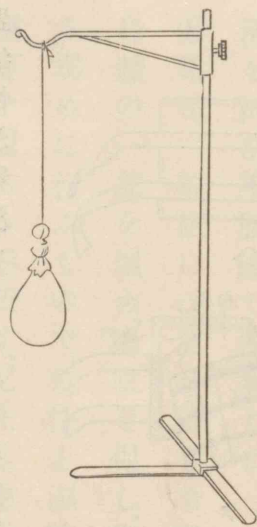
此の方法は濕布を體溫で自然に溫



めるのが特長であるから、乾燥しないやうに注意を要する。(三)巴布は米粉又は麥粉に水を注いで攪拌し、煮沸して粥状とし、直ちに布片に包み、適度の大きさとして患部に貼るのである。患部には豫め油類を塗つておくか、又は亞麻仁油紙を敷いて置くがよい。

氷枕を用ひる場合には水を充した後空気を排除しておく。

冷罨法は身體の一部を冷却して、消炎鎮痛をはかる方法である。通常氷を用ひる。氷を適宜の大きさに碎いて布片に包み、揉んで角を潰し、氷嚢又は氷枕の半を充たし、口を密閉する。氷嚢又は氷枕と皮膚との間には、タオル・手拭等を挟むがよい。



氷嚢

冷水を以て罨法を行ふには、布片を四重又は八重にたゝみ、冷水に浸し、軽く絞つて患部にあてる。別に同様の布片を冷水に浸しておき、二三分毎に交

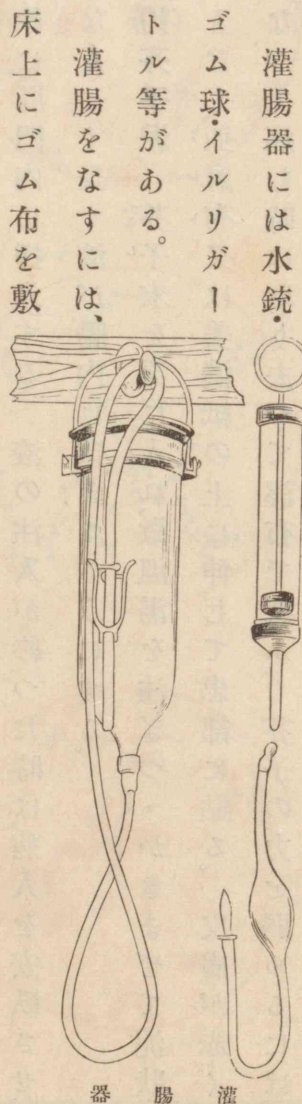
灌腸法

石鹼水は一%  
二三瓦  
グリセリン水  
はグリセリン  
を二倍に稀釋  
したるもの二  
〇乃至四〇瓦

挿  
水銃・ゴム管  
イルリガー  
ト

換するがよい。

(9) 灌腸法 灌腸は其の目的によつて、滋養灌腸・催下灌腸・藥液灌腸等に區別せられる。(一) 滋養灌腸は飲食物を口腔から攝取することの出来ない病人に行ふもので、大腸から滋養分を吸収させるのである。(二) 催下灌腸は腸内の不潔物を排泄させる方法で、通常石鹼水・グリセリン水等を用ふ。(三) 藥液灌腸は藥物を大腸から吸収させる爲めに行ふのである。



灌腸器

床上にゴム布を敷き、病人を仰臥又は側臥させ、肛門及び嘴管にワセリンを塗つて後、



イルリガート  
ルは高さ約一  
米の所に保持  
する。

芥子泥

傳染病

灌腸器から藥液を少しく注出して器内の空氣を排除し、嘴管を徐に肛門内に挿入する。液の注入が終つた時は、病人を安臥させ、なるべく長く液が腸内に留まるやうにする。

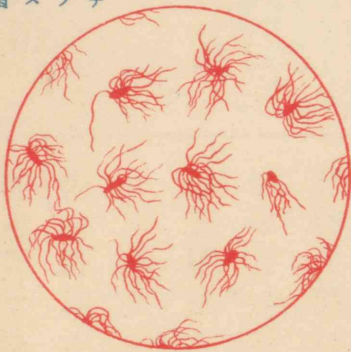
(10) 芥子泥 芥子末を器に入れ、微溫湯を注ぎつゝ、かきまぜて泥狀となし、亞麻布又は美濃紙の上に伸して患部に貼る。皮膚が赤くなつて痛む時は取り去つて濕布で拭ふ。芥子の力を弱めるには、メリケン粉を加へる。

## 第六章 傳染病と豫防・消毒

### 第一節 傳染病の種類

●傳染病 病原體が人體内に侵入して、發育繁殖し、其の結果起る病を傳染病といふ。病原體は病人の身體から出て更に他の健康者を侵し、傳播蔓延するものである。

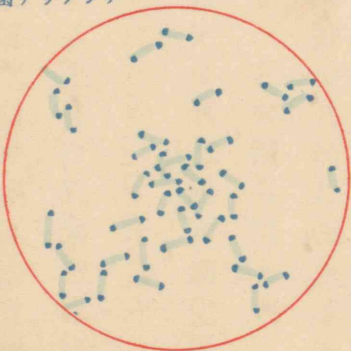
菌 ス フ チ



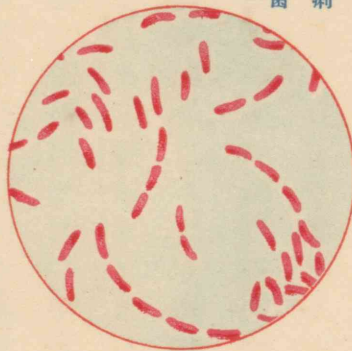
菌 核 結



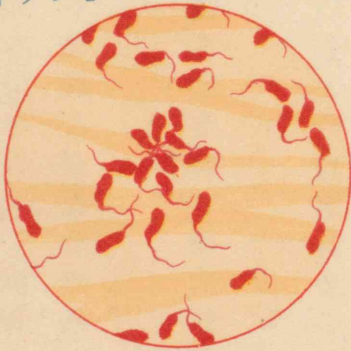
菌 ア リ テ フ ェ



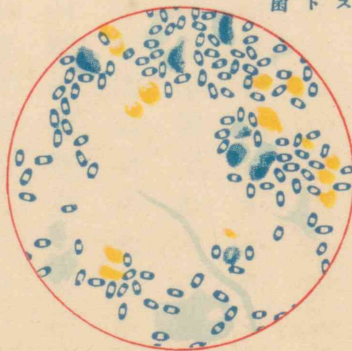
菌 痢 赤



菌 ラ レ コ



菌 ト ス ペ





保菌者とは外  
観健康なるも  
身體中に病原  
體を有し、尿・  
唾痰等から病  
原體を外部に  
排出するもの  
をいふ。

傳染病は左の條件が備はると成立し、其の條件でも缺けると發病しない。

①病原體 傳染病には、各其の原因たるべき微生物がある。例へば肺結核は結核菌、腸チフスはチフス菌が病原體である。病原體の病毒が強く、且つ其の數が多ければ多い程傳染力は大である。

②病原體保含物 病原體は、傳染病人の身體排泄物・衣服・使用した器具は勿論、保菌者・動物・食物・汚水・塵芥・水・土壤・空氣等にも存在する。

③侵入門 病原體が人體に侵入する門戶は、病の種類によつて大體きまつて居る。之を侵入門といふ。

(一)赤痢・コレラ・腸チフス等所謂消化器系統の傳染病。病原體は口から入る。

(二)肺結核・デフテリア・百日咳・流行性感冒等、所謂呼吸器系統の傳染病。病原體は吸氣と共に吸ひ込まれる。



傳染病の種類

(三) 猩紅熱・發疹チフス・痘瘡・麻疹等の發疹性傳染病。病原體は多くは未発見であるが恐らくは呼吸器から侵入するものと見做されて居る。

(四) 丹毒・破傷風・狂犬病等の如き創傷傳染病。病原體は創口から侵入する。

(五) マラリヤの如き昆蟲の媒介による傳染病。病原體のすべて皮膚から侵入する。

(六) 肺ペストは病原體は呼吸器から、皮膚ペスト及び腺のペストの病原體は皮膚から侵入する。

(4) 素因 遺傳・年齢・體質等によつて病原體に對する抵抗力がちがふ。各人の傳染病に對する弱點を素因といふ。

● 傳染病の種類 傳染病の種類は甚だ多く、其の侵入門によつて區別するのが合理的であるが、我が國の傳染病取締に關する法令

に基づいて區別するのが便利である。

(1) 法定傳染病 我が國の法令では腸チフス・パラチフス・赤痢・コレラ・デフテリア・流行性腦脊髓膜炎・猩紅熱・發疹チフス・痘瘡・ペストに對しては特別の取締をすることになつて居る。即ち此等の病を診察した醫師は、直ちに所轄の警察署に届け出る義務があり、病人は其の筋の監督の下に避病院で療養しなくてはならぬ。此等の傳染病を十種傳染病又は法定傳染病といふ。

(2) 非法定傳染病 麻疹・百日咳・流行性感冒・丹毒・格魯布性肺炎・水痘・破傷風・狂犬病・マラリヤ・肺結核・癩病・トラホーム等法定傳染病以外の傳染病を非法定傳染病といふ。此等は取締の効果を擧げることが困難であるか、又は傳染性の弱いものである。

● 主要傳染病 主要な傳染病に就て概要を述べやう。

(1) 腸チフス 病原體はチフス菌で、病人又は保菌者の排泄物によ

主なる傳染病  
腸チフス



つて汚された水・飲食物・物品又は蠅の媒介によつて健康者の口から侵入し、第二週以後は腸内に寄生する。

熱は第一週に於ては階段狀に上昇し、四十度以上に達し、第三週の半まで此の高熱を持続し、それから階段狀に下降し、第四週の終には平熱となる。舌は乾燥して煉瓦色を呈し、便通は始め秘結し、漸次下痢するやうになる。脈搏は熱に比し少いのが其の特異點である。

パラチフス

②パラチフス 病原體はパラチフス菌で、傳染經路は腸チフスと同じである。症狀は腸チフスに類似して居るが、それよりも軽く経過が早い。

赤痢

③赤痢 病原體は赤痢菌又は赤痢アメーバで、病人の糞便中に存在し、健康者の口から侵入して大腸に寄生する。

此の病は熱は餘り高くはないが脈搏數は比較的が多い。下痢には腹痛を伴ひ、一回の分量は少いが回數は多く數回に及ぶ。便には粘液・血液、時に

コレラ

は濃汁を混じ、排便時にはシホリがあるのが特異點である。  
④コレラ 病原體はコレラ菌である。病人の排泄物中に存し、健康者の口から侵入する。

普通は激しい下痢に初まり吐瀉頻回、下痢は腹痛を伴はず、便は米の泔汁の如きものである。水分は缺乏し、皮膚は皺多く、眼は凹み、脈搏は微弱で頻數である。口唇や手指の尖端は紫藍色を呈し、手足は冷え、聲はかれ、忽ちにして危険に陥る。

デフテリア

⑤デフテリア 病原菌はデフテリア菌で、病人又は保菌者の唾・咳・鼻汁等に存在し、接觸媒介物又は空氣によつて傳染する。主として七歳以下の小兒が侵される。

突然の發熱と共に嚔下困難・咽喉痛等を訴へ、頭痛・全身倦怠等の症狀がある。此の病の特徴たる犬の遠吠の如き咳を發し、時々呼吸困難で苦しみ、甚だしくなると遂に窒息することもある。療法は一刻も早く血清注射を受けることである。



流行性腦脊髄膜炎

(6) 流行性腦脊髄膜炎 病原體は流行性腦脊髄膜炎菌で、病人の咽喉・鼻に存在し、唾液・鼻汁によつて排泄される。之が接觸又は飛沫吸入によつて鼻腔及び咽頭の粘膜から侵入する。

熱は急に四十度内外に昇り、烈しい頭痛・脊髄痛・眩暈・嘔吐を加へ、特徴としては痙攣を起し、口が開かず、頭は前に回らなくなり、脊柱全部は弓狀に強直となつて後方に反り返る。精神は朦朧となり、譫言<sup>たごん</sup>を發する。一、二週にして腦及び心臟麻痺により死ぬることが多い。

猩紅熱

七歳以下の小兒が犯され易い。

(7) 猩紅熱 病原體は不明であるが、病人の分泌物・排泄物・皮膚の落屑中に存在し、接觸・飛沫吸入等によつて傳染する。

熱は發病と共に急に四十度以上に昇り、五、六日間高熱が持續し、十日位で降り、頭痛殊に嘔吐を訴へ、咽頭炎を發する。發病の當初から頸・四肢・軀幹の順序に鮮紅色の斑點があらはれる。熱は五、六日で降り、落屑し始める。治療時には、手足は手袋・足袋を脱ぐ如く剥げるのが此の病の特徴である。

發疹チフス

(8) 發疹チフス 病原體は不明であるが、接觸傳染の外、蚤・虱・南京蟲

痘瘡

等の媒介によるものと見做されて居る。

熱型其の他の症狀は腸チフスに似て居るが、發病三、四日頃から軀幹に發疹し、漸次手足に及ぶのが此の病の特徴である。病の初めから非常な頭痛と筋肉痛とを訴へ、精神は朦朧となり、時には躁狂狀となる。

(9) 痘瘡 病原體は不明であるが、病人の皮疹殊に膿胞及び落屑中に存在して居るものと認められる。接觸・飛沫吸入等によつて傳染するの外、空氣からも傳染する。

發病の當初、熱は三十九度乃至四十度に達し、第四日目から下降し、全身一齊に發痘する。第九日目に熱は再び上昇し、痘は化膿し、第十一日目から熱は下降し、始め痘は結痂する。痘は圓形で痘臍を有し、癍痕を残す。

(10) ペスト 病原體はペスト菌で、病人の喀痰・血液・腺腫竝に糞尿等の中に存在し、接觸・飛沫吸入等によつて傳染するの外、鼠又は蚤によつて媒介される。皮膚の小さい創傷や口腔・鼻腔等の粘膜から侵入し、又は直接肺臓に吸入されて侵入する。

ペスト  
ペストには肺  
ペスト、腺  
ペスト、皮膚  
ペストの區別が  
ある。従つて  
侵入門を異に  
す。



マラリア

病に罹ると突然戦慄により熱は四十度に昇り、病の経過や熱の昇降が烈しく、脈搏は百五十を算するやうになる。全身倦怠を感じ、頭痛、眩暈、嘔吐を訴へ、精神朦朧となる。概ね二日乃至七日で心臓麻痺か敗血症で死ぬる。

(11) マラリア 病原體はマラリアプランスモデウム胞子蟲で、アノフェレス屬の蚊が病人の血液を吸ひ、他の健康者を刺す爲めに傳染する。

挿畫  
キユーレックスは普通の蚊でアノフェレスはマラリア蚊である。静止した時の態様を示す。



毎日午前十時から午後三時迄の間に發作的に劇烈な戦慄を起し、體溫が急に上昇して四十度乃至四十一度に達し、二時間乃至五時間を経て多量の

發汗と共に急速に下熱する。此の發作は毎日來ることもあるが、二、三日おきのこともある。

此の病にはキニーネと稱する特效藥があつて、適當の時機に適量を服用すると速に治するものである。

肺結核

(12) 肺結核 病原體は結核菌で、病人の血液と侵された組織中とに存在し、喀痰中に最も多く含まれ、唾液中にも存在し、病の末期には糞尿からも排泄される。直接間接に口や鼻から侵入する。

症狀には種々あつて、急に高熱を發するもの、急に喀血するもの等あるも、多くは不知不識の間に此の病に罹り、治療の期を失し、遂に回復し難い重症となるものである。

第一期は午後三時頃平熱よりも二、三分高い發熱があり、稍倦怠を覺え、肩が凝り、盜汗がある。

第二期は前の症狀が進み、熱が高くなり、せきが多く出で時々喀血する。

第三期は全身痩せ、呼吸は困難となり、頑固な下痢がある。遂に衰弱して死ぬる。

本病は十五歳乃至三十歳の人に殊に多く、死亡率が漸次増加する傾向あるは、社會衛生上憂ふべきことである。

(13) トラホーム 病原體は不明であるが、結膜分泌物に含まれて居

トラホーム



て接觸傳染をすることは確かである。此の病に罹ると、眼瞼特に上眼瞼及び結膜面が充血し、所々に灰白色の楕圓形の顆粒が出来る。病が進むと睫毛が亂れ、角膜も侵され、甚だしきは潰瘍くわいやうを起し失明するやうになる。

## 第二節 傳染病の豫防

抵抗力の増大

●抵抗力の増大 病原體に對する抵抗力を増大するには、身體の強健をはかるが第一である。即ち榮養を良くし、暴飲・暴食を慎み、適度の運動をする等攝生に注意しなくてはならぬ。

媒介體の撲滅

●媒介體の撲滅 傳染病を媒介する蚊・蠅・蚤・南京蟲・虱・鼠等を驅除し、保菌者は一定の期間一定の場所に隔離して治療させる。

侵入門の防護

●侵入門の防護 病原體が吾々の身體に侵入する門戸を防護し、侵入させないやうにする。

(一)呼吸器系統の傳染病に對しては、口・鼻をマスクで蔽ひ、時々含嗽

をなし、感冒にかゝらないやう注意すること。

(二)消化器系統の傳染病に對しては、飲食物は殺菌したものをを用ひ、暴飲・暴食を慎み、過熟又は腐敗した果物を食せず、食器類は熱湯で消毒すること。

(三)創傷系傳染病に對しては、皮膚を大切にし、外傷を受けないやうに注意し、若し受けた時は直ちに傷口をコロジオンで塞ぐこと。

豫防注射

●豫防注射 傳染病に罹つて全治すると、病原體に抵抗する抗毒素を生じ、或る期間は再び感染しない性質、即ち免疫性を得るものである。此の理を應用した豫防法にワクチン注射・血清注射・種痘等がある。故に傳染病のある時は、豫防注射又は接種を受けておくことが安全である。

病人の隔離

●病人の隔離 病人は病原體の培養所であるから、速に隔離を要する。法定傳染病にかゝつた時は隠蔽せず、避病院に入り、法の規



病原體の撲滅

定に従ひ療養し、隔離前に病人の使用した衣類・器物・病室等は十分に消毒し、非法定傳染病で自宅治療が出来る場合に於ても嚴重に病室を隔離すべきである。肺結核に罹つて居る人は、他人に傳染させないやう公衆衛生に留意すべきである。

●病原體の撲滅 病原體保含物には、よく消毒を施し、病原體の撲滅をはからなくてはならぬ。其の消毒法は次節で述べる。

### 第三節 傳染病の消毒

焼却

●焼却 病人の寢衣・寢具・繃帶等病毒に汚染した物件を焼却する方法で、殺菌力が大であり、極めて安全な方法である。動物の死體・傳染病人の排泄物・塵芥等に應用される。

煮沸消毒

●煮沸消毒 消毒物を沸騰しつゝある熱湯中で、半時間以上煮沸し、殺菌する方法である。病人の衣服・寢具・食器等の如く、熱に堪へるものに應用される。

蒸氣消毒

●蒸氣消毒 高熱蒸氣の殺菌力を利用して病原體を殺滅する方法で、攝氏百度以上の氣熱で一時間以上煮沸する。衣類・寢具及び器具類の氣熱に堪へるものに應用される。

藥物消毒

●藥物消毒 石炭酸水・クレソール水・昇汞水・生石灰・鹽化カルシウム水・ホルマリン等の藥を用ひて消毒する方法である。

使用の際十分之を振盪すること。

①石炭酸水 石炭酸水は防疫用石炭酸三、水九七の割合である。諸種の消毒に用ひられる。吐瀉物や排泄物の消毒には、同容量を加へて充分かきまぜ、二時間以上放置しておき、衣類・寢具等は、二時間以上浸漬しておいて後に清水で洗濯する。又器具・室内の消毒には石炭酸水で拭ひ、又は石炭酸水を撒布して後清水で洗ふのである。

②クレソール水 クレソール水は、クレソール石鹼液三、水九七の割合である。其の用途や使用上の注意は石炭酸水と同じである。



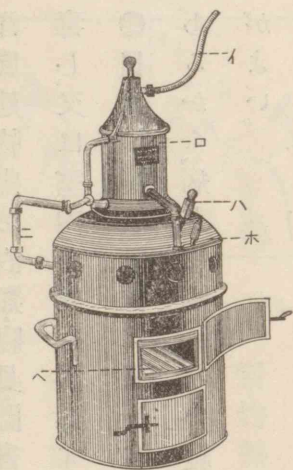
③昇汞水 昇汞水は昇汞一、普通の食鹽一、水一〇〇〇の割合である。死體や病人に接觸した人の手足、器具、其の他室内各部の消毒に用ふ。但し、金屬類を腐蝕するから、金屬器に貯藏したり、金屬製品に消毒に用ひてはならぬ。毒がはげしいから、飲食器具や玩具又は飲料水に滲透するやうな場所の消毒には用ひないやう注意すべきである。又蛋白質を凝固させるから、吐瀉物や排泄物の消毒に用ひても其の効果はない。

④生石灰 生石灰に少量の水を加へ、病人の排泄物、便槽、肥料溜井戸、汚水等の消毒に用ふ。井戸、汚水等の消毒には、水量の五十分の一を投じ、十二時間以上放置しておく。病人の排泄物には、容量の三十分の一以上を投じ、二時間以上放置しておく。乾燥して居る場所の消毒には役に立たない。

石灰乳は生石灰二、水八の割合である。使用量は、消毒すべき物

吐瀉物や排泄物に用ひても蛋白質を凝固させ消毒の効果がない。

挿 畫  
イ、ガス放出管  
ロ、ホルマリンを入れる  
ハ、水を入れる  
ニ、水準器  
ホ、水を入れる  
ヘ、火爐



ホルマリンスガス発生器

品容量の五十分の一以上である。乾燥せる場所にも使用して効がある。

⑤鹽化カルシウム水 鹽化カルシウム水は、鹽化カルシウム五、水九五の割合である。井戸や汚水の消毒には、水量の五十分の一を投入し、十二時間以上放置し、病人の排泄物には、容量の五十分の一以上を加へ、二時間以上放置するを要する。

⑥ホルマリン (一)ホルマリン水は、ホルマリン一、水三四の割合である。衣服、寝具、器具、室内各部の消毒に用ふ。病人の吐瀉物や排泄物に用ひても効果はない。

(二)ホルマリンは又噴霧狀とし或は適當の裝置によつてガスを發生させて用ふ。此の消毒法は、密閉することの出来る消毒函内や



洋風建物内で、衣類・寢具・圖書・革製品・紙製品・塗物類・ゴム製品等を消毒し、又は室内各部を消毒するに適する。

日光消毒

⑤ 日光消毒 細菌は日光に當て、乾燥させると死滅するものであるから、病人に觸れない寢具でも時々日光にさらして消毒するがよい。

第七章 應急手當

打撲傷

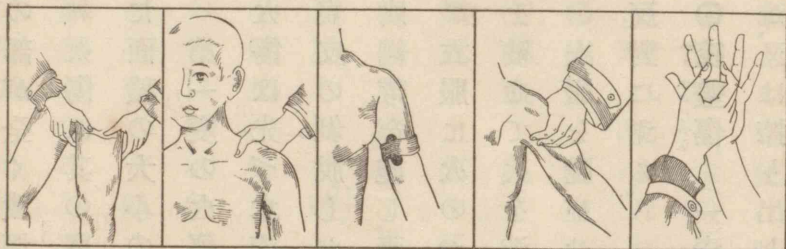
腹部の打撲は内出血・内臓震盪を起し易い。

創傷

① 打撲傷 打撲傷は皮膚が破れず、皮下に出血して膨隆し、暗紫色となり、疼痛を伴ふ。直ちに冷罨法を施して充血・腫起を防ぎ、(一)骨の折れた時、(二)傷の大きい時、(三)腹部の打撲等は、直ちに醫師の診察を受けるが安全である。

② 創傷 創傷には切創・割創・刺創・裂創・擦過創等の區別がある。創傷を受けた時は、創傷部から血液が漏出し、又は創傷部に病毒の侵

火傷



止血法

入するのを防ぐが急務である。出血を止めるには、直ちに創口から心臓に近い部分を緊縛し、消毒液に浸したガーゼで創口を壓迫し、冷水か氷かで冷罨法を施すがよい。止血後は消毒ガーゼを當て、油紙で被ひ、脱脂綿をあて、繃帯しておく。

③ 火傷 熱湯・火熱・熱固體等に原因する外傷を火傷といふ。(一)皮膚が單に發赤充血し、疼痛灼熱があり、腫脹の軽いものを第一度火傷といひ、(二)皮膚の處々が剝脱して水疱を生じ、漿液を含むものを第二度火傷といひ、(三)皮膚の一部が全く燒盡し、灰白色・褐色・黃色又は黑色炭化様の痂皮をつくり、感覺を失ひ、或は其



身體の三分の二以上侵されたる時は生命を失ふことが多い。

咬螫傷

の部が全く潰爛したものを第三度の火傷といふ。火傷は其の度の進んだ程危険であるが、生命上には、寧ろ侵された面積の大小の方が關係が深い。第一度の火傷には油類を塗布し、又は冷罨法を行ふ。第二度の火傷は先づ水疱を消毒針で刺し、液を漏出させ、次に冷罨法を行ふ。表皮の剥脱した時は、硼酸軟膏を貼るがよい。第三度の火傷は防腐繃帶を施し、直ちに醫師の診察を受けるが安全である。衣服に火のついた時は、速に床上又は地上に倒し、毛布又は蒲團を被せて火を消し、後多量の水を注ぐ。衣服を脱がせるには、健康部を先、患部を後にし、着せる時は之と反對にする。

咬螫傷 (一)毒蟲に螫された時は、手早く創口から毒を吸ひ出すか、又は搾り出し、薄いアンモニア水で洗ひ、繃帶を施す。(二)毒性の

出血

劇しい毒蛇に咬まれた時は、患部の上下の血行を止める程度に紐で緊縛し、毒液の擴がるのを防ぎ、直ちに醫師の手當を受ける。(三)狂犬に咬まれた時は、血清療法を受けるがよい。

出血 出血には衄血、咯血、吐血の三種ある。

(一)衄血 鼻から出血した時は、靜に仰臥させ、頭を少しく高くし、(一)鼻翼の上部を暫時拇指と示指とで摘んで壓迫し、(二)酢か明礬かを加へた冷水で鼻腔を洗ひ、(三)前額鼻上等に冷罨法を施す。頭部を前屈したり、嘔をしたり、又は粗暴に鼻汁をかむことはよくない。

(二)咯血 咯血は肺臟又は氣管支の出血で、咳嗽と共に咯出され、其の色は鮮紅色で、泡沫がある。此の場合には衣帶をゆるめ、上身を高くして安臥させ、濃い食鹽水を飲ませ、次に冷水を與へるがよい。胸部には冷罨法を施す。

(三)吐血 吐血は胃又は食道の出血である。其の色は暗褐色か暗



溺没

赤色かで、絮狀に凝固して居る。此の場合には、安臥させて、水か氷かを少しづつ、與へ、且つ心窩に冷罨法を施す。

●溺没 溺没は一種の窒息死で、水や泥が氣道中に入つて、呼吸を妨げ、酸素の供給が絶えるから起る。

溺没者に對しては、(一)速に濡れた衣服を脱がせ、(二)指に布片を巻きつけて口中の泥土汚物を拭ひ、(三)伏臥の位置とし、溺者の腹を救



溺没者の當手

助者の膝の上に當て、又は枕様のものを胃部に當て、此の部を高くし、頭部を下げ、脊部を壓すと、氣道と胃中の液體は流れ出る。(四)次に仰臥させて、衣服を去り、紙より羽毛等で咽喉鼻中を掻き、湿布で胸部を打つて見る。なほ意識が回復しない時は、人工呼吸法を施す。

溺没者に水を吐かせる。

人事不省

す。(五)目覺めたならば、毛布湯婆藁火等で徐々に身體を温める。

●人事不省 過激の勞働、烈しい精神感動、甚だしい出血、飢餓、腦貧血、腦充血、日射病又は腸チフス、疫痢等の經過中に於て、精神機能の一時廢絶するを人事不省といふ。

人事不省になつた時は、(一)適當の位置に臥かせ、(二)衣帶をゆるめ、

(三)顔面に冷水を吹きかけ、(四)頭部・心臓部に冷罨法を施す。(五)呼吸が廢絶した時は、人工呼吸法を施す。(六)意識が回復した場合には、赤酒又は温かな茶等を與へ、湯婆を以て身體を温めるがよい。

(1)腦貧血 腦貧血は、先づ顔面が蒼白色となり、生あくびを發し、惡心、嘔吐を催し、眩暈、視力乏失等の前兆があり、遂に知覺を失つて卒倒する。卒倒した時は、換氣を良くし、頭部を低くして仰臥させ、意識が回復した時は、赤酒・日本酒等の興奮性飲料を與へる。

(2)腦充血 顔面は紅色となり、結膜は充血し、頭痛、眩暈、嘔吐を訴へ、

卒倒とは起立又は跪座せるものが人事不省に陥つて倒れるをいふ。



中毒

耳鳴を覚え、眼前に閃輝せんきを感じる。重症であると痙攣を發し、時に失心することがある。室内の通氣をよくし、頭部を高くして安臥させ、頭部に冷罨法を施し、足部は温める。

③日射病 極暑の激しい日光の直射を受けると、時として人事不省に陥ることがある。此の場合には涼しい所に頭を高くして臥かせ、衣服を脱がせ多量に冷水を與へる。

ハ中毒 藥品・食物・ガス等の化學的作用によつて種々の病を起し、時には死ぬることもある。(一)阿片魚毒等の麻醉性の中毒は、身體の麻痺精神の昏瞑等を發し、(二)硫酸・苛性カリ・昇汞水等の刺戟性の中毒は、口腔腸胃に激痛を感じ、或は吐血する。

毒物を嚥下した時は直ちに吐かせることが肝要である。指を咽頭に挿入すると、概ね嘔吐を催するものである。又非常に多量の飲料を與へると、毒氣を稀くし、又嘔氣を促す上に効果がある。

第八章 繃帶

中毒は危険であるから、醫師の手當を受けるが安全である。

繃帶

繃帶材料

木綿繃帶の種類

①繃帶の目的 繃帶は(一)布片で創口を被ひ、外部から病菌の侵入するを防ぎ、種々の障害を防禦すること、(二)外用藥を貼つた場合には、其の滑轉脱落を防ぐこと、(三)創縁を軽く壓迫して創口を集合させ、或は局部の出血を止めること、(四)骨折脱臼等の際、適當の位置に整復した後、位置の移動しないやうに支持すること等の目的で施すもので、其の用途は頗る廣い。

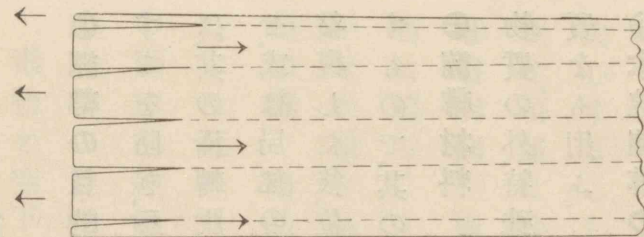
②繃帶材料 繃帶材料は、ガーゼ・脱脂綿・木綿・亞麻仁油紙等の軟性物質の外、特殊の場合には、木材・鐵板・ボール紙・革・硬ゴム等の硬性物質をも用ふ。

③木綿繃帶の種類 木綿繃帶で最も廣く用ひられるものは、卷軸



巻軸帯

布の耳を除くは、繃帯の一方に此のものが附着して居ると患部の一方が強くしめつけられるからである。



繃帯の裂き方

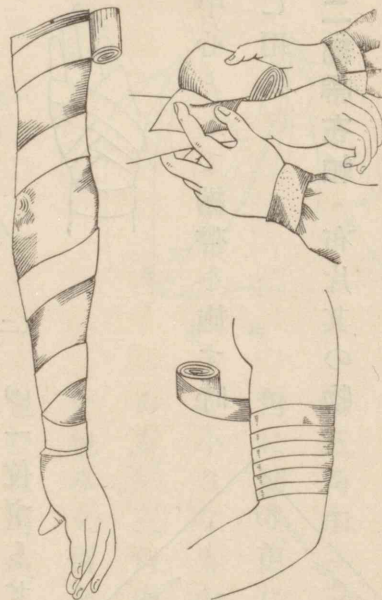
帯と繃帯布帛とである。

(一)巻軸帯 巻軸帯は白木綿を裂き圓柱狀に卷いたもので、二裂・四裂・五裂・六裂・八裂等の種別がある。其の用ひ方は種々あるも、左に説明する基本型を合併し、連續使用して初めて一局部の繃帯を行ふことが出来るのである。故に、基本型をよく理解しておく、他の複雑なものも、困難なく卷けるやうになる。

(1)環行帯 一般の繃帯は環行帯に始り、環行帯に終る。其の方法は初めに卷いた上に正しく次に來る繃帯を重ねるのである。

(2)螺旋帯 繃帯を少しづつ、ずらせて螺旋狀に卷く。ずらせ方は先行の繃帯の三分の一乃至二分の一である。腕の如く卷くべき

挿畫  
右上、環行帯  
右下、螺旋帯  
左、蛇行帯



巻軸帯の用ひ方 (一)

部分の太さが略一樣な所に多く用ひられる。

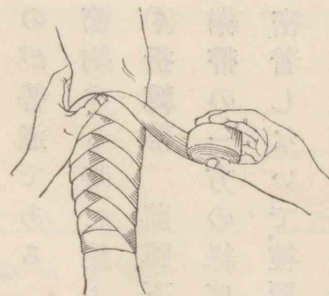
(3)蛇行帯 一種の螺旋帯であつて、繃帯が互に重ならないやうに卷くのである。各帯の間隔は繃帯の幅だけあける

のが普通である。脱脂綿やガーゼを一時固定するか、又は繃帯を節約する時に用ふ。

(4)折轉帯 前膊下腿の如く太さのちがふ部位に螺旋帯を施すと、繃帯の一方の縁ばかりが甚だしく緊張し、他方は却つて先行帯に密着しないで、被覆の目的を達せず、容易に弛緩滑脱を來すものである。故に、緊張の不平等となつた所で繃帯を斜に折り返し、其の



挿畫  
右、折轉帶  
左、麥穗帶



(二) 方ひ用の帶軸卷

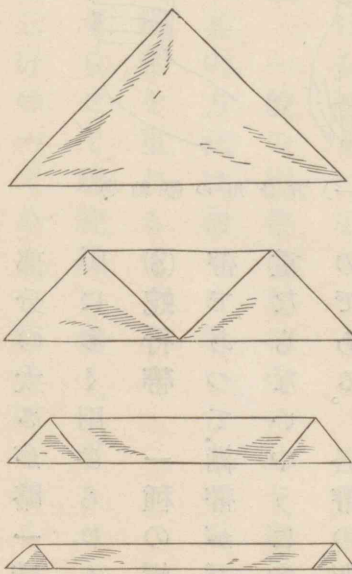
裏面を外方に、表面を内方に向けて後患肢を一周し、必要に應じて此の操作を繰り返すのである。折轉部は常に一直線上にあるやうにし、皺を作らないやう注意することが肝要である。

⑤ 麥穗帶 繃帶を8の字を描きつゝ、三分の一位ずらせて巻く。手甲又は關節部を

繃帶布帕

中心として繃帶を施す時に用ふ。

(二) 繃帶布帕 布片其の物を用ひて、繃帶の用を辨ず



方り折の巾角三

繃帶施用上の注意



巾角四



巾角三

るもので、三角巾、四角巾等の區別がある。

(1) 三角巾 三角巾は、大幅金巾を其の儘四角に切り、更に之を斜に半切したもので、其の小さなものは更に之を半切したものである。三角巾は其の儘で頭部・手足・腰部等を包み、又臂を吊り、手甲・足蹠等にあて、眼を包むに用ふ。

(2) 四角巾 四角巾は各邊約一米の四角な布片である。三角巾よりも應用の範圍が狭い。

④ 繃帶施用上の注意 繃帶は、其の施し方

が適當でないと、不快なばかりでなく、或は血行を妨げ、或は脱落して其の効果を收め得ない。手際よく施すには相當の熟練を要す



る。故に、平素之が練習をしておくべきである。

## 第九章 特別の手當

### 回復期の注意

●回復期の注意 病が漸く癒え、回復期に入つた時は、特に養生法に留意しなくてはならぬ。

(1)食物 回復期は食欲が進み、動もすると過食に陥り、消化器を害し、回復上に一頓挫を來すことがある。故に、食物の種類や分量には注意を怠つてはならぬ。

(2)運動 醫師に許された範囲内で、適度に運動し、決して過度に陥つてはならぬ。

(3)精神の慰安 精神の慰安は、治病に極めて密接な關係がある。徒に精神を勞するのは回復の妨害となる。

(4)轉地 轉地は環境轉換の爲め、心身の保養に効果があるもので

### 危篤者の取扱

あるから、醫師に相談して決定するがよい。

●危篤者の取扱 危篤者の容體は、病の種類によつてちがふけれども、(一)呼吸が不規則となり、呼吸が多くて吸氣が少く、或は雷鳴様の音を發し、(二)脈搏は不整微弱、數へにくいやうになり、(三)顔面は蒼白となり、下瞼及び下顎は下垂して面貌變異し、(四)手足の運動に力がなく、(五)兩便失禁し、四肢冷却する等の徴候を呈するのが常である。此等の徴候があらはれた時は、直ちに醫師を招き、最も懇切に看病し、靜に其の命を終らすべきである。

### 死者の處理

●死者の處理 病人が死亡した時は、(一)醫師の診斷を受け、消毒藥で全身を拭ひ、身體を整へ、眼瞼を閉ぢ、口を結ばせ、被衾を薄くしておき、(二)醫師の診斷書を添へ、其の筋に届け出で、死後二十四時間を経ってから埋葬する。(三)傳染病の場合には、迅速に其の筋に届け出で、消毒、火葬等すべて法規に従つて處理すべきである。



## 第二篇 養老

### 第一章 精神の慰安

老人の精神作用

●老人の精神作用 老人は既に社會國家に對して其の義務を盡し、一家の經營や子女教育に對する本務を果した、最も尊敬すべき人である。然るに、老人の精神作用は、吾々とは餘程ちがつた傾向を有するものであるから、其の點に留意して奉仕しなくてはならぬ。さうでないとい徒に感情を害し、誠意の徹底しない場合がないでもない。

- (1) 老人は過去の古い事實は比較的明確に記憶して居るが、新らしい事實の記憶は甚だしく鈍い。
- (2) 聯想作用は單純で、同一の事をくりかへす風がある。
- (3) 思考の範圍が狭くて、自己中心に傾き易い。

精神の慰安

- (4) 感情が變化し易い。
- (5) 頑迷固陋で自己の意志を容易に枉げない風がある。

●精神の慰安 老人の精神現象は、其の神經中樞が既に老衰し、其の細胞が破壊されたことに原因するのであるから、常人の如くに取扱ひにくいのは當然である。細胞の破壊は最早恢復させることは出来ないから、老人の精神を過勞させないで、細胞の破壊を防ぐやうにすることが養老の根本問題である。家族は老人のいふ所が多少不合理であつても、誠意と同情とをもつて之に對し、安らかに餘生を樂しませることが肝要である。

老人は年々歳々親交のある朋友を失ひ、世に出て爲すこともないので、常に無聊を感じるものである。故に、其の心を勵まし、詩歌・音樂・書畫・骨董等の嗜好があるならば之を樂ませ、又時々舊友を招いて快く饗應することもよい。又新聞・雜誌等を好むならば之を



供給し、或は之を讀みきかせ、徒然を慰めるのも一方法である。  
老人は經驗に富んで居るから、家政上のことはつとめて相談し、其の意見を聴くがよい。殊に老婦人の多くは、家事に携はりたるものであるから、其の心持を察し、好意を受けて差支ない。何事にも干與させないのが慰安の唯一の方法であると思ひ誤つて除外すると、却つて老人の感情を害し、親愛の情に悖るものである。たゞ餘り必要もない心配事は知らせないがよい。

## 第二章 身體の保養

老人身體的特徵

老人は身體諸機關の機能が衰へて、新陳代謝も鈍く、氣候の變化にも犯され易く、病に對する抵抗力も薄弱であるから、身體の保養には細心の注意を要する。

衣服

●衣服 老人は生活力が鈍く、新陳代謝の作用は衰へ、體溫は壯年

食物

者よりも稍低いから、寒氣を感じることが大である。故に、其の衣服は軽く暖かなものが適當である。肌着は、軟かな木綿類・フланネル等が適當であり、其の他は、絹織物が適當である。經濟上許さない家庭では木綿類の中で地質の軟かなものを選ぶべきである。  
(1) 老人の衣服は、常に清潔に注意し、垢のついた汚れたものを用ひないこと。  
(2) 老人は容貌が引き立たないから、外貌の整正に一層の注意を拂ひ、衣服の色合・柄合等は老人の意に適つたものを選ぶべきこと。  
(3) 肩掛頭巾・手袋・足袋等も、老人の好むものを選び、不自由のないやうにすること。

●食物 老人の食物は、榮養に富み、消化し易いものを選び、其の嗜好に適するやうに調理すべきである。

(1) 食物は老人の嗜好にもよるが、一般からいふと蛋白質よりも、寧ろ



居室

ろ含水炭素を多くするのが至當である。又果物・菓子等は適宜に食事中に加へてもよい。

(2) 老人は一回に多量を食するよりも、適當の量を數回に食するのを好むものであるから、三食の外に適當な間食を與へるがよい。

(3) 刺戟性の飲食物を過量に用ひるのは害があるから、適量に止めておくやうにしたい。

●居室 居室は閑靜で日當りがよく、庭園に面した所がよい。二階は、昇降に不便であるばかりでなく、危険であるからよくない。室内の裝飾は、老人の嗜好を察して優雅なものを選び、便所は必ず居室の附近に設くべきである。

運動

●運動 老人は運動不足に陥るものであるから、朝夕近隣の散歩を勧め、又花見・納涼・觀月・神社・佛閣の參詣等に誘ひ、外出の機會を多くさせることは、心身の保養上に大なる効果がある。その他、子守

睡眠

や家政上のことで自ら進んで之に當らうとせば、喜んで托するがよい。運動の爲めにも無聊を慰める上にも有効である。

●睡眠 睡眠は心身の休養上必要であるから、なるべく多くの時間を與へ、夜具は軽く暖かに調製し、敷布は屢洗濯して氣持よく就寢させるべきである。

第三篇 育 兒

第一章 婦人衛生

女子の特別な生活

●女子の特別な生活 女子としての特別な生活は、月經機能の開始から其の閉止に至る期間で、約三十ヶ年である。月經機能持續の長短は、人種・氣候・遺傳・體質・榮養狀態等によつてちがふ。

(一) 青春期 普通十二歳から十九歳までの間、平均十四、五歳で月經機能が始



まる。此の時期を青春期といふ。

(二)成熟期 身體の各機關は、二十歳から二十二、三歳の間で成熟する。妊娠は三十二歳前後に最も多い。

(三)更年期 四十五歳乃至五十歳で月經機能は全く閉止する。此の時期を更年期といふ。

凡そ人の生涯中、何れの期間でも輕重の別はない。然し、青春期以後の三十年間は、心理的にも生理的にも、女子の特質を發揮する最も意義ある重要期間であるといふことが出来る。而して其の身體の健否は家庭の安寧幸福に大なる關係があるばかりでなく、延いては、國運の隆盛にも影響を及ぼすものであるから、女子は平素から其の健康の増進に注意するは勿論、月經開始前から特別の攝生法を心得ておくことが肝要である。

(1)月經 月經は子宮の出血で、生理的現象である。二十八日即ち

四週間毎に反覆するのが常規であつて、三日乃至七日間持續するものである。

(2)排卵 排卵とは、成熟卵が、卵巢から離れて排出される作用をいふ。來るべき月經前十二日乃至十六日の間に於て行はれる。

(3)月經と排卵との關係 卵が成熟して、排卵期に近づくと、子宮内では卵を止めて孕育する準備の爲め、子宮粘膜は肥厚し、其の血管は充血し、粘膜は柔軟となる。成熟して卵巢から排出された卵が喇叭管に入つても、受精しない時は、子宮内に充血した血管は破れ、粘膜の表面を破つて子宮外に流出する。これが即ち月經である。月經後四、五日乃至一週間で粘膜は舊態に復する。受精しなかつた卵は月經血に混じて流出するが、受精した卵は子宮の内壁に附着し、發育して胎兒となるのである。

婦人衛生上の注意

受胎は喇叭管内でする。

●婦人衛生上の注意 女子は自己の身體の機能については相當



の知識を収得し、不攝生に陥らないやう注意すべきである。

(1) 月経前は多少體溫に變動あるのが常である。従つて、寒冒に犯され易いから大に注意すること。又月経時には感情が激し易く、判斷を誤る人が多いから、此の種の人は特に自制を要する。

(2) 月経時には、脱脂綿、適當な衛生帶、丁字帶等を用ひて處置すること。

(3) 月経中は特に身體を清潔にすること。長い入浴はよくないが、新らしい湯に、暫時入浴するのは差支ない。

(4) 月経中は、過激な運動は避けること。殊にダンス等はよくない。

(5) 月経困難の場合、又は月経中異常の腹痛、頭痛等ある場合には、専門醫の診斷を受けること。

(6) 月経時でなくとも、常に腹部以下を冷さないこと。なるべくゾロースを用ふるがよい。

## 第二章 妊娠

妊娠

身體上の變化

●妊娠 受精卵が子宮内に包容され、胎兒として發育する状態を妊娠といふ。

(一) 身體上の變化 妊娠になると身體上に種々の變化があらはれて来る。

(1) 月経の閉止 妊娠すると、以後月経は閉止する。

(2) 體溫・脈搏 妊婦の平均體溫は、平時よりも二、三分高く、脈搏は一分間に平均八十を超えることがある。

(3) 呼吸器 鼻粘膜に充血を來し、衄血を起することがある。子宮膨大の結果、横隔膜が上昇するから、呼吸の短促を來す。

(4) 消化器 食慾は一時は減退するが、やがて回復し、妊娠後半期には著しく増進する。屢嗜好に變化を來し、酸性のものを好む。又妊娠中には、早朝空腹時に惡心嘔吐を催すことがある。殊に妊娠前半期に於て多く且つ強い。唾液の分泌は増加し、便秘し易い。



⑤皮膚の變化 一般に浮腫せる如くに見え、顔面は少しく痩せ、其の色は蒼白で、黄色を帯び、眼窩の周圍に暗色の輪が出来る。中には全く變化なく、却つて肥満し活潑となる人もある。

⑥乳房の變化 妊娠第二ヶ月頃から、充血腫脹し、乳腺も亦漸次肥大増殖し、乳房は著しく緊張する。之を壓搾すると、漿液性の初乳が出る。乳暈は暗黒色となり、漸次擴大する。

⑦胎動 妊娠第五ヶ月以後は、胎兒の運動を感知するやうになる。以上の外、頭痛、齒痛、腰痛等、身體各部の疼痛を覚え、便通は、秘結或は下痢し、口腔には潰瘍を生じ、齒齦炎を起すこともある。尿意は概ね頻繁となる。

(二)精神上的の變化 妊娠は精神上にも亦種々の變化を起すものである。平素活潑な人が憂鬱となり、沈着な人が快活となることもある。概して氣分が變化し易く、容易に怒り、泣き、笑ひ、又著しい原

## 精神上的の變化

## 妊娠の持續日數

因のないのに、神經をなやますことがある。

●妊娠の持續日數 妊娠の持續日數は、四十週即ち二百八十日が普通である。妊娠の一ヶ月は、太陽曆の一ヶ月と異なり、二十八日であるから、四十週は妊娠十ヶ月に相當する。之を基礎として分娩の時期を算定するのである。

最終月經の第一日から起算し、二百八十日に相當する日を出産豫定日とする。通常最終月經の月數に九ヶ月を加へ、又は三ヶ月を減じて分娩月とし、最終月經の第一日に七日を加へて分娩日と推算する。例へば五月四日を最終月經の第一日とすると、五月から三月を減じて二月を得、之を出産月とし、四日に七日を加へ十一日を得、之を出産日とするのである。即ち翌年二月十一日が出産豫定期日となるのである。又最終月經の第一日を二月五日とせば、二月に九月を加へて十一月を得、之を出産月とし、五日に七日を加へ十二日を得、之を出産日とする。即ち其の年の十一月十二日が出産豫定日となるのである。



## 第三章 胎兒の發育

胎兒の生活機能

●胎兒の生理的機能 受精卵が子宮の粘膜に固着すると、粘膜は、卵を被包し、卵は外面の絨毛から栄養分を攝取する。第二ヶ月末には絨毛は消失し、胎盤が形成される。胎兒は其の腹壁から胎盤に通ずる臍帶によつて酸素・栄養分を取り、排泄物を返還する。即ち胎盤は胎兒の呼吸・栄養・排泄の三作用を営むものである。

胎盤は其の質が海綿の如く、鬆粗で、扁圓形又は橢圓形を呈し、血管に富み、重量は約五百五十瓦である。臍帶は、胎兒の臍輪から出で、胎盤の胎兒面に附着し、其の長さは、普通胎兒の身長に等しく、二個の臍帶動脈管と一個の臍帶靜脈管とを有する。臍帶動脈管は、胎兒の體內を循環して、暗赤色となつた血液を胎盤に輸送する。胎盤では毛細管となり、血液は、其の中を流れる間に、母體から酸素と栄養分とを攝取し、不必要な成分を母體の血液に與へ、鮮紅色となつて、臍帶靜脈管に集まり、臍輪から胎兒の體內に入り、循環して

兒の發育を遂げさせる。

卵膜中の液は羊水といふ。羊水は初めは透明な水の如き液であるが、後には胎兒の排泄物により、混濁して白色又は帶黃色となり、一種の臭氣を有するやうになる。弱アルカリ性で少量の蛋白質・無機鹽類・水等を有し、其の量は約一立である。

羊水は胎兒と胎盤とに受ける壓迫を防ぎ、血液の循環に障礙の起らないやうにし、又胎兒の運動を自由にし、且つ之を母體に柔かく感じさせ、胎兒の皮膚の密着せる處又は胎兒と卵膜と密着して居る所の癒着を防ぐ。出産に際しては、其の粘滑性によつて胎兒の産道通過を容易にさせる。

胎兒發育の順序

●胎兒の發育 胎兒の發育は正しい順序を逐ふものである。第

一ヶ月の終には、全卵の大きさは鳩卵位であるが、第二ヶ月の終には鶏卵大となる。第三ヶ月の終には身長は約八厘、頭・軀幹・四肢等を分つことが出来る。全卵の大きさは鵝鳥卵に等しい。此の時期から以後を胎兒といふ。



第五ヶ月の終には、身長は約二十四糎となり、妊婦は胎兒の運動を感知することが出来る。此の頃から始めて皮下に脂肪が現はれ、皮膚は厚くなり、皮脂を分泌する。なほ全身の皮膚に毳毛せいきうが生ずる。

第七ヶ月の終には、身長は約三十五糎、體重は約一疋となる。第七ヶ月以前の胎兒は未熟胎兒といひ、若し産出されても數時間又は一、二日で死ぬる。第八ヶ月以後十ヶ月の半までの胎兒は早熟胎兒といひ、産出されても哺乳宜しきを得ば育つ。

第八ヶ月の終には、身長は四十糎、體重は一・五疋となり、皮膚は紅色を呈し、毳毛密生し、顔面には皺があるが、第九ヶ月末には、全身が肥満し、皺はなくなる。身長は四十五糎内外、體重は二・五疋ある。第十ヶ月の終には成熟胎兒となる。

## 第四章 妊娠中の攝生

身體的攝生

●身體上の注意 妊娠は生理的機能であつて、疾病ではないのであるから、其の間の攝生法も亦平常の攝生法と變りはないのである。然し、妊娠中は抵抗力が著しく減弱し、病に罹り易いから、平時よりも一層注意しなくてはならぬ。

### (一)衣服

(1)衣服はなるべく寛濶なのがよい。季節に應じ、充分に保温の目的を達し得るものを選ぶべきである。窮屈な衣服を着し、紐や帶で胸部や腹部を壓迫することはよくない。

(2)腹帶は保温の目的と胎兒の位置を保つ爲めに、廣い布片を緩かに纏ふのはよいが、徒に舊慣にとらはれて、腹帶を強く締めるのは胎兒の發育を妨げてよくない。



(3) 腹部・脚部は常に冷えないやうに注意し、メリヤス製の股引又は  
ズロースを着用するがよい。

### (二) 食物

(1) 食物は平素の好みに従ひ、栄養分に富み、なるべく消化し易いもの  
を攝り、酒類は勿論濃い茶・珈琲其の他刺激性の飲料は避けたが  
よい。

(2) 酸味の強い未熟な果物はよくないから、十分に熟して甘味ある  
ものを食すべきである。

(3) 妊娠の初期には通常食欲が減退し、或は悪心・嘔吐を催し、遂に病  
的となることがある。なるべく消化し易い食物を適當に攝取す  
るがよい。

(4) 母の食物の善悪は、直接に胎兒に影響を及ぼすものではないが、  
母の血液が胎兒の發育に充當されるのであるから、其の栄養の良

否は、間接に胎兒の發育に影響を及ぼすものである。故に、栄養に  
は一層の注意を要する。

### (三) 居室

(1) 居室は平家の閑靜な所がよい。空氣の流通・日光の射入をよく  
し、溫度を適當に調節するを要する。二階は昇降に不便であり、又  
危険が伴ふから避けたがよい。

(2) 廊下や板間に長時間腰をかけ、又は敷物なしで座るのはよくな  
い。

### (四) 運動

(1) 妊娠中は常に適度の運動をするがよい。氣候のよい晴天の日  
に屋外を散歩するのは、精神を爽快にするばかりでなく、食欲を増  
進し、便通を整へる上にも効果が多い。

(2) 健康な妊婦が屋内に靜臥して居るのは、却つて害がある。屋外



散歩の外、家庭の仕事进行处理するのは、適當の運動となるものである。故に、平素慣れたことならば、妊娠第八ヶ月頃までは之を續けても害はない。

(3) 駆けたり、跳躍したり、重い物を提げ、荷なひ、高所に物を上げ下げしたりする、激しい運動若しくは腹壓を高める動作は害がある。

又長途の旅行は避けなくてはならぬ。

(五) 入浴 入浴は、一日一回位が適當である。長時間の入浴は害がある。

(六) 睡眠 睡眠は心身の休養に必要であるから、夜ふかしをしたり、殊更に早起をしたりすることなく、睡眠時間を十分とるがよい。

●精神上の注意 妊娠中は、神経が過敏となるものであるから、家人は妊婦に家事上、職業上已むなき場合の外、心配をかけないやうにすべきである。妊婦は、無益な心配や取越苦勞をせず、精神を調

精神上の注意

稗史とは小説  
的の歴史をい  
ふ。

産兒に對する  
準備

出産に對する  
準備

産室は、八疊  
位にして副室  
あらば最も便  
なり。

## 第五章 出 産

### 第一節 出産の準備

●産兒に對する用意 妊娠第八ヶ月に入ると、生兒の衣服、襦袢、寝具等を用意しておく必要がある。

●出産に對する準備 産室は勿論、必要諸品を準備しておく。

(1) 産室 産室は閑靜で、日當空氣の流通がよく、適當な廣さの室がよい。狭い室であると助産婦、醫師其の他附添人の出入、生兒の取扱消毒等に不便が多い。冬季は成るべく攝氏二十度近くの溫度



を保たせるやうにしたい。

②必要諸品 出産時に必要な用具・用品は、手ぬかりなく取り揃へておくことが肝要である。

産時用蒲團・油紙數枚・ゴム布(約一米角一枚)・晒木綿(二、三反)・脱脂綿(約二疋)・ガーゼ(二、四反)・青梅綿(二包)・小さい掛蒲團・フランネル製股引・胞衣納器・差込便器・瀬戸引手洗鉢・三乃至五個・バケツ(二、三個)・イルリ・ガートル・小判形湯盥・石鹼・急須・吸湯婆(二、三個)・氷嚢(二個)。

薬品としては、アルコール・リソール・水・オレーフ・油・食鹽・葡萄酒・硼酸末等。

③身體上の用意 出産豫定日に近づいた時は、特に身體の清潔・攝生に留意し、精神を平靜に保ち、時の至るのを待つべきである。

## 第二節 出産

①出産 妊娠の期間が満ち、胎兒が母體外に排出される作用を、出産といふ。出産は、陣痛に始まり、後産の産出で終る。

身體上の注意

出産

正規出産の経過

陣痛は、出産時に周期性に反復して來る子宮の收縮で、常に疼痛を伴ひ、之により分娩が開始し、経過し、且つ終局するものである。

②正規出産の経過 正規出産の経過は之を左の三期に分ける。

①開口期 出産の準備期で子宮口の全開までの間をいふ。

②産出期 子宮口の全開から胎兒産出までの間をいふ。

③後産期 胎兒の産出後から胎盤の産出するまでの間をいふ。

出産の時間は、初産婦と經産婦とでちがひ、又人によつてもちがふ。初産婦は九時間乃至十八時間、平均十五時間が普通である。

其の時間の大部分は開口期に費され、産出期は、二時間半、後産期は、半時間である。

經産婦の出産時間は九時間以内、平均七時間が普通で、産出期は一時間、後産期は半時間位である。

③出産上の注意 出産の作用は多くは天然の力によつて平易に

出産上の注意



終るものであるが、異状を生じた場合には、速に醫師を招くが安全である。  
妊娠の末期から、經驗に富む看護婦を雇ひ入れておくが便利である。

## 第六章 産褥と攝生

産褥

●産褥 出産が終つて後、妊娠・出産の爲めに、著しく變化した身體情態が、妊娠以前の舊態に復するまでの期間を産褥といふ。産褥は胎盤の産出と共に始まり、六週間に八週の後に終るのが普通である。たゞ乳腺だけは復舊しないばかりでなく、益増大して乳汁を分泌する。

妊娠中變化の最も著しいものは子宮で、胎兒の産出によつて二分の一に收縮し、胎盤の産出によつて更に縮小する。其の後陣痛

惡露の區別  
(1)血液性惡露  
(2)漿液性惡露  
(3)白色惡露

産褥中の攝生

と共に次第に收縮し、産後約十日乃至十二日で全く骨盤内に入つてしまふ。

産後子宮の内面から出る一種の臭氣ある分泌物を惡露といふ。最初の二、三日間は血液中に粘液や卵膜の殘片を混じ、三、四日後になると血液は稀薄となり、七、八日後には血色が消失し、粘稠白色の液となり、三、四週後になると分泌は止まる。惡露のなくなつたのは、子宮の内面の創が殆んど癒えた證である。

●産褥中の攝生 産褥期間は身體の復舊する大切な時期であるから、産婦は特に攝生に注意すべきである。

(1)精神の安靜 産褥中は、妊娠中と同じく、神經が過敏である。故に、精神感動を惹き起すやうな原因から成るべく遠ざかり、つとめて安眠をなし、丈夫に肥立を待つべきである。

(2)身體の安靜 産褥の第一週は褥中に安臥し、殊に最初の一、二日



産褥期は六週  
乃至八週と  
す。

間は仰臥し、経過が良好であるならば、第三日目から左右交互に側臥をしてもよい。第二週の初めからは、食事・授乳・排尿・排便の際短時間ならば床上に坐つても差支はない。離褥は第三週間後に於てし、日常の仕事は、産褥期が過ぎた後に始めるがよい。

③清潔 室内はよく掃除し、衣服・身体は清潔を保ち、悪露で汚れた部分は消毒薬で拭ふがよい。勿論、此等は助産婦や看護婦が注意して其の任に當るべきである。入浴は、産後三週間以上を過ぎ、全く悪露のないやうになつた後にすべきである。

④食物 産後二、三日間は、牛乳・スープ・鶏卵おも湯等の流動性食物がよい。四、五日を経て、腸胃が整つた後は、粥・刺身等の消化し易い食物を攝り、更に一週間を経て、他に故障のない時は、漸次常食に移るが安全である。

⑤便通 便通は産後三、四日はないのが普通であるが、若しこれ以

上ない時は、灌腸をする。之を怠ると子宮の復舊作用が遅延する。

## 第七章 初生兒の取扱

初生兒の身體  
情態

初生兒とは生  
後三―四週間  
以内をいふ。  
體重の減少は  
栄養攝取の不  
足・胎糞・尿の  
排泄による。

●初生兒の身體情態 月が満ちて生れた初生兒の身長は四十九  
厘内外、體重は三疋内外である。初生兒の多くは、出産後、第三、四日  
迄の間に、二百瓦乃至三百瓦の體重が減少する。

軀幹・四肢共に肥滿し、皮膚は赤色である。毳毛は殆んど消失し、  
僅に項部と背部とに存するばかりである。生後三、四日經つと表  
皮の落屑むくげを起し、數日で止む。皮膚の外氣に對する抵抗力は極め  
て弱い。骨は軟かで、頭蓋骨は、其の諸骨の縫合が未だ十分でなく、  
骨と骨との間に空隙が残つて居る。此の空隙を顱門くもんといふ。

體溫は大人の平均體溫よりも二、三分高く、且つ變化し易い。脈  
搏は百二十搏乃至百四十搏、呼吸は四十位で不整である。



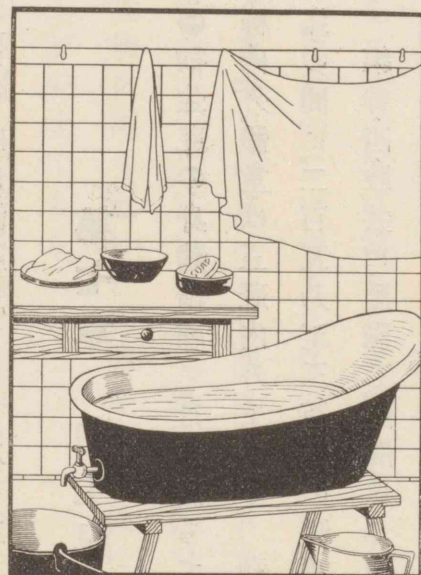
初生児の取扱  
臍帯

●初生児の取扱

初生児の取扱要領は左の如くである。

(一)臍帯 臍帯は、其の搏動の止むのを待ち、消毒した絹絲又は麻絲で緊縛して後に切斷し、亞鉛華澱粉・シツカロール・滑石粉末の類を撒布し、脱脂綿・ガーゼ等で被ひ、臍帶を施さなくてはならぬ。

臍帯は生後五日乃至十日で脱落する。此の間腹部を摩擦して



入浴準備

はならぬ。脱落后も亞鉛華澱粉を撒布しておくがよい。創痕は十日乃至十四日で收縮し治癒する。

(二)入浴 産湯は助産婦の仕事である。目・口・耳鼻等は特に注意して不潔物に觸れさせないやうにし、之

入浴

挿入  
上より  
(1)入れるところ  
(2)入れたところ  
(3)背の洗ひ方



(一)方せきの浴入



(二)方せきの浴入



(三)方せきの浴入

温度は攝氏三十八度位が標準である。

入浴の際は、湯で前頭部や顔面を濕ほし、腦の血管を弛緩させておくがよい。

左手で兒頭を支へ、左右の耳殻を壓迫し、浴湯の外耳道に入るのを防ぎ、頭部以外の全身を浴湯中に浸し、右手に持った軟

に用ふる湯は別器に用意しておくがよい。以後毎日一回乃至二回溫浴を施す。湯の



かな布で洗ふのである。入浴時間は、十分間以内が適當で、浴後は、直ちに全身を拭ひ、寒氣に觸れさせないやうにする。

入浴の時間は、午前十一時頃から午後二時までの間がよい。夕方氣溫の下降して居る時に入浴させると、寒冒にかゝる危険があるから避けなくてはならぬ。

(1) 初生兒の皮膚、就中、頭部・顔面には皮脂を生ずることが多く、洗滌を怠る時は、瘡痂が出来る。故に入浴の際は、刺戟の少い石鹼で十分洗滌するを要する。若し皮脂の出来た時は、オレーフ油の如きもので柔げて置いて後、石鹼で洗ふべきである。

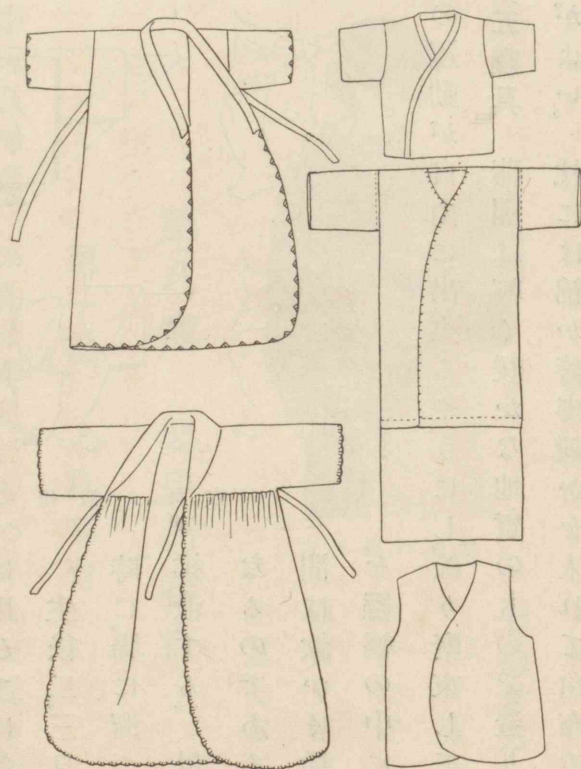
(2) 腮、下腋、股間等はたゞれ易いから、入浴後丁寧に拭ひ、亞鉛華澱粉を撒布しおくがよい。

(3) 口腔を清潔にする爲め、入浴毎に拭ふ人もあるが、粘膜を破る虞があるから避けたがよい。

衣服

### (三) 衣服

肌着には、保温性に富む軟かなガーゼ・木綿・綿フランネル



嬰 兒 の 衣 服 一 揃

等がよい。色は白地を選ぶべきである。衣類はなるべく寛濶に仕立て、襦袢は縫目を裏返しとし、皺のないやうに着せ、後紐を前で軽く結ぶ。

身體全部を均一に保温するのが理想である。

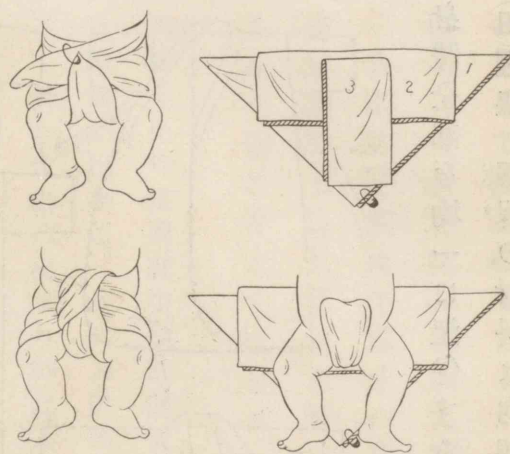
(四) 襦袢 襦袢の材料は内部は木綿、外部はフランネルがよい。大

襦袢



襁褓のさせ方  
順序  
右上一  
右下二  
左上三  
左下四

寝具



襁褓のさせ方

の運動が自由に出来るやうにし、餘り緊束してはならぬ。  
(五)寝具 蒲團は軽く暖かな地質のもので造り、綿を厚くしておくがよい。枕には綿か蕎麥殻かを入れて白布で覆ふておく。極寒には湯婆を用ふるがよい。

小を成るべく多く調製し、交換を怠らず、湿つたものや汚れたものは用ひてはならぬ。  
生後二、三日間は、母胎に在つた時に、腸に溜つた汚物、即ち、胎便を排泄する。母乳は自然の下劑となるのである。胎便を排泄する間は軟かく揉んだ紙又は脱脂綿を襁褓の中に敷く。襁褓は下肢

初毛

(六)初毛 初毛は軟かな頭部を保護するものであるから、剃らないがよい。頭部はよく洗ひ、清潔にしておくべきである。



抱き方の嬰兒

(七)抱き方 初生兒の骨は軟弱で歪み易いから、抱く時は脊骨を平に支へ、内臓を壓迫したり、血行を妨げたりしないやうに注意しなくてはならぬ。

## 第八章 嬰兒の養育

### 第一節 人乳哺育

母乳哺育

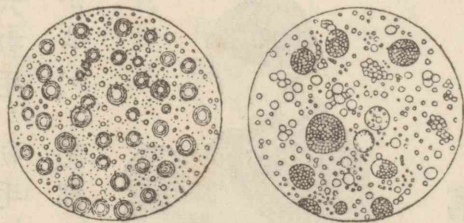
●母乳哺育 母乳は嬰兒にとつては天授の食物である。母乳は新鮮・清潔・無菌であつて、之に依つて養育された嬰兒は、傳染病に對する抵抗力が強く、下痢を起すことが少い。死亡率の如きも、人工



哺育の嬰兒に比べると遙に少い。

母乳は水分・蛋白質・脂肪・含水炭素・無機鹽類・ビタミン等から成り、嬰兒の成長に最も適切な營養力を有するばかりでなく、適當の溫度と風味とを有し、胃中では胃液によつて、微小粒に凝固するから消化は極めて容易である。

挿畫  
初乳中の大き  
なかたまりは  
初乳體であ  
る。



常乳

初乳

母乳で嬰兒を哺育することは、母子の愛情を一層親密にするばかりでなく、産婦の食欲を増進し、營養を佳良にし、子宮の收縮を促す等、彼我の幸福を増すものである。然し、母の體質が薄弱であり、又は結核性の病にかゝつて居る時は、母子の健康を害するから、授乳は禁ずるがよい。殊に、母親に脚氣病のある時は、嬰兒は吐乳し、下痢を起し、青便を通じ、遂に

乳母の選擇

健康を害するやうになるから、乳母乳によるか、又は人工哺育によらなくてはならぬ。

●乳母の選擇 乳母は母親に代つて、嬰兒を養育すべきものであるから、之が選擇は慎重にすべきである。

(1) 年齢は二十歳以上三十歳以下で、嬰兒の母の年齢と大差なく、出産した時期も略同一であること。  
(2) 體質は強壯で、癩病・微毒・結核性等の病なく、其の生兒も健康に育つて居ること。

(3) 精神病なく、性質は溫和・快活で、清潔を好み、言語舉動等卑しからず、品行も方正であること。

(4) 乳房や乳首の形がよく、乳汁分泌量が多いこと。

●哺乳上の注意 哺乳上注意すべき點は左の如くである。

(1) 哺乳は安靜な場所ですること。哺乳中に泣かせたり、身體を動揺させたりするのはよくない。

乳質の良否は  
醫師の診定に  
よる。

哺乳上の注意



挿畫  
(一)は座した  
る場合  
(二)椅子に倚  
れる場合

(2)哺乳の時間は十分間乃至十五分間、哺乳の回数は約四時間位の間隔をおいて、胃腸の作用を休止させること。生後一ヶ月までは六回、其の以後は五回とし、夜の十時以後は、哺乳を休止すべきである。乳児が乳を求めて泣いても、煮沸した湯の微温となつたものを少量を與ふればよい。



(一)方仕の乳授



(二)方仕の乳授

(3)哺乳の際は、母は眠つてはならぬ。嬰兒が眠つた時は乳房を離しておくこと。  
(4)哺乳は規律正しくすること。時を守らず、分量も不規則である

と、必ず消化器を害する。

## 第二節 人工哺育

人工哺育

●人工哺育 生母又は乳母によつて哺育することの出来ない時は、已むを得ず他の栄養品を代用し、所謂人工哺育によらなくてはならぬ。

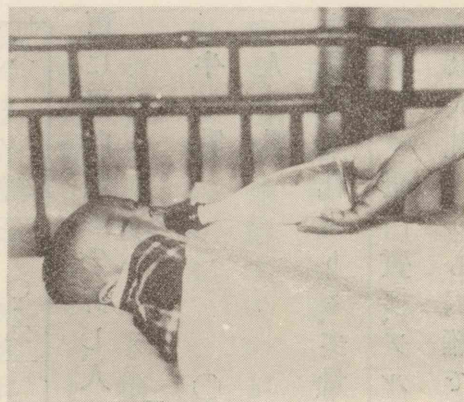
牛乳の飲み方

人工哺育に用ひられるものは、牛乳、山羊乳、驢馬乳等である。山羊乳、驢馬乳は其の性質が人乳に近く、従つて牛乳よりも優良であるが、供給が十分でないから牛乳が多く用ひられる。

●牛乳 牛乳は現今人乳に代るべき

唯一の栄養品である。

(1)牛乳の成分 牛乳の成分は概ね左表の如くである。



牛乳



種類	成分	蛋白質				脂肪		糖		無機鹽類		不明の 含素物	ビタミン
		人乳	牛乳	乳	乳	人乳	牛乳	乳	乳	人乳	牛乳		
人乳	乳	〇・九	三・三	三・六	四・五	〇・七	〇・三	〇・六	A B C	〇・二	〇・八	〇・六	A B C

更に蛋白質を分析し、人乳と比較して見やう。

アルブミン

カゼイン

〇・二乃至〇・三

二・七乃至三・〇

牛乳  
人乳

〇・六

〇・八

カゼインは胃液にあひて凝固す。

牛乳は人乳よりも、多量に蛋白質と無機鹽類とを含み、糖分は少量である。蛋白質は、アルブミンが少くてカゼインが多い。故に、消化は人乳よりも困難である。

②牛乳稀釋法 牛乳は、人乳と其の成分がちがつて居るから、稀釋して人乳に接近させて用ひなくてはならぬ。稀釋の程度は、學者により、其の説異なるも、標準的のものは左の如くである。

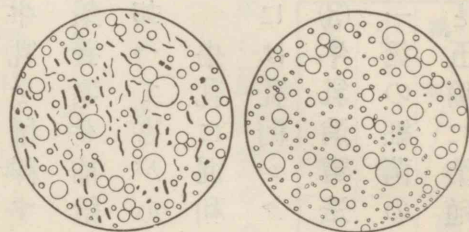
月 齢	一日の食餌回数	一日哺乳量	牛乳稀釋の割合	添加糖	備 考
一 月	六	六五〇 <sub>g</sub>	1	2	1/3 乳
二 月	五	六五〇 <sub>g</sub>	1	1	1/2 乳
三 月	五	七五〇 <sub>g</sub>	1	1	1/2 乳
四 月	五	七五〇 <sub>g</sub>	2	1	2/3 乳
五 月	五	八五〇 <sub>g</sub>	2	1	2/3 乳
六 月	五	八五〇 <sub>g</sub>	2	1	2/3 乳
七 月	五	八五〇 <sub>g</sub>	2	1	2/3 乳
七 月以後	五	八五〇 <sub>g</sub>	2	1	2/3 乳

牛乳を稀釋する際に加へる糖類は、牛乳を甘くする爲めではなく、營養素を補給するのが主眼である。然し、一定量以上に加へると却つて害がある。

牛乳に混和すべき糖類は、普通蔗糖を用ひ、胃腸に障害ある場合には乳糖・ソクスレット氏滋養糖・滋養マルト・ゼ等を用ふ。

③牛乳消毒法 細菌は、牛乳中で、非常な速度で繁殖する。今假に、一箇の細菌のある牛乳を、攝氏十度の温度の室に二十四時間置くと、五箇に繁殖し、之を攝氏二十二度の温度の室に、更に、二十四時間





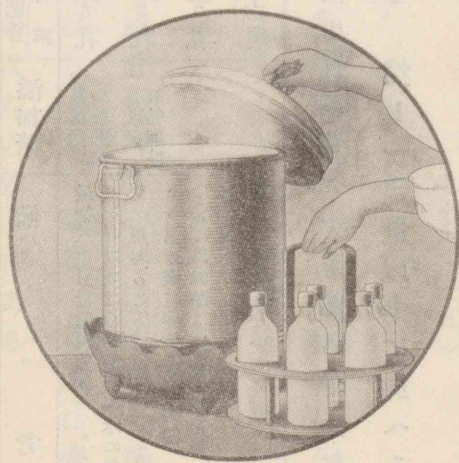
乳生菌細

乳全完

置くと、數千に増殖する。故に熱氣消毒を行ひ、殺菌する必要がある。消毒後の牛乳は、なるべく冷蔵庫に貯藏し、腐敗と細菌の増殖とを防がなくてはならぬ。

消毒はなるべく短時間に低温度でなし、牛乳の性質を變化させないのが理想である。家庭では、ソクスレット消毒器を用ふるが便である。

ソクスレット消毒器中で消毒するには、湯の沸騰してから五分乃至七分間煮沸し、然る後速に之を冷却するのである。普通の牛乳は、搾乳場で既に



器毒消乳牛

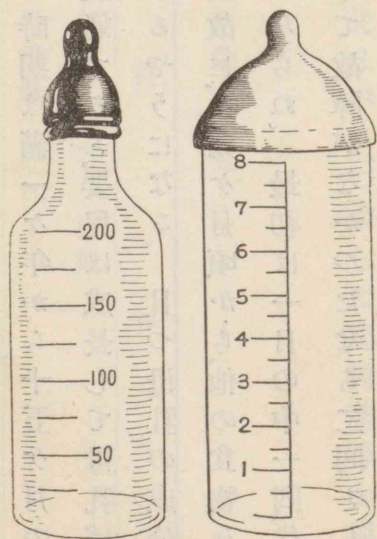
牛乳代用品

哺乳器

消毒の爲め熱せられたものであるから、長時間煮沸すると、牛乳の性質が變化し、消化しにくいものとなる。

●牛乳代用品 牛乳の代用品として多く用ひられるものは煉乳、ドライミル、クラクトーゲン等である。

●哺乳器 人工哺育をするには、哺乳器が必要である。哺乳器には種々あるも、衛生上安全であつて、器内の洗滌の容易なものがよい。吸口をガラス容器に直接附着させるゴム口のもものが最も進歩して居るものである。



器乳哺の新最

哺乳器は、使用後、重炭酸ソーダ水で洗ひ、殊に、吸口・瓶底等の清潔には特に注意を要する。不潔な時は往々下痢、驚口瘡等の原因と



離乳の時期と方法

なることがある。

### 第三節 離乳

●離乳の時期と方法 離乳の時期は満一ケ年から十五ヶ月の間が最もよい。生後一ケ年を経過すると、嬰兒は成長して母乳ばかりでは其の分量に不足を告げるやうになる。且つ母乳の成分は、既に變つて榮養に適しない。故に、八、九ヶ月頃から、他の食物を併用して榮養を補足しなくてはならぬ。最初は一日の中一回、代用食を與へ、之を四、五日間繼續して故障がなかつたなら二回とし、三、四日の後に至るも故障がなかつたなら三回とする。かうすると、乳汁の分泌も漸次に少くなり、離乳を全うすることが出来る。

離乳とは牛乳を廢する意味でない。牛乳は小兒期を通じて用ふるがよい。

離乳は嬰兒の身體の強弱や發育の遲速によつて參酌を要し、又季節の六、七、八、九月に當る場合には延期したがよい。離乳すべき時期であるのに、なほ之を實行しない時は、嬰兒は、皮膚蒼白、脂肪弛

離乳期の食物

緩、神經過敏等の異狀を呈し、發育上に有害であるばかりでなく、又母體の榮養をも不良ならしめるものである。

●離乳期の食物 離乳期の食物としては、牛乳、重湯、スープ、ビスケット等が適當である。此等の食物を消化するやうになると、其の分量と與へる度數とを増し、更に時日を経過すると、半熟卵黃、牛乳で煮た粥、スープで調理した粥又はパン、つぶした馬鈴薯等を與へるがよい。

満一歳前後の獻立

●満一歳前後の獻立（一日分） 總熱量 九五〇カロリー

朝		立	
牛乳入お粥		白米 牛乳 砂糖	
ポテトーマツシユ		馬鈴薯 バター	
カルケット		カルケット	
牛乳		牛乳 砂糖	



便通

第四節 便通

嬰兒の便通と健康とは密接の關係がある。故に、嬰兒の健否は、便通の回数と性質とを點檢すると、概ね推測し得られるものである。

便通は、朝起きた時直ちにあるか、又は哺乳後にあるのがよい。平素から此の習慣をつけなくてはならぬ。

晝	三時	夜
野菜入おぢや 玉子豆腐 下しだいこんかけ	ブランマンジ 蜜柑汁	燒麩 はうれん草入 おぢや 鮪 ホワイトソースかけ
白米 人參 鹽 卵黄 だいこん 醬油	牛乳 コンスターチ 砂糖 蜜柑 砂糖	白米 はうれん草 燒麩 鮪 牛乳 メリケン粉 バター 鹽

人乳便はバター色を呈し、牛乳便は稍灰色を帶び、滑かなのがよい。褐色を呈し、粘液又は顆粒を混じ、色青く、惡臭のあるものは異狀便である。

粘液便は、食物が胃腸に適しないか、人工哺育に於て牛乳の稀釋法が不適當である爲めかに原因し、顆粒便は蛋白質や脂肪の過剰攝取が原因である。人工哺育の場合には、殊に顆粒便を見ることが多い。若し母乳哺育の場合に此の徵候があるならば、それは母の食物が不適當であるか、又は運動不足に原因するものである。青便は消化不良の爲めである。

最もこまるのは常習便秘である。之を治するには、食物を以てするが有効である。下劑を用ひ、又は灌腸をすることは避けたがよい。蜜柑汁又は其の稀釋したものを哺乳と哺乳との間に與へると便通がよくなる。



睡眠

### 第五節 睡眠

生後一ケ年間は身體各部の發達が著しく、殊に、内臓器官は非常な速度で發育する。但し、外圍に對する抵抗力は極めて薄弱で、些細の障礙にも其の影響を受け易い。精神上の發達も亦、生涯の何れの時よりも大である。

睡眠は疲勞を恢復し、精力を増進する唯一の方法である。殊に、神經質の嬰兒には十分の睡眠を與へなくてはならぬ。普通最少限度の睡眠時間は、生後三週以後は二十二時間、四週以後は二十一時間、二ヶ月以後は二十時間、十二ヶ月以後は十五時間である。

- (1) 添寢は衛生上有害であるから、一人寢の習慣を養ふがよい。
- (2) 寢室は空氣の流通のよい所を選び、室内の溫度に注意を要する。寢衣・寢具ばかりを厚くするのはよくない。
- (3) 四邊を安靜にして熟眠させるやうにすべきである。熟睡は疲

啼泣

啼泣の種類

### 第六節 啼泣

勞を慰し、精力の恢復に効がある。

- (4) 就眠に際しては、背を上下に撫で、又は子守唄で眠に入らせるがよい。
- (5) 目覺めた時は、直ちに排尿させなくてはならぬ。寢床中でさせるのはよくない。

●啼泣 啼泣は幼兒の言葉である。如何なる場合に如何なる風に泣くかを研究してみると、其の調子・緩急・強弱の程度・顔つき・動作等によつて大體わかるものである。

●啼泣の種類 啼泣には(一)生理的必要から來るもの、(二)痛苦を訴へるもの、(三)何物かを欲求するもの、三つある。

(1)生理的に泣く 生理的必要から自然に泣くもので、肺に深く空氣を吸入し、又それを呼出するによるのである。出生時に泣くの



は之に屬する。此の泣き方は顔を赤くして強く泣き、泣きやめては又泣く。痛苦を訴へて泣くのではない。故に、泣きやめさせやうと苦心するのは無意味なことである。入浴の時、衣服又は襁褓を取り替へる時等によく此の泣き方をする。

②痛苦を訴へて泣く 襁褓が汚れて皮膚を刺戟し、衣服に皺が出來、衣服や蒲團が厚きに失し、或は秘結腹痛、不消化、ガス充満睡眠を催した時等に不快苦痛が原因となつて泣く。此の泣き方は足を上下に動かしつゝ、強く泣き、又は唸るやうに泣き、或は弱々しい聲で連續的に泣く。原因を除くと直ちに泣きやめる。

③何物かを欲求して泣く 何物かを欲求し、又は單に甘へて泣く場合には、他の泣き方とちがつて居るから、容易に判定が出来る。欲求の満足を得ると直ちに泣きやめる。

●母への注意 母たるものは嬰兒の泣き方に注意し、其の原因を

## 第七節 運動

知り、適當の處置をしなくてはならぬ。甘へたり、ねだつたりして泣く時は、放棄しておくがよい。さうでないと、自制力のない放恣な習癖が形成される。

嬰兒の啼泣は呼吸を深くし、又四肢を屈伸することは一種のよい運動である。衣服はなるべくゆるやかにし、自然の運動を妨げないやうにすべきである。

匍匐するやうになつた時は、其の床を清潔にし、危險物を取り除き、思ふまゝに活動させるがよい。起立又は歩行を始めた時は、自然のまゝに任し、決して期に先だつて干涉し、強ひて起立させたり、無理に歩行させたりしてはならぬ。



## 第九章 小兒の發育

生後第一年の發育

●生後第一年の發育 小兒が生れてからの第一年は、身長と體重とが相平衡して發達するもので、體重は、一ケ年末には生初の約三倍となり、身長は約二十一糎伸長する。其の増加伸長率は、之より以後の何れの時期よりも大である。腦髓の如きも、生初の約三倍となる。

此の時期は、乳兒期と稱し、抵抗力が弱く、死亡率が最も多い。

●生齒 小兒の生齒時期は必ずしも一定して居ない。乳齒は、胎兒の六週間頃、顎を生じ始めた時に既に其の根を有し、生後六、七ヶ月頃から發生し始め、二十一ヶ月乃至二十五ヶ月で終る。常に對を以て發生し、其の數上下各十枚宛なるが普通である。其の發生の甚だしく遲延するか、久しく奇數に止まる時は、榮養不良か又は

生齒

第一白齒は六歳白齒ともいふ。

生齒時期の身體異狀

佝僂病の徵候であるから、小兒科醫の診察を受けるがよい。  
乳齒發生の順序は左の如くである。

- (1) 下の門齒 二枚 六ヶ月乃至九ヶ月。
- (2) 上の門齒 二枚 七ヶ月乃至十ヶ月。
- (3) 上下切齒 四枚 十ヶ月乃至十二ヶ月。
- (4) 白齒 四枚 二ケ年の始。
- (5) 犬齒 四枚 二ケ年の中頃。
- (6) 第二白齒 四枚 二ケ年の終又は三ケ年の始。

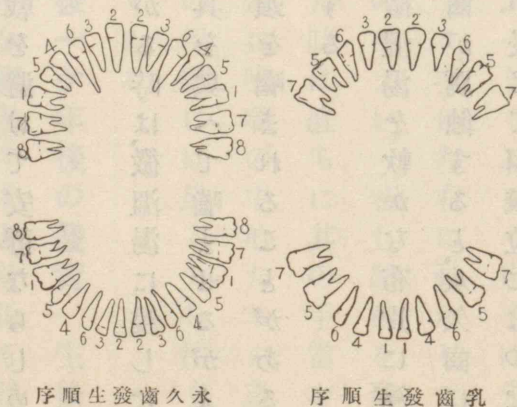
永久齒は三十二枚ある。六歳頃から

乳齒脫落に引き續いて發生し、第一白齒

は六、七歳、智齒は十八歳以上二十七、八歳頃に發生する。

生齒時期には、身體に異狀を呈することがある。

(1) 齒齦は充血し、流涎、發熱、神經過敏、不眠等の症狀があらはれる。





(2) 軽い消化不良を起したり、食氣が不振となつたり、又は便通が頻繁となつたりする。

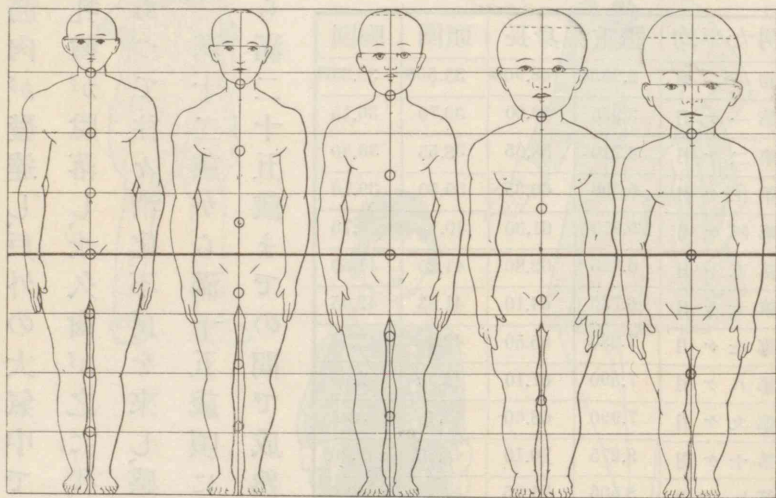
(3) 皮膚に痒感の甚だしい疱疹のあらはれることがある。

故に、小兒の衣食住に注意し、精神の刺戟を避けて安靜ならしめるやうにしなければならぬ。

齒齦の痛痒を感じて泣き、物を噛みたがる時は、微溫湯に浸したガーゼで齒齦を軽く擦るか、ゴム製の玩具を與へて噛ませるがよい。此のやうな場合には、哺乳の際に乳頭を噛まれることがある。若し、傷害を受けた時は直ちに手當を要する。

齒は重炭酸ソーダ・硼酸等を溶かした微溫湯を軟かな布片に浸して洗ひ、清潔にしなければならぬ。乳齒が腐蝕すると、永久齒に障礙を及ぼし、生涯齒の故障多い。幼兒が長じて四歳位になつたなら、自ら齒を掃除させるがよい。齒磨粉は香料の少い良質のもの

挿畫  
初生兒  
二歳  
六歳  
十五歳  
二十五歳



小兒の發育

のを選び、齒揚子は柔かなものを選ぶべきである。揚子は先づ上下に、次に左右に動かして磨くのがよい。若し齲齒を發見した時は、直ちに其の手當を加へ、殊に咀嚼の中心たる六歳臼齒の保護には最も力を注ぐべきである。

●生後一ケ年後の發育 生後一ケ年を経過すると、身長も體重も共に長足の發達を遂げ、歩行や運動も完全となる。滿七歳以後は骨骼も定まり、四肢の





服 兒 小

三島博士の調査による。  
生後七ヶ月 生後十二ヶ月 生後十三ヶ月 初歩行期 閉鎖期

男女平均	體重	身長	頭圍	胸圍
初 生 兒	2.955斤	48.90cm	33.55cm	32.35cm
第一ヶ月	3.935	56.00	36.70	36.15
第二ヶ月	4.710	58.65	38.55	38.50
第三ヶ月	5.390	60.35	39.50	39.10
第四ヶ月	5.910	61.30	40.10	40.75
第五ヶ月	6.385	62.80	41.20	41.50
第六ヶ月	6.785	64.10	41.95	42.05
第七ヶ月	7.280	65.50	42.40	42.50
第八ヶ月	7.590	67.10	42.90	42.90
第九ヶ月	7.990	68.60	43.45	43.45
第十ヶ月	8.275	70.10	43.80	43.80
第十一ヶ月	8.505	71.95	44.35	44.35
第一 年	8.750	73.40	44.75	45.05
第二 年	10.350	74.20	46.25	46.50
第三 年	11.950	85.15	47.25	47.65
第四 年	13.300	91.35	48.35	49.05
第五 年	14.850	96.95	49.00	50.15
第六 年	16.250	102.60	49.95	52.30
第七 年	17.500	107.75	50.25	53.55
第八 年	18.900	112.90	50.55	54.75
第九 年	20.750	117.25	50.85	56.65
第十 年	22.650	121.60	51.40	58.60
第十一年	24.900	126.45	51.80	60.80
第十二 年	27.500	131.55	52.15	62.80
第十三 年	30.600	139.10	52.65	64.95
第十四 年	35.050	142.35	53.20	67.30
第十五 年	38.450	145.50	53.65	70.50

筋肉が発達し、戸外の大氣中で遊ぶのを好む。満十歳頃までには乳齒が脱落し、永久齒が之に代る。此の時期は人生第二の危機であつて往々消化不良を來し、感情の動搖を來すものである。満十二歳から満十五歳頃には身長が著しく増加し、満十六歳から満二十五歳までの間で成熟完成する。



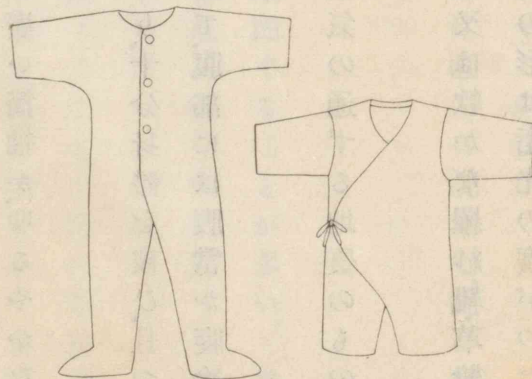
## 第十章 小兒の衣食住

### 第一節 小兒の衣服

●衣服 小兒は其の發育が速であり、四肢の運動の活潑なことが

其の特性であるが、身體の諸機關は未だ軟弱であつて、氣候の變化其の他の障礙に抵抗する力が薄弱である。故に、衣服の如きも、之を保護する目的で、其の地質・仕立方・着せ方等に注意しなくてはならぬ。

(1) 上着は清潔を保つに便利な木綿織とし、間着はフランネル・毛織等保溫性の大きなものを選び、肌着は軟かで輕



幼 兒 の 寝 衣



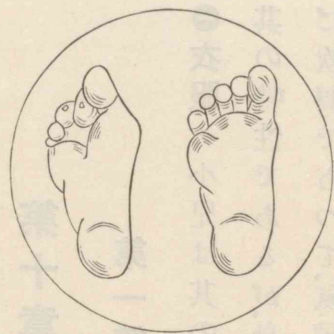
く洗濯に堪へる白木綿が適當である。廣い筒袖か、ゆるやかな西洋服が最も適當である。

(2) 寝衣は、木綿・メリヤス・綿ネル等でつくり、十分身體を被ひ、且つ腹部を溫保することの出来るやうに仕立て、腹部には腹當か寝冷知らずを用ふるがよい。

附屬品

●附屬品 (一) 帽子は軽く軟かで、よく空氣の通ずる地質のもので寬濶なのがよい。

右は普通の足  
左は畸形の足  
である。



足の形畸と足の通普

(二) 履物は草履又は軟かな羅紗靴革靴等が適する。靴の形は指先の廣がつたゆるやかなるものでないと、軟かな骨は畸形となる。

●小兒服裝上の注意 小兒の服裝上注意すべき點は左の如くである。

小兒の食物

第二節 小兒の食物

(1) 厚着は、皮膚の抵抗力を弱めるばかりでなく、運動にも不便である。

(2) 帶や紐で強く締めてはならぬ。殊に、胸部を紐で締めるのは衛生上害がある。

(3) 上張兼用の前掛を用ひ、自由に活動させるがよい。

(4) 服裝は清潔・整正ならしめ、汚れたものは直ちに洗濯し、綻び破れたるものは直ちに補綴を要する。

小兒の病や死亡は、榮養の不適當に原因することが多い。榮養の不良は小兒の身體組織を弱め、成長力及び傳染病に對する抵抗力を減少させるものであるから、特に注意すべきである。

(1) 食物はすべての榮養素を十分に供給すること。殊に蛋白質の如きは、其の品質の優良なものを選び、無機鹽類各種ビタミン等も



適量を攝取させなくてはならぬ。

(2) 小児の食物は單純なるべきも、決して偏してはならぬ。食物が常に或る一定のものに偏すると、必要な營養素を攝取する機會を失はせ、其の爲め種々の障礙が発生する。

(3) 食品は新鮮なものを選び、調理は單純なるべきこと。刺戟の強い香辛料を使用して調理したものを與へると、複雑な味を好み、不知識の間に、刺戟物を好み、却つて消化器を害するやうになる。

成るべく單純な調理を好む習慣をつけたがよい。

(4) 食事時間は正確に守らせること。小児は身體の發育竝に活動が盛であから、消費される成分を補充する爲め、十分の食量を與ふべきも、時を定めず與へると消化作用に障害を來す。間食も猥りに與へてはならぬ。若し與へるならば、胃に長く残らない食品を少量與へ、與へる時間も一定する必要がある。睡眠前の間食は絶

對に避くべきである。

(5) 食事は愉快な氣分でさせなくてはならぬ。愉快な氣分は消化液の分泌を増すものである。

(6) 食事については左の心得を守らせたい。

(一) 十分咀嚼し、決して急がないこと。

(二) 食品の好惡をいはないこと。與へられたものは、必ず食する習慣を養はないと、母が折角注意して必要成分を選択し、調理したのも、其の効果を收め得ないことになる。

(三) 食前には必ず手を洗ひ、食後には含嗽すること。

### 第三節 小兒室

小兒室

食事・睡眠・入浴等の時間を正確に守らせるには、大人と離れた小兒室があると便利である。小兒室は閑靜で、日當りも空氣の流通もよく、南向・東南向で相當廣くなくてはならぬ。室内の設備は衛



生を第一とし、美的趣味を加味すべきである。床は掃除に便で冷却しないものがよい。室内の照明は電燈が適當である。室の周圍には棚を造り、玩具の置場にあて、なほ適當な色彩の繪畫で之を裝飾するがよい。

小兒室に於ては、自由に遊ばせ、玩具を取り散らしても放任しておく。但し、成長するに従ひ、自ら整理・整頓させ、獨立自尊の氣風を失はせないやう注意すべきである。

## 第十一章 小兒病

小兒病

小兒病といふのは特に小兒の罹り易い病の總稱である。すべて小兒の病は經過が急速であるから、當初其の手當を怠ると忽ち重症に陥り、取り返しのつかない不幸を見ることが多いから、深甚の注意を要する。

驚口瘡

消化不良

●驚口瘡 驚口瘡は乳房・哺乳器の不潔、牛乳の不良等の爲めに一種の細菌の繁殖によつて起るもので、口内に白斑が出来る。重症となると此の白斑は咽喉までも擴がつて、音聲が出なくなり、消化不良を來し、往々生命に關することがある。

●消化不良 消化不良は哺乳兒に最も多い病である。吐乳・下痢・異常便等は其の徵候である。飽食は、小兒の消化器に障害を來す原因の一つである。

飽食となるのは、(一)授乳時の不規則なること、(二)渴した場合に水を與へず乳を與へること、(三)其の消化力に相當しない濃厚な食物を與へること、(四)早く飲ませること等に原因する。

吐乳は普通のこととして看過するものがあるけれども、猖紅熱・麻疹・急性胃腸カタル等恐るべき病に先行することがあるから注意を要する。吐乳を治するには乳の分量を少くし、三時間毎に與



へ、或は一時間毎に一食匙づゝ與へるやうにする。なほ効果を收め得ない時は胃の洗滌を行ふ。

(1) 食後直ちに吐乳するのは、乳の分量が多きに失した場合に多い。又急速に授乳した場合にも吐乳する。

(2) 時を限らず吐乳するのは、小兒の腹部を強く締め、腸を壓した場合に多い。蛋白質の濃厚に失した場合にも此の現象を起す。但し、此の場合には腹痛を起し、大便中に顆粒が混じて居るから、容易に識別することが出来る。

(3) 食後一、二時間を経て吐乳するものは、酸味を有し、豆腐狀に變ずるか、水樣液に顆粒を混じて居るのが常である。かゝる吐乳は脂肪又は砂糖の分量が多きに失したからである。

下痢は氣候の變化する時、殊に、暑さに入る前に多い。其の原因は、不適當不潔な食物又は飽食による不消化の爲めである。

吐乳・下痢・發熱等の場合には、ヒマシ油一劑を與へ、暫時飢餓療法を行ふがよい。

## 害 神經系統の障

## ● 神經系統の障害

神經系統の障碍を來し、一種感情に走り易い

状態となるのは、普通不平均な榮養又は不十分な食物に原因することが多い。疲勞・不消化・蛔蟲・秘結・中耳炎・濕疹・不適當な衣服等も亦、其の原因となるものである。遺傳も間接に其の素因となる。

睡眠妨害・惡夢・夜驚等を起し、之に附隨して性急となり、しかめ顔をなし、指を吸ひ、又はかぎり、鼻をつゝき、泣き易くなる等は此の病の徵候である。

## 麻 疹

● 麻疹 麻疹は幼兒に多い傳染病で、病原體は、未だ不明である。

侵入門は主として呼吸器であるが、觸接物品の媒介によることもある。麻疹は往々輕視する傾きあるも、實は重い病であつて、其の處置を誤ると、虚弱な幼兒は死ぬことがある。

麻疹の初期は感冒の如くで、眼は赤く、鼻は濕り、聲はかれ、嘔・咳嗽を發し、咽喉は、軽く痛み、舌には白斑が出來て發熱する。かくて第



## 百日咳

四日に皮疹があらはれ、顔面から軀幹四肢に擴がり、二十四時間で全身に及ぶ。皮疹は、茶褐色を帯びた紅色で、軽く浮き上り、小麥大から豆大となる。皮膚は一面に濃紅色となり、含膿疹の如くなる。一週間以内に褐色の皮が脱落して回復期に入る。病児はなるべく強い光線を避け、暖かな室に臥かせなくてはならぬ。

⑤百日咳 百日咳は二、三歳の幼兒に多い免疫性の病で、病原體は百日咳菌、侵入門は麻疹と同じである。初期は普通の氣管支カタルと同一の症狀を呈し、漸次咳嗽が増進して發作的となる。咳嗽は夜間に多い。

咳嗽の發作は呼氣の連續で、時々僅かに強い吸氣をするばかりである。甚だしい時は、面部も頸部も暗赤色を呈する。發作は二、三分間で止み、發作數は病勢によつてちがうが、重いのは十回乃至十二回、重いのは三十回にも及ぶ。

## 疫痢

病の經過は八週乃至十週で、發作と共に吐逆することが多く、其の爲めに榮養不良に陥り、餘病を併發することがある。食物は流動食を選び、發作直後に與へるがよい。

⑥疫痢 疫痢は二歳乃至七歳までの幼兒に多く、夏秋の候に流行する急性の傳染病である。病原體は赤痢菌又は大腸菌屬で、主として食物の媒介によつて傳染する。初は軟便又は下痢を來し、腹痛嘔吐を催し、次で四十度以上の熱を發し、粘液便を通じ、痙攣、昏睡して二十四時間前後で死ぬるものが多い。

豫防法としては、過食や寢冷を避ける。若し此の病の疑ある時は、直ちに灌腸を施し、醫師の來診を求むべきである。

⑦水痘 水痘の病原體は不明である。病毒は水疱の内容物や痂皮中に存在し、呼吸器から侵入するものと看做されて居る。初期は、頸部や軀幹に赤斑の皮膚發疹を生じ、數時間で豌豆大の水疱と

## 水痘



痘瘡

なる。其の周囲は細い赤線で區劃され、全身一千個にも及ぶ。約一週間で、癰痕をのこさず落屑する。

此の病に罹つた時は、直ちに醫師の治療を受くべく、痂皮は無理に取り去つてはならぬ。取り去ると癰痕が残る。

⑧痘瘡 痘瘡の症状に就ては既に述べた。其の豫防法には種痘が最もよい。生後三ヶ月以上六ヶ月迄の間は、最も種痘に適する。痘瘡流行の際は、生後一ヶ月以内でも種痘を施すがよい。極寒、極暑の時、又は生齒、吐乳、其の他幼兒の身體に異常ある場合には、之を見合すべきである。

(1)種痘前には入浴させ、身體を清潔にしておくこと。

(2)種痘が善感した時は、大豆大の水疱となり、其の周囲は赤くなつて發熱する。約九日で水疱は膿疱となり、膿疱は漸次結痂する。種痘後は薄く脱脂綿をあて、其の上に繃帶をしておくこと。

猩紅熱・デフテリア

初生兒の感覺作用

(3)種痘後一日間は、全身浴を見合すこと。其の後でも種痘の部分に濕し、又は擦つてはならぬ。

(4)種痘の痂皮は無理に除去しないこと。

(5)種痘後は身體を清潔にし、寢衣はなるべく軟かな木綿物を用ひ、毎日洗濯して清潔を保つこと。

⑨猩紅熱・デフテリア 原因、症状等は既に第一篇で述べたから茲には之を略する。

## 第十二章 感官の發達

①初生兒の感覺作用 感官とは目・耳・鼻・舌・皮膚等の感覺作用を掌る機關をいふ。感覺作用其の掌る機關の異なるに従ひ、視・覺・聽・覺・嗅・味・覺・皮膚・覺等に分たれる。出生當初の感覺作用は概ね左の如くである。



感覺作用の發達

(1) 視覺 眼は生後程なく開くが、眼瞼の開閉、眼球の運動等は左右共同ではない。適當な光明を好み、暗黒を嫌ふ。然し色彩を見分ける力はない。生後四ヶ月で眼球の運動が整正となり、六ヶ月後に至つて漸く物體の形狀と色彩とを感じるやうになる。

(2) 聽覺 初生兒の耳の中には液體が充滿し、鼓膜は水平であるから、聽く作用は不能である。二週後になつて、始めて音を聽くことが出來、三ヶ月に至つて音響によつて慰安されるやうになる。

(3) 嗅覺 其の發達はおそい。

(4) 味覺 生初既に甘酸鹹苦の味覺がそなはつて居る。

(5) 皮膚覺 生初に於ては、觸覺、溫覺、痛覺の何れも鈍い。

● 感覺作用の發達 感覺作用は、滿一歳後から二、三ヶ年間に著しく發達する。滿四歳以後は殊に著しい。知識に最も關係の深い視覺、聽覺は勿論、皮膚覺、其の他の感覺も發達し、外界に對する認識

が確實となる。

(1) 初生兒の感官は刺戟に對する調節作用が十分でない。故に、強い刺戟を避けて十分保護しなくてはならぬ。眼は生後二、三週間は居室を薄暗くし、漸次日光に慣れさせ、耳は入浴の際、湯の入らないやうに注意すべきである。

(2) 感覺作用を明敏ならしめるには、感官の練磨が必要である。握つて皮膚覺を働かせ、視て視覺を働かせ、振つて聽覺を働かすやうな玩具は、感官の練磨に有効である。

## 第十三章 精神作用の發達と教育

### 第一節 精神作用の發達

知的作用の發達

● 知的作用の發達 生後滿一ヶ年を経ると、身體の發育と感官の發達とは、相俟つて幼兒の生活に活氣を生じさせ、聲帶を働かして言語をあやつる運動も漸くあらはれる。又神經中樞たる腦髓と感官との連絡作用も著しく發達し、直觀作用も次第に確實となる。



情的意的作用  
の發達

満三歳頃から記憶作用があらはれ、想像作用も次であらはれる。想像作用は、實に自由奔放であつて、諸種の模擬的遊戯となつてあらはれ、又童話を好む。満五歳以後となると、觀念の内容も豊富となり、記憶・想像の二作用も長足の進歩をする。抽象概括の作用も發達し、概念も次第に明瞭となり、因果關係を推究するやうになる。

●情的意的作用の發達 感情・意志の作用は先づ本能の上にあらはれる。本能とは動物の自然に具有する先天的の活動傾向である。

①栄養本能 生後數時間にして既に發現するものは、吸乳の本能である。生齒期には、咀嚼本能があらはれ、固形の食物を好むやうになる。

②運動本能 把持・立頭は早くからあらはれ、漸次腹這ひを始め、十ヶ月以後には起立・歩行等運動をなす。満二、三歳以後には、活動性

が盛であつて寸時も靜止して居ない。

③模倣本能 早くからあらはれ、運動が稍自由となると、不完全ながらも早く既に模倣を始める。模倣は満三、四歳頃が最も盛である。

④好奇本能 早くからあらはれ、新らしい刺激のある時は、直ちに其の方を注視し、手を伸し物を取り、之を振り動かし、或は口に運んで之を舐る等種々の試みをなす。言語の使用に習熟し、想像作用が發達すると好奇心は益發達し頻りに種々の質問を發する。

⑤遊戲本能 生後六、七ヶ月頃から玩具を弄び、十ヶ月以後には、簡単な戯れを喜ぶ。想像作用が發達すると、戦争遊び・姉様遊び・飯ごと等の遊びをなす。遊戲性に伴ひ歌謠性も亦著しく發達するものである。

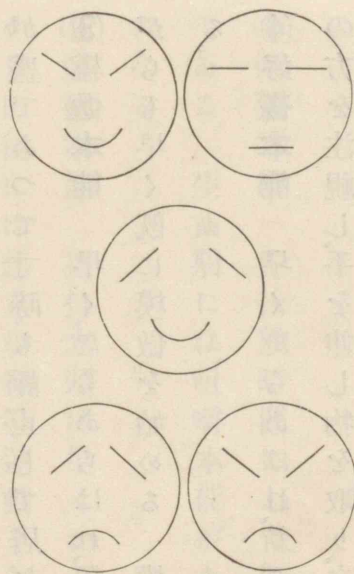
⑥社交本能 友を求め、他の承認を求める本能は、満二歳頃から漸



く盛となり、父母の賞讃を喜び、羞恥の念を生じ、嫉妬・敵抗・争闘等をなすことがある。満三、四歳頃には著しく發達し、同情・愛情等も發露するやうになる。

⑦所有本能 満二歳頃から、玩具其の他の自然物を多く蒐集し、所有を喜ぶやうになる。満四歳頃には、獨占の念が強くなり、爲めに朋友と衝突することが多い。

⑧感情本能 啼泣・歡喜・憤怒・恐怖等は、何れも感情本能であつて、最も早く現はれるものは啼泣である。恐怖は生後一、二週間であらわれ、憤怒は生後一、二ヶ月からあらはれる。顔面の筋肉が笑に似た運動を起すことは、早くから認め得



感情の表出

上右眞面目  
上左滑稽  
中喜悅  
下右憤怒  
下左悲哀

感應とは感覺に伴ふ快・不快の感であつて、情緒とは自他の利害に關係して起る快・不快の感をいふ。

精神の發達と教育

言語の發達

## 第二節 言語

●言語の發達 小兒は約六ヶ月で種々の運動によつて發聲の準備を整へ、滿一ケ年から三ケ年に至る間で、日常生活に必要な言語を理會し且つ使用するやうになる。

られるけれども、全く器械的であつて眞の笑ではない。眞の笑は、生後四、五十日に始めて生ずるものである。嬉しい時には、笑と共に歡聲を發し、四肢の運動を伴ふものである。

満三歳頃までは、感情は概ね感應の程度であるが、満四歳以後から次第に情緒に移り、喜怒哀樂の情緒が最も強大となり、好惡の情は著しくあらはれ、甚だしく我儘となる。

●精神の發達と教育 母たるものは、子女の精神の發達に留意して、機會をとらへ、知情意各方面の鍛鍊を怠らず、徳性の涵養には特に注意を要する。



言語の發達を  
原音期  
聲音期  
語音期  
言語期  
文章期  
の五期に分  
つ。

言語と教育

言語の發達は、普通五期に區分される。

(1) 原音期 生後六、七週頃は、ア・イ・ウ・エ・オ・パ・マ・ブなどの單音を發するばかりで何等の意味もない。

(2) 聲音期 喃語期ともいふ。生後八ヶ月頃から一ケ年の末頃までの間は、單音を結合して意味のない音を續け様に發する。

(3) 語音期 生後二ケ年になると、ワンワン・ニャーニャー等の擬似語で事物を代表させるやうになる。

(4) 言語期 次で擬似語と其の内容たる事物とを結合して、遂に正確な言語を獲得するやうになる。

(5) 文章期 満三歳頃から、單語を結合して單句を用ふるやうになる。

●言語と教育 言語は思想交換の要具であるばかりでなく、人の品格をも表はすものであるから、聲音期の頃から言語教育に留意



玩具



玩具の教育的  
価値

玩具選定上の  
注意

して、發音を正しくし、野卑な言語は禁止するを要する。又父母・兄姉は言葉遣に注意しないと、幼兒は直ちに模倣する。

### 第三節 玩具

●玩具の教育的価値 玩具は感覺・知覺を練り、自己活動を促し、創造力を養ひ、手指の運動を奨め、愉快な感情を養ひ、注意・忍耐等の意志を陶冶する等其の効果は頗る大である。

●玩具選定上の注意 母親は左記の條件に顧み、適當な玩具を選定すべきである。

- (1) 小兒年齢・男女別性質等に應じ、教育上効果あるもの。
- (2) 筋肉の活動を進め、意志の鍛鍊に適するもの。
- (3) 小兒自身で組み立て、創造力を増すべき構成的のもの。
- (4) 形態・色彩等の調和がよく、美的心情を養ふに足るもの。
- (5) 構造が堅牢であり、簡單・質朴であつて、容易に遊び得られ、小兒の



玩具の與へ方  
取扱はせ方小兒と繪畫・  
手工

興味に合するもの。

(6) 材料は消毒に便で、繪具の無害であるもの。

(7) 材料・形狀共に小兒に怪我をさせる虞のないもの。

(8) 安價で耐久性に富むもの。

●玩具の與へ方取扱はせ方 すべて玩具は、粗惡不適當なものを多く與へるよりも、適切なものを精選して與へるがよい。なるべく丁寧に取り扱はさせ、五歳頃から自己の玩具を正しく整理する習慣を養はなくてはならぬ。稍長じては玩具を製作させ、創造力の涵養に資すべきである。

#### ●玩具の與へ方取扱はせ方 第四節 繪畫と手工

●小兒と繪畫・手工 小兒は好んで繪畫を見、又之を描かうとするものである。彼等の描く繪畫は其の心意の表現であつて、仔細に之を研究すると、精神活動の有様を知ることが出來て、教育上參考

繪畫・手工と  
教育

童話と教育

となる點が頗る多い。小兒は又玩具を自ら製作したがるものであるから、危険でない範圍内で、道具や材料を與へ、其の製作を奨勵するがよい。

●繪畫・手工と教育 繪畫・手工は感官を練習し、觀察工夫の心力を練り、知徳の啓發上に大なる關係がある。繪畫選定に關しては、智育上、徳育上、衛生上等各方面から考察すべきことは玩具と同じである。繪畫・手工の成績品は、其の説明をきき、適當の批評を與へ、興味喚起につとむべきである。

#### 第五節 童話

●童話と教育 幼兒が言語を發するやうになると、機會のある毎に自己の思想感情を發表し、他人の談話を聽かうとするものであるから、此の傾向を巧に利用して言語を練習し、知徳の啓發につとめなくてはならぬ。而して之が方便としては、童話を利用するこ



## 童話の種類

とが最も適當である。

## ●童話の種類

童話には、民族童話・寓話・假作物語・武勇譚等がある。

(1) 民族童話 「桃太郎の話」の如く、民族間に流布し、老人から子孫に傳へられたものであつて、定まつた作者はない。然し、民族精神は最もよくあらはされて居る。

(2) 寓話 教訓を中心とした譬喩的説話である。「イソップ物語」の類は之に屬する。

(3) 假作物語 「太郎次郎」・「花子」等、人爲的に或る主人公を設けて説話を構成したものである。

(4) 武勇譚 英雄・豪傑の傳記を詩化したものであつて、教育的價值が比較的に多い。

武勇は稍長じた兒童に適し、寓話は往々不條理に陥ることがある。假作物語はあまりに人爲的であつて興味がうすく、民族童話

## 童話の選擇

は比較的に有効である。

●童話の選擇 童話の選擇については、左の諸點に注意するを要する。

(1) 童話は、兒童心意の發達に應じ、理解され、興味を惹起するに足るものがよい。

(2) 徳性涵養上有効なものがよい。殘虐なものや、恐怖の念を起させるものは避くべきである。

(3) 題材は多方面にわたらなくてはならぬ。

## 第六節 徳性の涵養

## 徳性の涵養

●徳性の涵養 吾々の品性の基礎は家庭で養はれる。母親は特に子女の美德を陶冶することに注意すべきである。

(一) 犠牲奉仕 自己の身心を盡して父母弟妹に捧げる心情は、共存共榮の本義であつて、又團欒ある家庭生活の要諦である。家族は



つとめて此の本義の實現を期すべである。

(二)誠實 誠實は萬善の基礎である。虚言偽善を戒め、常に正道を蹈み、至誠神に通ずる人格の形成につとめ、表裏ある言動はつとめて排除すべきである。

(三)從順 父母・長上の命に従ふは、子弟第一の美德である。從順の美德を養成するには、父母・長上は其の發する命令について大に注意を要する。

(1)命令は其の數をなるべく少くし、然も實行の容易なものでなくてはならぬ。

(2)命令を一旦發したならば、之を取消し、又は變更してはならぬ。

(3)命令は前後矛盾せず、又父母並に家族の間に統一がなくてはならぬ。

(4)命令は愛ある中に權威がなくてはならぬ。報酬によつて實行させることはよくない。

(5)禁止的消極的なものよりも、寧ろ積極的獎勵的なるがよい。すべて機先

を制することが肝要である。

(四)克己・忍耐 克己・忍耐は處世上必要な徳であり、奢侈・怠惰・放縱は、一生を誤る惡徳であるから、幼少の時から勤勉・質素・敢爲・忍耐等の徳性を涵養することに注意しなくてはならぬ。

(五)禮讓 幼兒の天真の美を損しない範圍内で、食事の仕方とか、父母・長上への朝夕の挨拶とか、出入時の挨拶とかの卑近なことから順次一般の作法に亘つて指導することを怠つてはならぬ。

(六)秩序 食事・起臥等の時刻を守ることから、整理・整頓をよくすること等、すべての行動に規律あり秩序あることは、吾々の生活に最も必要なことであるから、幼時に牢固たる習慣を形成しておくことが肝要である。

徳性涵養の手段

●徳性涵養の手段 徳性の涵養上、必要な手段は左の如くである。  
(一)模範 父母や長上の模範は、幼兒の躰の上に絶大の勢力を有す



るものであるから、家庭内の人々は、常に好い模範を示して、子弟を教導しなくてはならぬ。

(二)賞罰 賞は善行を奨励し、罰は非行を懲戒する手段であつて、其の目的とする所は、共に善に導くに在る。

(1)濫賞濫罰を避けること。濫賞は慢心を起させ、濫罰は意氣を銷沈させ、又は反抗心を起させる。共に害があつて効益はない。

(2)動機と結果とを考察し、正當公平に處理すること。

(3)兒童が改悛した時は、愛を以て暖め、長く過去の惡行を責めないこと。

## 第十四章 就學・學校家庭の連絡

就學  
滿六歳より十  
四歳までを學  
齡期間とす。

學校と家庭と  
の連絡

●就學 子女が滿六歳に達すると、法規の定めに従ひ、尋常小學校に入學させ、其の課程を修了させなくてはならぬ。これは父兄たるもの、義務である。

●學校と家庭との連絡 學校と家庭とがよく連絡を保つことは

相互に利益である。

(1)子女が入學する際は、父母は自ら兒童をつれて出校し、學校の方針を聴き、家庭教育上の参考とすべきである。懇談會にはつとめて出席し、諸事を打ち明けて相談するがよい。又、時々學校に行つて、子女の學習狀態を視察することも参考となる。

(2)子女の面前で、學校教員等を批難するのはよくない。

(3)疾病其の他已むを得ない場合の外は、遅刻・早引・缺席等をさせず、毎朝勇んで出校するやう、子女を奨励すべきである。

(4)豫習・復習は自力でさせるがよい。猥りに助力して、依頼心を起させるのはよくない。

(5)其の他、身心の陶冶につき、常に受持教員と意志の疏通をはかり、學校で奨励又は禁止して居ることは、家庭でもよく之を守り、學校と家庭とが一體となり、兒童に對すべきである。



## 第四篇 家庭管理

### 第一章 家庭の收入

金錢收入と眞の收入

●金錢收入と眞の收入 收入といへば一定の金錢收入を想像するものが常であるが、一步進んで考察して見ると、其の收入した金錢は形を變へて、家族の衣食住は勿論、知的、美的、靈的欲求を満足させて居ることがわかる。此等の欲求満足の總和は即ち家族の得る眞の收入である。

眞の收入資源と其の考察

●眞の收入資源と其の考察 家庭生活に於ける吾々の欲求は其の範圍が頗る廣く、生理的、心理的、社會的各方面を包含して居る。

此等の欲求を充すに要する資源は、之を金錢收入、家庭生産收入、家庭の社會收入の三種に分ける。

金錢收入

(一)金錢收入 金錢收入の資源は左の四種に分ける。

(1)外部に於て家族が體力・心力を使用し、他人の爲めにした勤勞に對する報酬即ち賃銀・俸給・給料 此の收入は病氣・死亡又は失業等によつて杜絶するものであるから、一家の收入を之ばかりに仰いで居るものは、個人の健康に注意し、保險・貯蓄等により、常に將來の計畫を立て、おくことが肝要である。

(2)外部の事業管理收入 自然資本・勞力等の要素を結合して生産を営むを企業といひ、其の總收入から地代・利子・賃銀等一切の生産費を控除した餘剰を利潤といふ。利潤は企業家が危險を犯して生産に従事した報酬であつて、成功すれば利潤も多いが、不成功に終れば利潤は少い。時には利潤はなく、却つて全く損失を被ることもある。利潤は極めて不確定であり、危險性を帶びて居るものであるから、之を主なる金錢收入とする家庭では、十分其の點に注意するを要する。



③外部の投資収入 資本を他人に使用させて得る報酬、即ち、預金・貸金・公債の利子、株券の配當、家賃、地代等である。

投資による収入は、其の確實なものを選ぶと、永久的で極めて安全である。僅少の利益に惑ひ、危険性の大きなものに、投資してはならぬ。

④偶然なる金銭収入 贈與・遺贈等によつて偶然に入つて來るものをいふ。

以上の金銭収入を概括すると、經常収入と臨時収入との二つとなる。經常収入とは、規則正しく入り來り、其の金額も略豫定され、且つ永續の見込みあるものをいひ、臨時収入とは隨時に入つて來る収入で、其の額も豫め知ることが出來ず、且つ永續の見込みのないものをいふ。所得は經常収入を指すもので、収入と混同してはならぬ。

經常収入と臨時収入

家庭經濟の基礎とすべき金銭収入は、經常収入即ち所得であつて、臨時収入を眼中に置いてはならぬ。臨時収入は非常時の準備として貯蓄し、或は事業の資金となすべきである。

地代・家賃・利子・俸給等は、定時・定額収入であるから家計の目標を定めることは容易であるが、醫師・辯護士の報酬の如く不定時・不定額収入が家計の基礎となつて居る家庭では、前年度の實績から豫算を立て、毎月の支出を定めなくてはならぬ。

人は其の天稟境遇を異にし、職業もちがふ。従つて其の収入にも多少の別がある。即ち、一人で二、三種の確實な収入資源を有するものもあれば、僅に一種の不確實な収入資源にたよつて居るものもある。家庭經濟からいふと、一人で數種の収入資源を有することが望ましい。何となれば、經濟界の變動に遭遇しても、一種は他種を補ひ、彼此相補益して一家の經濟は動搖を免れるからであ



## 家庭生産収入

る。

(二)家庭生産収入 家庭生産収入は左の二種に分ける。

(1)家庭労働収入 家庭には賃銀を儲ける爲めの労働ではなく、家族の直接要求に應じ、其の要求の満足を増進させるためになされる家庭的労働が澤山ある。今之を概括して見ると次の如くなる。

(一)比較的完成した生産過程で、衣服材料の購入、菜園から蔬菜を採取するが如きもの。

(二)家庭以外でなされた生産品に對し、生産過程の最後の加工を施すこと。肉を焼き、衣類を縫ふ等の仕事がそれである。

(三)財貨の價值を新らしく附加すること。汚れ物の洗濯、家具・什器等の手入の如きもの。

以上の如き労働は家族殊に主婦によつてなされ、賃銀は支拂は

れて居ない。若し同様の訓練を持つ人を備ふたとすれば、かなり的大金を支拂はなくてはならぬ。之によつて見るも、家庭労働による収入の價值の大なることがわかるであらう。殊に母として子女を養育する貢獻の如きは、他の如何なる人を以てするも、之に代へられないものである。

(2)家庭管理収入 主婦が家庭に於て、勞力・資金、又は其の兩者を賢明な用途に充當した爲めに生じた家族の満足の増加を家庭管理収入といふ。家庭管理は、家政婦に委しても、或る程度までは満足を齎すことが出来るが、主婦が之に當る時は、更に一層の満足を齎し、家政婦によつては到底望むことの出来ない好結果を得るものである。

家庭管理は、事業界に於ける企業に類似し、賢明なる計畫・判斷及び絶えざる努力を必要とするものである。主人も或る程度まで



は之に干與するも、普通は主婦が其の任に當るのである。而して其の収入の増減は、主婦の賢明・熱心の度によるものである。

家庭管理は、家庭生活に對する價值と性質とに於て家庭労働と其の趣を異にして居るが、金銭で償はれない働であることは其の軌を一にして居る。而して家族の大なる満足を創造し、家庭生活に直接貢獻することは家庭労働よりも一層大なるものである。

家庭に於ける主婦の支拂はれない労働と、管理の努力とは、主人が外部に於て活動して得るところの金銭収入に比し、其の價值は決して劣るものではない。共に家庭を維持する上の分業に過ぎないのである。故に、主婦は此の點に於て、夫と等しく經濟的に家庭を維持しつゝあるといふことを自覺し、夫も亦同等の價值を主婦の上に認めるのが正當であると思ふ。

③家庭の固定資本收入 家庭内の固定財貨即ち家屋設備・家具・什

家庭の社會收入

器等を使用することによつて家族は満足を得るものである。然し、不要・贅澤な財貨資本は其の効果を發揮せず、貯蓄しておけば當然得られる金利をも失ふばかりでなく、資本の浪費となるものである。故に、貨幣資本を財貨資本に移さうとする時には、深甚の考慮を要する。

(三)家庭の社會收入 家庭は、國家・公共團體等が公の經濟に依つて設備された公園・圖書館・教育機關・公衆衛生機關・娛樂機關・其の他種々の社會的施設を使用することによつて眞の收入を受けつゝあるのである。國民が税金を負擔する義務のあるのは、此等社會的施設を使用するより來るものである。

## 第二章 家庭の消費

### 第一節 生産と消費との關係



生産

●生産 生産とは、物質を創造することではない。自然物に人力を加へ、物の形状や性質を變化させ、或は其の場所や時間を變へて吾々の生活に効用あるものとなし、又は既に効用ある物を一層効用ある物にすることをいふのである。

消費

●消費 家庭の消費とは、家族の欲望を満足させる目的で、金銭收入・家庭労働收入・家庭管理收入・家庭固定資本收入等を使用するのをいふ。換言すれば、生存上の欲望を充すために、外界の財貨を得利用して、其の効用を享受するところの活動である。消費によつて、財貨の効用は消滅し、又は減少するのである。

消費と生産との關係

●消費と生産との關係 生産と消費とは全く相反する行爲である。即ち生産は財貨の効用の發生増加であり、消費は財貨の効用の滅失減少である。然し、其の間互に因果の關係を有し、相離れることの出来ないものである。例へば、財貨の生産には絶えず或種

生産的消費と  
不生産的消費

の原料を消費して居る。此の點から見ると消費は生産の必要條件であつて、生産あるが爲めに消費があるのである。然し、其の生産は何の爲めにするかといへば、消費せんが爲めである。即ち消費が生産の起因であるともいへるのである。

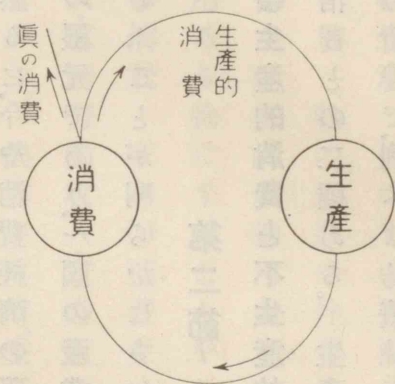
家庭生活に於ける消費は、經濟上重要な位置を占めて居るにもかゝらず、最近に至るまで、輕視されて居たのは遺憾であつた。然るに、今や消費經濟の研究が盛大となり、家庭の消費經濟は生産の根元であり、一國の産業を正しい道に指導する原動力であるといふことが明らかにされるやうになつて來た。

## 第二節 合理的消費

●生産的消費と不生産的消費 消費には、生産的消費と不生産的消費との二種ある。生産的消費とは、更に生産の結果を得るための消費で、例へば紡績絲を生産せんが爲めに綿を消費し、織物を得



不生産的消費  
の區別



んが爲めに絲を消費するが如きもので眞の消費ではない。眞の消費は不生産的消費である。財貨の効用を享受して其の欲望を満足させるもので享樂的消費ともいふ。家庭經濟に於て研究するのは此の消費である。

●不生産的消費の區別 不生産的消費は、欲望の種類によつて種々に區別される。欲望には、精神的のものと、物質的のものとがあり、物質的の欲望は更に左の四種に分ける。

①必然的欲望 吾々の健康を維持するに必要な程度の衣食住の欲望を必要的又は自然的欲望といふ。若し、此の欲望を満足させない時は、吾々は健康を害するやうになる。

②地位的欲望 社會的地位を保つ上に必要な欲望を地位的欲望といふ。若し、之を満足させない時は、社會的地位を保つことは出来ぬ。

③快樂的欲望 快樂的欲望は之を満足させないでも、身體の健康を害し又は社會的地位を危くするものではない。之を満足させると心身の休養、慰安となり、更に進んで生産能率を高めることが出来るものである。快樂的欲望は現代の生活に於ては正當な消費と認めてよいが、若し、精神的訓練を缺いだならば、忽ち奢侈的消費に陥る虞があるから、注意を要する。

④奢侈的欲望 奢侈的欲望とは、身分不相應な欲望であつて、生活上其の必要の程度を超え、個人にとつても社會の爲めにも不必要、不合理なものを得やうとする、虛榮心、好奇心から來る情慾である。此の欲望を満足させる消費行爲は奢侈であつて、一家の經濟を危



## 合理的消費

くし、堅實な精神を失はせ、更に社會的生活に惡影響を及ぼすものである。

●合理的消費 以上の必然的地位的快樂的欲望に満足を與へる消費は合理的消費であつて、人類の幸福を増進し、向上させる爲めに必要なものであるが、奢侈的消費は經濟的罪惡であつて、絶対に許すことの出来ない非合理的消費である。

或る經濟學者は、『富の消費事務所を尊重すべし。如何となれば、一國の貧弱・困窮の原因は其の收入の缺乏よりも之を消費する知識の缺乏より來るものなり。』といつた。味ふべき言である。

## 第三節 消費行爲の考察

消費行爲の結果は、通常二つの方面から其の適否が考察せられる。其の一つは家庭的考察で、他の一つは社會的考察である。

●家庭的考察 家庭といふ團體に對して消費者自身が負ふ責任

## 消費行爲の適否

## 家庭的考察

## 社會的考察

から消費の適否を考察する方面である。例へば主婦が不良な品質の衣服を購入したとせば、其の結果は金錢の損失となり、失望し、不十分な奉仕をしたといふ自責の感が起る。之に反して能率ある奉仕をした場合には、家族に十分の満足を與へ、自己も愉快である。而して此の考察は消費を合理化する上に有効なものである。

●社會的考察 消費行爲の結果が如何に產業界を支配するか、或は社會に如何なる影響を與へるか等、社會的見地から消費行爲の適否を考察するのである。

或る經濟學者は、『人類の幸福安寧を増進する要件が三つある。よりよき生産、よりよき選擇、よりよき消費即ち之である。而してよりよき消費は財貨の効用を大ならしめ、よりよき選擇と共によりよき生産よりも經濟上重要視すべきである。』といつた。實に至言である。吾々が或る財貨を選擇し、購入することは、其の財貨の



生産の繼續を助けることになり、或る財貨を購入しないことは、其の財貨の生産を阻む結果となる。消費を行ふに當つては、種々なる財貨の生産状態を研究し、製造状態の理想的なものは、益其の生産を刺激し、悪い状態のものは、生産を阻止し、よき工業を發展させなくてはならぬ。即ち主婦は購買力を通じて、生産界を指導し、如何なる財貨を生産すべきかを決定する力を有するものである。若し主婦が社會團體として此の力を利用するに成功すれば、消費者としての勢力は、其の力を強め、一國の産業界を統御指導して正當な發展を遂げさせるやうになる。

消費の社會的反響に就て考ふべき事の一つは、其の消費が眞に必要で健全なものであるか、或は奢侈的消費ではないかを識別することである。奢侈は、生産的勢力を必要な財貨の製造から不必要な財貨の製造に轉用させるものである。爲めに不必要な財貨

が多く生産され、必要な財貨が不足し高價となる。之に反して或る程度に奢侈を制限すると、一方に於て貯蓄が起り、社會的資本が増加して、社會の生産力を高めるやうになる。奢侈に陥ると欲望は益高まり、自己の屬する社會階級を偽り、身分不相應の支出をしてまでも欲望を満足させやうとし、其の結果、人々は華美を競ひ、社會は腐敗墮落する。かく吾々の消費行爲が其の社會にとり、又個人にとつて經濟上精神上に影響することの大なるを思はゞ大に誠心しなくてはならぬ。

奢侈は富者の陥り易い弊であるが、貧富共に陥り易い缺點は浪費である。浪費とは心身に有害無益な欲望を満足させんが爲めに財貨を消費し、又は財貨の効用を利用することなくして無價値に消滅させることである。家庭内に於ても食物を腐敗させて之を棄て、食品を調理するに當つて、なほ利用し得られる部分を棄て



る等は浪費の手近い例である。  
浪費は價值なき消費で、個人の購買力を阻害するばかりでなく、社會的財貨を消滅させ、且つ不合理な物價騰貴の原因となる等奢侈と同じくよくないことである。

### 第三章 一家の支出

#### 一家の支出

●一家の支出 一家の支出とは健全にして充實せる生活を營む爲めに財貨を消費するをいふ。通常經常支出と臨時支出との二つに分ける。經常支出とは一家の生活の爲めに規則正しく消費する支出であつて、臨時支出とは豫期させない事件の爲めに、臨時に要する支出をいふ。衣食住に關する費用は前者に屬し、各種の災害に要する支出は後者に屬する。經常支出は常に經常收入によるべきであるが、臨時支出は必ずしも、臨時收入によるべきもの

ではない。

#### 經常支出

●經常支出 經常支出の内譯は大體左の如くである。

(1)食物費 食物は家族の健康を維持する爲め、衛生上の原則に合する種類と分量とを供給しなければならぬ。飲食物材料、調味品等は勿論、臺所器具、食器類の費用をも此の中に包括させる。

(2)衣服費 衣服費は家族の増加と共に、甚だしく増加するものであつて、食費の増加率よりも大である。衣服の様式や各人の所持する數量等は、大に研究する必要がある。流行を追ひ、奢侈に流れ、徒に多くの衣類を死藏して居るのを誇るのはよくない風習である。衣服材料、夜具、衣服附屬品等の費用は勿論、其の調製費、洗濯代等も衣服費として計上すべきである。

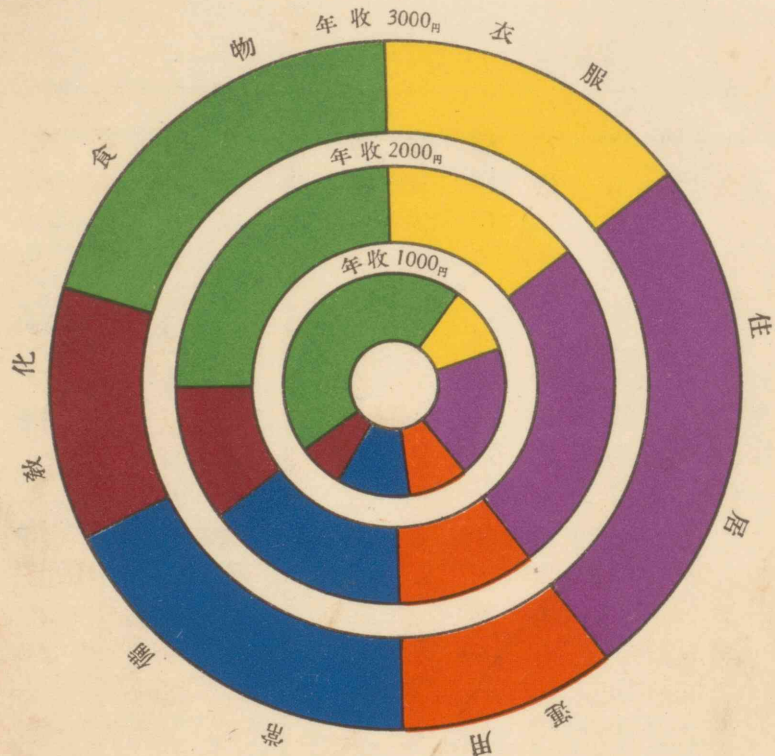
(3)住居費 衛生上必要な條件に適合し、地位的要求をも加へ、趣味上、教育上適當な所を選び、許された經濟の範圍内で、最大の効果を



支出の標準

收めるやうにとむべきである。住居費には、家賃・借地料・修繕費・家具費等を含む。  
 (4) 運用費 運用費は、家の大きさ・構造・間取等によつて、著しくちがふものである。薪炭・ガス・電燈に關する費用は勿論、雇人の費用、家族の小遣等も之に含ませる。  
 (5) 常備費 常備費には租税・公課・衛生費・貯金・保険料等を含む。租税・公課は十分に準備しておく必要がある。又収入に應じて、一定額を貯蓄し、保険には力めて加入しておくがよい。  
 (6) 教化費 學資金・圖書費・新聞雜誌代・娛樂費・交際費等を包括して教化費とし、一定額を計上する。此の費用は惜んではならぬ。  
 ③ 支出の標準 今左に年收の等級により支出費用に對する割富百分率の標準を示さう。  
 (左表は家族を夫婦と子供三人と見做して計算す。子供三人は大人二人と見做して計算す。)

# 家計の立て方



年 收	月 收	食物費	衣服費	住居費	運用費	常備費	教化費
3000 円内外	250 円内外	20%	15%	25%	10%	18%	12%
2000 円内外	166 円内外	25%	15%	25%	10%	15%	10%
1000 円内外	82 円内外	45%	10%	20%	8%	10%	7%



服 衣					費 物 食										内			
手	洗	費	料	材	合	費 料 食								譯	實數及び百分比	生活分類		
						其	嗜	調	脂	卵	魚	野	穀				計	他
小	同	附	下	上	計	其	嗜	調 <td>脂</td> <td>卵</td> <td>魚</td> <td>野</td> <td>穀</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td>	脂	卵	魚	野	穀					
	寢	屬	着	着		の	好	味	肪	乳	介	菜	類					
	具	品				他	品	品	糖	類	類	其	の					
費	計	類	類	類	類													
七二・〇	七二・九	五・六	二四・一	一一・〇	五九・三	二〇	四・四	〇・七	二・三	九・六	二六・七	一八・八	一七・二	二〇・三				
五八・八	七六・六	一〇・四	二九・〇	一六・〇	四四・六	二五	一・四	一・九	一・八	五・三	二四・七	二一・四	一八・四	二五・一				
七九・七	七二・三	一〇・六	二九・五	一七・〇	四二・九	四五		〇・六	三・一	七・三	二四・七	一〇・六	二一・一	三二・六				





建築費・借地料を計上したのは、土地を借りて自家を建築することとして立案した爲めである。借家の場合には借家料を計上し、建築費と借地料とを省くこと。

居住費				費			
合	費具家 小食家 計器具 計器	費屋家			合	他の其 計化粧 他費	費存保入 小裁 計縫 費
		小	借借火家修建	料料險稅費費			
			家地災屋繕築				
計	計	計			計		
二五	一二・〇	八三・八	八八・〇	一六・三 二・四 七・四 六・二 六七・七	一五	五・八 八・九 一二・四	二三・〇
二五	一一・五	八六・七	八八・五	二五・一 二・四 八・二 六・〇 五八・三	一五	九・三 一四・一	一一・五
二〇	一〇・九	八四・一	八九・一	三二・一 二・一 九・八 五・三 五〇・七	一〇	一一・二 一六・五	二〇・三

費用運				常備費			
合	費用運 給交給燃煖照 與通水料房明 計費費費共費費	小	衛常備藥・醫療器具類	小	租公	小	貯金
			衛生費		課稅		保險料
			計		計		計
一〇	四五・〇	一二・〇	一・〇	一〇・四	一・一	八・二	四四・九
二五	一二・三	二・〇	六・八	一四・〇	〇・八	五・〇	四三・五
二〇	八・〇	二・五	一〇・四	二五・七	二・五	二・五	四七・五



教 化 費					合 計
合 計	教 育 費	交 際 費	向 上 費	娛 樂 費	寄 附 費
	二九・四	三二・二	二一・四	一三・〇	四・〇
	一八	一五	一〇	七	七

【備考】

一、合計欄の百分比は収入を一〇〇として計算したもの。

一、費目内の各項の百分比は合計を一〇〇として計算したもの。

第四章 豫 算

生活の標準

●生活の標準 人の行爲には各標準がある。其の標準は人の行爲を導き、活動の方向を定め、生活に規矩あらしめるものである。吾々が家庭經濟を掌るにも或る標準が必要である。此の標準な

豫 算

しには消費の合理化を行ひ、欲望の満足を大にし、家族の幸福を増進することは出来ない。吾々は、先づ自己の収入を基礎として、此に適應する生活標準を正確に意識し、それによつて豫算を立てることが肝要である。

●豫算 豫算とは一定期間中に於ける家庭の収入を豫定し、之を適當の支出項目に配分した見積計算であつて、之に準據して經濟生活を營むを豫算生活といふ。豫算生活をするには左の各項を嚴守しなくてはならぬ。

(1) 最もよく熟考せられた經濟生活の計畫。

(2) 収入支出の明確なる記載。

(3) 會計の鑑査即ち、豫算と實際と合致するや否やを會計簿を通じて對照鑑査すること。

●豫算編成上の注意

注意すべき要件は左の如くである。

豫算編成上の注意



(1) 一定期間の収入と支出とを見積り、支出費目の輕重に従ひ百分率を以て割當てること。

例へば一ヶ月二百五十圓の収入を其の二五%を食物費、一五%を衣服費、二五%を住居費に充て、なほ地位的・娛樂的・欲望をも充すための費用を加へ、收支の調和をはかる。

(2) 収入を各支出費目に割當てるには、衣食住の如き必要缺くべからざるものを重く、且つ先にし、他は之を軽く且つ後にすること。

衣食住の費用は健康を維持するに必要な程度以下に削減することは出來ないが、娛樂費の如きは窮せる家計では之を省くか、又は少く見積るべきである。

(3) 豫算の支出費目は出來得る限り少くすること。

支出費目が繁雜であると豫算の實施を不可能ならしめるものである。即ち從來行はれて居た食物費・衣服費・借地及び借家料・税

金・衛生費・交際費・教育費・圖書費・薪炭費・電燈費・給金・保険料・貯金・雜費等に分類することは餘りに複雑に失する。

(4) 収入を各支出費目に割當てるには十分の考慮を要する。

収入の多少は各費目に充當する百分率に大なる差異を生じ來るものである。此の収入配分に關し、エルンスト・エンゲル氏は左の四ヶ條を發表して居る。

(一) 収入と食物費の百分率は常に反比例する。収入が増加すると食物費の百分率は減少し、収入が減少すると食物費の百分率は反つて増加する。

(二) 衣服の百分率は収入の増減に正比例する傾向がある。

(三) 住居費の百分率は収入の増減にかゝらず、常に同一の比率を保つものである。

(四) 教化・公費・娛樂費等は、収入の増加に従つて著しく増加する。



豫算は前年度の決算の結果を参案し、實際に適合するやうに編成することが肝要である。それには、家計簿を着實に記入し、其の結果を次年豫算の編成に際し利用するのが便利である。

## 第五章 収入・支出の調和

收支の調和

●**收支の調和** 一家の収入と支出とは、常に豫算で之を定め、忠實に實施して、收支の調和をはかるのが、家事經濟の要道である。豫算を遺漏なく實行すると、収入と支出とは必ず相平衡するものであるが、經濟界には、種々の變動が起り易く、一家の經濟は其の影響を受けて、窮地に陥ることがないでもない。

家計に影響する經濟的事項

●**家計に影響する經濟的事項** 家計に影響を及ぼす主要な經濟的事項は左の如くである。

(1) **収入の増減** 一家の消費は、常に収入に應じて定むべきもので

あるが、消費は無限に縮少するわけには行かず、一定量は必要である。故に、収入が若し最少限度の消費を支辨するに足りない場合

には、收支の不調を來すこととなる。之に反して収入が増加すると、必要な費用を支辨してなほ過剰が出来る。

(2) **物價の高低** 物價の高低は、収入の増減と同一の結果を來すものである。即ち、一般に物價が騰貴すると、從來一定の収入で收支相償つて居た家計は、忽にして不足を告げ、物價が一般に下落すると、過剰が出来るやうになる。

(3) **不慮の支出** 収入と支出とは、豫算に於て互に相調和するやう編成しても、其の實施の中間で、立案の際には全く豫見することの出来なかつた事故が発生し、其の金額も多額で、豫定の収入では、到底支辨することが出来ないやうになることがある。

收支不調の場合の處置

●**收支不調の場合の處置** 支出が収入を超過し、家計に不調を來



した時は、如何にして補充すべきかは、平素から攻究しておかなくてはならぬ。収入の減少又は物價の騰貴により、家計が不如意に陥つた時は、一家擧つて元氣を作興し、本業に勵精するは勿論、副業を營んで収入の増加をはかり、又出來得る限り消費節約をすれば如何なる難境にあつても恢復し得られるものである。若し震災・火災・水害・病氣其の他不慮の災害の爲めに、収入の不調を來した時は、貯金又は保險金によるがよい。貯金も保險金もなく、然も其の補充に時日の餘裕のない時は、借金又は家財の賣却によるより外に途はない。此の場合には其の何れによるべきかは、大に考慮しなければならぬ。

## 第六章 餘財の管理

### 第一節 貯蓄

貯蓄

●貯蓄 一家の消費を時に基づいて分けると、現在消費と未來消費との二つとなる。現在消費とは日常生活に關する現在の消費であつて、未來消費とは將來の用に供する爲め財を貯蓄することである。

吾々は、一家の經營上、現在消費の合理的豫算を巧に運用し、冗費を省き、餘剩をつくり、之を未來消費に充てるやうにつとめなくてはならぬ。冗費の甚だしいものと認むべきものが二つある。一つは有害的消費で、一つは奢侈的消費である。

①有害的消費 暴飲・暴食の如く、消費者自身のために有害になる消費を有害的消費といふ。つとめて避くべきものである。

②奢侈的消費 奢侈は虚榮・虚飾の心情から起る無益な消費であつて、個人を墮落させ、家産を蕩盡し、直接間接に社會や國家に害毒を流すものである。克己自制して奢侈は慎むべきである。



貯蓄は勤勉努力、克己節制、儉約質素等の美德涵養の手段ともなり、生活の安定を得ることにもなる。そればかりでなく、一國の資本を豊富にし、従つて、産業を發達させる上に大なる關係を有するものである。たゞ、茲に注意すべきことは、貯蓄にばかり偏し、現在消費を輕視して生活の合理化を無視しないやうにすることである。吝嗇は決して賞すべきことではない。警むべきは浪費である。合理的な生活は之を營まなくてはならぬ。

合理的な生活を營み、餘剰を生じた時は、貯蓄して未來消費に充て、一層大きな効果を享受するやう計畫すべきである。

貯蓄の形式 貨幣又は財貨を原形の儘保存するものを單純貯蓄といひ、自己又は他人の生産營利の方便に供するを投資といふ。現今貯蓄は投資の形式によるのが普通である。投資には左の二種ある。

貯蓄の形式

(1) 直接投資 所得を生ずる事業に直接投資するを直接投資といふ。直接投資は經營者に相當の見識と經驗とがないと失敗に歸することが多い。

(2) 間接投資 直接投資の出来ない者が、之を他に託し、適當の事業に投資させ、其の利益の幾分を利子として受け取るものを間接投資といふ。

間接投資 郵便貯金、銀行預金、金銭信託等は間接投資の著しいものである。

間接投資

郵便貯金

(一) 郵便貯金 郵便貯金は政府で保管するので最も安全である。通常貯金と定期預金との區別がある。相當まとまつて當分使用の途のない金銭は、定期預金としておく方が有利である。

(二) 銀行預金 銀行に預金をするには、最も信用あるものを選ぶべきである。預金には種々の區別があつて利子も區々である。

銀行預金



大銀行では二  
千圓以下には  
利子を附せ  
ず。

金銭信託

①定期預金 六ヶ月又は一ケ年等一定の期間を定めて預入し、期間内には原則として引き出すことの出来ないものである。銀行は定期預金證書を預金者に交附する。利子は最も高い。

②當座預金 銀行と當座取引を開始すると、何時でも預入、引き出しが出来る。引き出しは必ず銀行から交付された小切手によらなくてはならぬ。此の預金は支拂に利用するのが主目的で、利殖の目的には適しない。利子は極めて安い。

③小口當座預金 特別當座預金ともいふ。利殖を目的とするには、之によるが至當である。利子は前二者の中間である。

(三)金銭信託 金銭信託とは、金銭を或る期間信託會社に信託することをいふ。金銭信託には左の三種ある。

①特定金銭信託 利率、擔保物、期間等につき、依託者が金銭の運用方法を具體的に決定し、會社は自由に裁量の出来ないものをいふ。

損害のあつた場合には會社は其の責任は負はない。

②指定金銭信託 運用の大綱を指示し、他はすべて信託會社の判斷裁量に一任するものである。元本に損失を來した場合、一定の収益を得なかつた場合は、損失を填補するといふ契約を結び、委託者の期待に添ふ自由を會社に許してある。契約がなくば填補の義務はない。

③不特定金銭信託 特定も指定もせず、運用の一切を舉げて信託會社に一任するものをいふ。但し運用の範圍は法令によつて規定されてある。

金銭信託は、信託期間は二ケ年以上、一口の金額は五百圓以上である。毎年五月十一月の決算期に、其の運用から得た利益金を受け取り、又は之を元金に繰り入れ、期限が來たならば元利金の返還を受けるのである。



銀行預金は、契約した一定の利子だけを得るに止まるも、金銭信託は、資金の運用から得た利益から、會社は一定の手數料を引き去り、残りを悉く委託者に渡すのであるから、資金運用の利益が多ければ多いほど、委託者の利益が多くなるのである。

銀行の定期預金と金銭信託とはよく似て居るが、金額・期間・利益の分配に差異がある。相當の金額に達し、數年間据る置くも差支ない金銭は、金銭信託による方が、銀行の定期預金よりも、安全且つ有利である。

## 保 險

政府が郵便局にて取扱はしめる簡易保險がある。

④保險 保險は、偶然であり、且つ豫見することの出来ない特定の危険を恐れる多くの人々が聯合團結し、團體中の、或者が特定の災禍にあつて、損害を蒙つた時は、其の損害を多數の團體員が分擔する制度である。加入者は保險料を納め、災禍にあつた時は契約の保險金を受け取り、其の損害を補足するのである。保險には生命

險・火災保險・運送保險等種々の種類がある。

(一)生命保險 生命保險は、被保險人の生命又は健康上の危険に對して保險を行ふもので、人的保險ともいふ。

(1)死亡保險 死亡保險は、被保險人が死亡した時に、契約の保險金を指名人に支拂ふものである。

(2)生存保險 生存保險は、死亡保險と反對に被保險人が一定の年齢に至るまで生存した時に限り、契約の金額を支拂ふものである。

(3)混合保險 生存保險と死亡保險とを結合したものである。被保險人が一定の年齢まで生存した時は勿論、其の以前に死亡しても、契約の金額を支拂ふものである。

(二)損害保險 家屋その他の財産の損害に對して保險を行ふもので、物的保險ともいふ。

(1)火災保險 火災によつて家屋や物品等の焼失した場合に、其の損害を保險者が填補するものをいふ。



貯蓄と危険分散主義

(2) 運送保険 運送品が運送中偶然に被つた損害を保険者が填補するものをいふ。

⑤ 貯蓄と危険分散主義 餘財の貯蓄は之を一種にのみ集中せず、なるべく多種に分散しておく方が安全である。例へば銀行預金にのみ集中しておく、銀行が破綻した場合に、多年勤儉の結果も水泡に歸する。株券でも其の會社が不振であれば利益の配當はない。貸金も利子がとれないばかりか元金さへも回収の出來ないこともある。故に、餘財は土地・株券・貸金・貯金等とし、又保険にも加入しておく等各方面に分散しておく、たとひ一部分に損失があつても他種で之を補ひ、一家經濟の上に蒙る損害が少くてすむかゝる方法を危険分散主義といふ。

## 第二節 一家の資産

一家の資産

① 一家の資産 我が國の如く私有財産制度の認められて居る國

資産の區別

では、家人の勤勞や貯蓄によつて得られた餘財は、積んで之を永久に存續し、之からの所得を一家の消費に充て、一家を經營することが出来る。故に、資産があれば必ず所得があり、其の所得は確實なものである。然し、吾々には贈與・賣買・貸借等の權利がある。所得を永久に存續殖財して、一家生活の維持向上の資に充てると否とは吾々の自由である。若し、此の資産を費消し、其の額を減ずるやうなことがあれば、一家の經濟は危殆に陷る。座して食へば山も空し。警むべきである。

② 資産の區別 一家の資産は之を動産と不動産とに大別するこ

とが出来る。

(1) 不動産 不動産とは、土地及び其の定著物をいふ。定著物とは家屋・竹木等の如く土地に附著して居るものをいふのである。

(2) 動産 不動産以外の一切の物を動産といふ。貨幣は勿論、其の



他有價證券・家具・家畜等はすべて動産である。如何なる財産が特に重要であるかは時代によつてちがふ。例へば、遊牧時代の重要財産は家畜であつたが、農牧時代には土地となり、制度の發達した現代では有價證券が重んぜられるやうになつた。故に、一家の資産は常に其の時代に適應する方法で保管するを要する。資産を減少させず、一家収入の基礎として相當の利益を收め、又間接に生産の資源たらしめるには、特に其の時代に適應する經濟的知識と手腕とを必要とする。

## 第七章 家計簿記

家計簿記

●家計簿記 家計簿記は、一家の金錢の收入と支出とを記載し、其の經濟狀態を明らかにする方法である。簿記法によると、金錢の用途が明らかになるばかりでなく、豫算

帳簿の種類と形式

と對照して節約を重んじ、物價の高低等にも留意することとなり、合理的な消費をするやうになる。

●帳簿の種類と形式 帳簿はなるべく其の數を少くし、記入様式も簡單明瞭なのがよい。日記・仕譯帳と月・年末計算表とを主簿とし、賄帳を補助簿として組織するのが最も便利である。

(1)日記・仕譯帳 日々の金錢出納を記載し、且つ之を收入・支出科目に仕譯する帳簿であつて、最も大切なものである。其の様式と記入法は附録に示してある。

(2)賄帳 日記・仕譯帳に對する補助簿であつて、賄に關する費用の一切を記入し、毎日計算し、其の合計を日記・仕譯帳に轉載するのである。其の様式は各自に最も便利と思ふものを制定するがよい。

(3)月・年末計算表 月末計算表と年末計算表とは、一枚の表であつて、日記・仕譯帳の各科目計算の結果を、月末計算表の相當欄に記



入し、一ケ年の末に之を合計して年末計算表とする。其の様式は附録に示してある。

帳簿取扱上の注意

●帳簿取扱上の注意 すべて帳簿を取扱ふには、左の諸點に注意するを要する。

- ①記載事項が発生した時には、直ちに記入すること。後でまとめ思ひ出して記入するのは、不正確となる根元である。
- ②誤算のないやう注意すること。一日を正確にし、一ヶ月を正確にしておかなければ、一ケ年の總計を正確にすることは出来ない。總計の際に誤謬を発見することは困難であり、時間を空費することが多いから、其の基礎を固めておくことが肝要である。
- ③誤記は朱線を引いて、其の痕を明らかに残しておくこと。塗抹したり削取したりするのは、人に疑惑の念を起させてよくない。
- ④數字や文字は、正確・明瞭を期し、すべて手綺麗に取扱ふこと。

數字の粗雜は、計算の間違ひを來す原因となることが多い。

## 第八章 家務の處理

### 第一節 家務の分擔

家務の種類

●家務の種類 如何なる家庭でも、家務の種類は極めて多く、其の内容は複雑極まるものである。

今試に其の主要なものを列挙して見やう。

- ①食物に関するもの (一)食品材料の選擇・購入、(二)食物の調理・盛附・膳こしらへ、(三)食卓の準備後仕末、(四)臺所の整理・食器の仕末、(五)食品の貯藏・漬物、(六)飲料水の淨化、(七)洗物・磨物等。
- ②衣服に関するもの (一)衣服附屬品材料の購入、(二)裁縫・洗濯・縫ひ返し・補綴・染め直し・蟲干、(三)着用前後の手入・仕末等。
- ③住居に関するもの (一)朝夕の掃除・大掃除、(二)浴場の掃除・準備後



仕末、(三)洗面に對する準備、後仕末、(四)庭掃除、(五)家具の手入・煖房・照明に對する器具の手入・修繕、(六)薪炭の購入・ガス・電氣の消費に關する注意。

(4)育兒養老に關するもの (一)幼兒の養護と教育、(二)老人の介抱即ち特別なる食物・衣服・慰安に關する事項。

(5)交際に關するもの (一)贈答品の選擇、(二)訪問・通信・饗應。

(6)會計に關するもの 金錢の出納・家計簿記の記入・整理。

(7)其の他 家庭日誌の記入、其の他庶務の處理。

●家務の處理法 此等の家務を處理するには、行事を定め、分業法により、家族に分割擔當させるがよい。家族が多く、老人や乳兒があつて、女中や子守を雇ひ入れた時は、分擔事項、並に其の仕事に着手する時刻を明示しておき、女中が二人以上である場合には各自の分擔を明確にしておくが便利である。

家務の處理法

日行事

夫婦  
子供三人  
長男 一五歳  
次男 一〇歳  
長女 七歳

家務の整理には一日・一週・一ヶ月等の行事を定め、之によつて着處理して行くがよい。

(一)日行事 日行事の一例を左に示さう。

時 間	主 婦	主 人	長 男	次 男	長 女
自午前六時 至午前七時	起床・身仕度 朝食仕度	起床・身仕度 新聞閱覽	起床・身仕度 寢室整理 庭掃除	起床・身仕度 寢室整理	起床 身仕度
自午前七時 至午前八時	朝食 朝食後仕末	朝食 讀書	朝食 登校	朝食 登校	朝食 登校
自午前八時 至正午	主人出勤後各 室掃除・新聞閱 覽・洗濯・食品 買出し・盡食	出勤			
自正午 至午後四時	盡食後仕末・ 洗濯・浴室掃 除・復習手傳	歸宅	歸宅	復習宅	復習宅
自午後四時 至午後六時	夕食仕度 風呂準備	主人歸宅 入浴	復習 外庭掃除 入浴	豫習 入浴	入浴
自午後六時 至午後八時	夕食後團欒 臺所の整理 日誌の記入	夕食團欒 讀書	夕食團欒 豫習復習	夕食團欒 戸締	夕食團欒 就寢
午後十時	就寢	就寢	就寢	就寢 (九時)	



週行事

(二)週行事 特別な家務を處理するためには、週行事を定めておくべきである。其の一例を示すと左の如くである。

月 日曜日外出の衣類整理・浴室の掃除・洗濯。

火 洗濯物の仕上・補綴・磨き物・臺所の掃除・整頓。

水 居間・客間の掃除。

木 買物・訪問・訪問受け。

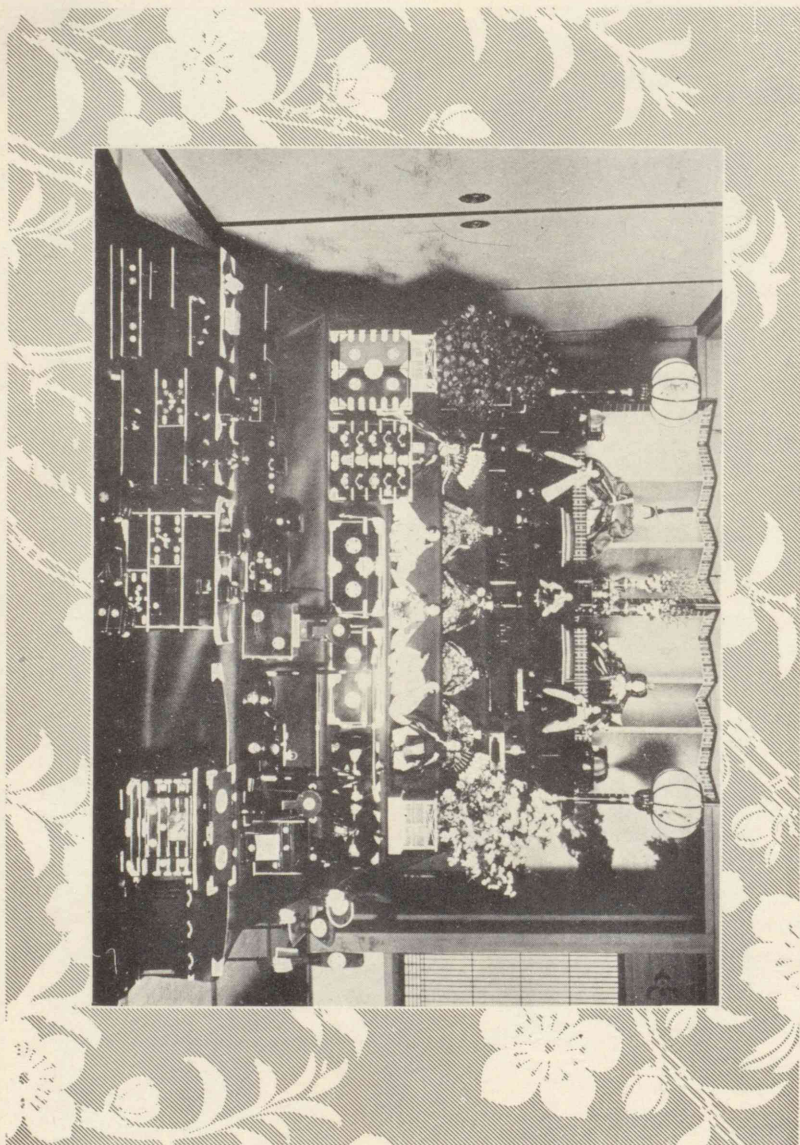
金 食堂の大掃除。

土 特殊の料理。

日 慰安・修養。午後洗濯物の水浸し。

(三)年中行事 家庭の重要な行事に、國家又は地方的社會的の行事を加へて、一ケ年中の主要行事を定めておくがよい。

家庭の行事中、年中行事としてあらはしおく必要のあるものは左の如くである。



形 人 雛





節 月 五

(1) 記念日・祭日 一家の記念日・家族の誕生日・祖先の祭日等。

(2) 住居の修繕・手入 家屋の修繕・疊替・庭園の手入・障子張替・春秋大掃除等。

(3) 衣類の手入 更衣・蟲干・衣服材料の買入等。

(4) 食物・薪炭 薪炭の購入・梅漬・澤庵漬等。

國家的行事としては、祝祭日とか、陸海軍記念日とかの如き國家的記念日を、地方的・社會的行事としては、地方祭禮や節句、殊に雛祭や端午の節句は是非採擇すべきである。

## 第二節 家務の處理と使用人

●家務の處理と家人 家庭ではなるべく人手を用ひず、家族協同の働によつて家務を處理するのが理想であつて、使用人を雇ふのは、已むを得ない時に限るべきである。

●家務の處理と使用人 使用人の人物如何は、家務の處理に大な

家務の處理と  
家人

家務の處理と  
使用人



る關係があるばかりでなく、家庭の和樂、子女の教育、一家の風紀、他人との交際等に及ぼす影響も頗る大であるから、之が選定に際しては、慎重に考慮しなければならぬ。

使用人は身體が強健で、遺傳性・傳染性の病なく、正直であつて従順なのがよい。又既に種々の家庭に奉公したものと、都會生活をしたもののよりも、田舎育ちの奉公に經驗のないものを家風に適應するやうに訓練した方が便利である。

使用人に對しては親切でなくてはならぬ。使用人は多くは教養ある者でないから、其の性質や技能に缺陷のあるのは免れないことであり、過も多いのが常である。徒に細事を檢舉して叱責することなく、寛大に取扱ひ、靜に諭すべきである。年の若い女中に對しては、裁縫・割烹・作法等から一家經營に必要な事項に至るまで親切に導いてやれば、使用上に便利なばかりでなく、其の人の將來

家務の處理と  
派出婦制度

物資の購入

の爲めにも益する所が大である。又夜間にはなるべく自由の時間を與へて、讀書修養につとめさせるがよい。

◎家務の處理と派出婦制度 近來都會地には、派出婦といつて、時間制又は日雇で女中を雇ふことの出来る制度がある。若し、此の制度が健全に發達したならば、一家に事故が起り、特に人手を要する場合に、臨時に雇ひ入れることが出来、便利で且つ經濟的である。

### 第三節 物資の購入

物資の購入は重要な家務の一つであつて、其の巧拙は一家の經濟に多大の影響を及ぼすものである。故に、主婦たるものは、日用品の選擇に關する知識と經驗とが必要であり、其の購入の方法について、大に攻究しなくてはならぬ。

(1) 日用品の正常價を知るべきこと。

日用品は、需要供給の關係、運輸の便否、自由競争の多少、原産地が



ら消費者の手に入るまでの中間商人の手数料の多少等によつて其の價格に高低の差を生ずるものである。一般に走り物又は流行の先驅を爲すものは高價であつて、季節後れの見切品は安價である。吾々は新聞紙の經濟記事又はラヂオの日用品値段段に注意し、時價を知ることにとめなくてはならぬ。

(2) 日用品の品質の良否、新鮮か否か、眞物か偽物かを鑑別すること。日用品の鑑別に對する知識と判斷能力とは主婦には極めて必要なことである。

(3) 日用品の重量や容積の見積を正確にすること。

此の能力は二様の意味から必要である。一つには物資を購入する際に狡猾な商人に欺かれないため、二つには、過量に購入して浪費に陥り、又は不足して追加注文をなす等の不經濟を防ぐ爲めである。

左表は食品購入の際の參考にもと、其の一例を示したものである。主婦は此の見積に習熟すべきである。

品名	分量	人数	品名	分量	人数
甘藍	大一個	煮て食す一〇人	胡瓜	大一個	酢の物一人
馬鈴薯	大一個	煮付附合二人	甘藷	中一個	スタッフ二人
菠薐草	大一束	浸物二人	茄子	大一個	しぎやき一人
莢豌豆	約二〇粒	附合二人	枝豆	一	束鹽うで七人
牛肉	約四〇〇瓦	三人	牛肉ロース	約四〇〇瓦	四人―五人
すきやき					

(4) 食品の出盛季節を知り、之を購入利用すること。

出盛の食品は榮養價が大であり、美味であるばかりでなく、價格も亦低廉である。

今一例として東京地方の蔬菜類の出盛を示して見やう。



魚貝類等も一覽表をつくつておくがよい。

交際の趣旨

第四節 交 際

●交際の趣旨 親戚や朋友の交際は誠意懇切を旨とし、永久に圓滿な交誼を持続し、凶事には共に悲み、吉事には共に楽しむやうにすべきである。

我が國では、男子は公私の交際が開けて居るが、女子には其の機

食 品	出 盛	食 品	出 盛	食 品	出 盛
甘 藷	一〇月―十二月	山東菜	十一月―十二月	蠶 豆	六月―七月
馬 鈴 薯	六月―八月	チイフ白菜	十一月―十二月	松 茸	一〇月
里 芋	十一月―十二月	甘 藍	五月―九月	椎 茸	四月―一〇月
蘿 蔔	一〇月	葱	十一月―三月	う ど	三月―四月
燕 窩	十一月―二月	胡 瓜	六月―七月	菜 葉	十一月―三月
牛 蒡	二月―三月	西 瓜	七月―八月	菜 豆	六月―八月
胡 蘿 蔔	十一月―三月	枝 豆	六月―八月	筍	四月

交際上の心得

贈 物

會が甚だ少い。なるべく交際を家庭的にし、親戚や朋友の間、相互に手料理を供し、食事の間に歡談し、交を厚うすることは、家族全體の爲めにも有益であり、且つ、樂みが多い。今後は此の種の交際を盛にし、男女老幼共に楽しむやうにしたい。

●交際上の心得 主要なことだけを述べておく。

(一)贈物 贈物は吉凶其の場合により、其の種類を異にすべきは勿論、先方の地位職業趣味等を考慮して、よく之に適合したものを選ぶがよい。又人から物を贈られた時は、適當の時期に相當の返禮をなすべきである。

【生活改善同盟會の主張】

- (1) 一般に贈答の場合を少くすること。
- (2) 形式的な手土産を廢すること。
- (3) 餞別は特別親交あるものに限つて贈ること。



訪問

- (4) 交換的な贈答を廢すること。
- (5) 過分の贈答を廢すること。
- (6) 贈答品は實質を旨とし、外形上の虚飾を避けること。
- (7) 贈答品を使者・郵便其の他に託する場合には、手紙又は口上を以て其の趣旨を明かにすること。

(二)訪問 人を訪問するには、其の目的に應じ、禮儀に適つた服裝をなすべきである。時刻は、早朝・夜間・食事時間等を避け、且つ餘りに長座してはならぬ。用談を先にし、徒に時を費すことのないやう心掛けなくてはならぬ。茶菓の饗應を受けた時は、快く頂戴し、其の厚遇を謝すべく、遠慮に失するのはよくない。

【生活改善同盟會の主張】

- (1) 訪問は早朝・食事・前出勤・前就寢時等他人の迷惑する時刻を避けるやうにしたし。又休日にはなるべく之を避けるやうにしたし。
- (2) 面會時間の定めなき人の訪問は、豫め電話・郵便等で時間の打合せを行ふ

接客

やうにしたし。

- (3) 面會時間はなるべく之を定めるやうにし、之を定めた場合には出来るだけ之を知らせる方法を講ぜられたし。
- (4) 簡単な用件は玄関先の立話で済ますやうにしたし。但し、此の場合には外套・手袋は脱ぐに及ばぬこと。
- (5) 用件の訪問は挨拶よりも用件を主とし、なるべく速に切りあげるやうにしたし。

- (6) 面識なき人の訪問には、必ず相當の紹介狀を携帯するやうにしたし。
- (7) 年若い男女は、單身相互に訪問せぬやうにしたし。

(三)接客 來客に接するには、諸事誠心誠意を以てし、其の言語・舉動・服裝等禮を失はないやうに注意すべきである。客室は常に掃除をよくし、適當に裝飾しておくがよい。

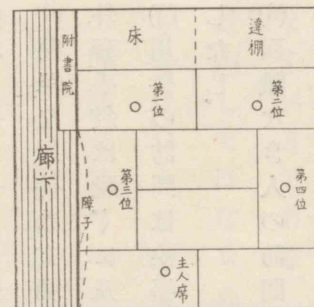
用談のための來客に對しては、用談を速にすませるやうにし、交誼のための來客には、隔意なく快活に談話を交すがよい。すべて



饗應

談話は趣味ある話柄を選ぶべく、決して他人の批評や自負めいたことを喋々してはならぬ。食事に招いた場合の外、猥りに飲食を饗することはなるべく避けたがよい。客の辭去する際は、忘れ物などに注意し、玄關に至り丁寧に見送るべきである。

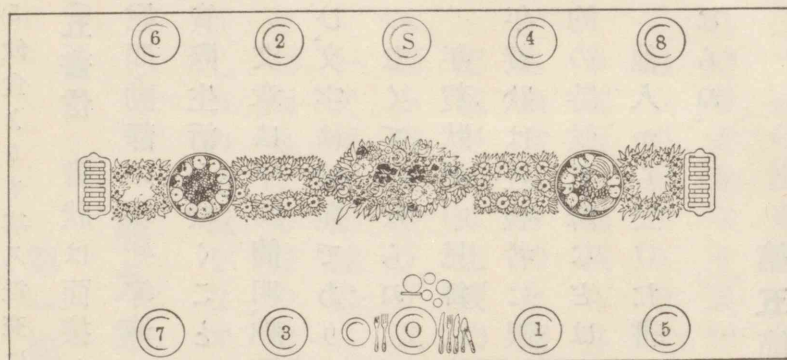
(四) 饗應 客を招いて饗應するには、其の趣旨・日時及び場所等を先



和風座敷の座席位置

方に通すべきである。又他人から招待された時は、其の場合に應じ、相當の服裝をなし、快く出席するがよい。吉凶の儀式には式服で参列すべきは勿論であるが、其の場合には適當のものでよい。衣服にとらはれて、知己快談の機会を逸するが如きはよくないことである。此の弊は女子に多く見る所で、誠に遺憾なことである。

挿畫  
O 主賓  
1 2 3 .....  
着席順位を示す。



洋風食卓の座席位置

饗應は近時歐風によるものが多くなつて來たから、之に關する一般的作法に通曉し、且つ相當習熟して、他人の招宴にも列し、自分でも招待するやうにありたいものである。

【生活改善同盟會の主張】

- (1) 宴會の設備は成るべく椅子式にしたし、座式による場合には食卓を使用すること。
- (2) 食膳の分量・品數は其の席で食ひ盡し得られる程度とし、一品づゝ順次に取りかへて出し、なるべく獻立表を添へること。
- (3) 酒杯の獻酬を廢し、舉杯を以て之に代へること。
- (4) 餘興は食事の前後にすること。



(5) 飲食よりも寧ろ社交に重きを置いた簡単な設備の會を屢開催すること。

(五) 書信 書狀は面接して談話・應答する代りのものである。慶弔・慰問・動靜の報知等から日常の用向に至るまで、其の用は甚だ廣く、實際生活上缺くことの出来ないものである。

文章は平易簡明、趣旨の徹底を旨とし、なるべく丁寧な語辭を用ひ、文字は綺麗でありたい。封筒・用紙等も作法に適つたものを用ひなくてはならぬ。

年賀狀・暑中見舞狀等が形式に流れつゝ、あるのは遺憾である。

年賀狀は近親者に限り、簡便で誠意を籠めたものにしたい。形式的の時候見舞などは廢したがよい。

他人から受けた書信で、返事を要するものは、速に認めなくてはならぬ。

## 第五節 家庭日誌

一家の出來事は、毎日其の要領を家庭日誌に記載しておく、後日の參考となり、又一家の歴史となる。故に就寢前の寸暇を利用し、怠らず記するやうにしたいものである。

日誌簿の體裁には種々あり、市販品も頗る多い。故に、此等の中から適當なものを選定するがよい。

記載事項は比較的重要なものに止め、簡單明瞭を旨とし、何人にも讀み得るやう、正しく記すべきである。

一ケ年間記述した日誌は、之を保存し、次年度には前年度の日誌を利用して毎月の豫定行事を定め、緊張自警すべき日、或は樂しかりし日の追憶をなす等、實用上、趣味上有益に活用すべきである。

## 第九章 家風の振興

### 第一節 家庭の要素



## 家庭の起原

●家庭の起原 人類には他の動物と同じやうに種族保存の本能がある。此の本能の支配を受けて、生れ出た小兒を庇護する場所として、住居の必要が生じた。人類は、また社交本能を有し、孤立して生存することは出来ない。此の本能を満足させる爲めにも、住居が必要である。更に夫婦兄弟姉妹等が集團して棲むことになると、強い男子は外に出て生活の物資を獲得し、弱い女子は内に在つて其の物資を保護する任に當り、經濟上頗る都合がよい。此等の諸原因から人類は住居を營造するやうになつたのである。原始時代には、水草を追ひ轉々移住して居たのであるが、農業が起つてから其の業の性質上一定の土地に永住するものが多くなり、今日の家庭生活の起源となつたのである。

## 家庭と國家との關係

●家庭と國家との關係 家庭は家人が相互に融合して精神的團結をなし、國家の健全な單位となるべきものである。個人は家庭

## 家庭の要素

を通じて、國家社會に相接觸するのであるから、家風の振興如何は、一國の興廢に大なる關係があるのである。

●家庭の要素 家庭は單なる個人の集合ではない。少くとも左の三つの要素を具備すべきである。

(1)法の認める組織 法の認める男女の正しい結婚がなくてはならぬ。之によつて正しい夫婦關係が生じ、親子兄弟姉妹等の血族團體が成立する。家長の姓で一括された此の團體こそは、家庭の根本的要素である。

(2)精神的融合統一 家庭の根柢たる夫婦は、人生に對する理想と主義とを同じうし、互に敬愛し、絶対に信賴して、終生不變の精神的融合がなくてはならぬ。

夫は妻をよい伴侶として敬愛し、妻は夫に對して、自己の全體を捧げ盡して満足する奉仕的精神を發揮する。此處に家族の精神



は融合され、家庭精神は確立するのである。實に、理想的夫婦關係が形成されて後、始めて孝友和等の家庭道德は自ら發現することになるのである。

③ 一定の住居を領域とする共同生活團體 夫婦の間に精神的融合があつても、一定の住居がなかつたなら家庭は成立しない。我が國では、男女が結婚すると、妻は夫の家に入り、入夫や婿養子の場合には妻の家に入り、共同生活を営むのである。

④ 家庭の意義 之を要するに、家庭は法制的、經濟的の結合團體であるばかりでなく、尊敬親愛、同情慰安、犠牲奉仕等の美德が發現交換される精神的結合團體であつて、家庭といふ有機的關係を有するものである。

家庭の意義

## 第二節 東西家庭の比較

東西家庭の比較

● 東西家庭の比較 我が國の家庭は、國家の單位であつて、夫婦の

關係よりも寧ろ親子の關係を重んじ、祖先を崇拜し、子孫の繁榮をはかつて居る。歐米の家庭は、之とちがつて、夫婦の愛に重きをおき、個人の自由を認め、個人本位であつて、家の觀念に乏しい。即ち我は縦、彼は横の關係を重視して居るのである。

我が國の家族制度には幾多の長所がある。其の主要なものは左の如くである。

- (1) 家族の全員が一致團結し、よく統一する。
- (2) 家族相互間に利己心を交へない、深厚な同情心が涵養される。
- (3) 一身を抛つて團體の爲めに盡す、強烈な犠牲的精神を養ふことが出来る。此の精神は擴大されて愛國心となるものである。
- (4) 家族制度は存續發展の觀念を強くし、重厚の美德が養はれる。

● 歐米思想と家族制度 近時我が國は歐米文化の影響を受けて、個人主義や民本主義の思想が家庭にまでも侵入し來つて、傳統の

歐米思想と家族制度



家族制度を云々するものがないでもないが、之は大きな心得違ひである。我が家族制度には我が國體と共通して居る美點がある。吾々は尊外卑内（えんぐいひ）の精神に左右されることなく、我を本體として彼の長所を採擇する覺悟がなくてはならぬ。即ち祖先の崇拜、子孫の連續即ち親子本位の理想はあくまでも之を尊重し、更に一夫一婦の夫婦關係竝に其の間の愛情を維持し、一家幸福の増進をはからなくてはならぬ。

## 將來の家族制度

●將來の家族制度 家族制度に於ては、(一)個人の人格が重んぜられず、(二)個人の自由發展が阻害され、(三)獨立心が缺乏する等の缺點がないでもない。これは、歐米の個人主義が、(一)自主獨立を重んじ、(二)各個人の人格の尊嚴を認める等の長所を採つて其の短を補はなくてはならぬ。然し、個人主義の短所たる、(一)利己主義に流れ、社會の秩序を顧みず、(二)輕薄に流れ易く、兩親も祖先も思はないやう

なことは絶対に排斥すべきである。即ち從來の家族制度の缺陷を補正した新家族制度を樹立し、其の發展を期することは、吾々の一大責務である。

## 第三節 家風の振興

## 家庭と主婦

●家庭と主婦 家長は一家の主腦者ではあるが、常に外に出て活動して居るから、家庭の内部の支配は、専ら主婦の手腕に俟たなくてはならぬ。即ち、主婦は實質上の首腦者であつて、家長は寧ろ客位に立つものである。之は古今東西を通じての一貫の眞理である。一家の盛衰興廢は、主婦の人格如何によつて決せられる。主婦の責任は實に大なりといふべきである。

(1) 我が國の女子の保有して居る美德を發揮して家庭を潤化すべきこと。

我が國の女子は、古から誠實・溫和・從順・貞節であつて犠牲奉仕の



美德を有し、舅姑・良人に仕へて其の至誠を捧げて居る。歐米の家庭に比し、其の組織の複雑である我が家庭に、常に和氣洋々たるものある所以は實に我が國の女子の美德に基づくのである。吾々は此の美德を繼承し、一家を潤化することに心掛なくてはならぬ。

(2) 善良な家風を振興して、子女を善導すべきこと。

一國の歴史がよく國民性を陶冶する如くに、一家の家風はよく子女の徳性を支配するものである。吾々は、先づ、善良な家風を樹立し、子女を其の雰圍氣中に薰陶しなければならぬ。家風を中心は主婦である。子女は、主婦の人格の反映であるといつても過言ではない。

#### 家風の内容

●家風の内容 家風の内容として特に望ましいことは、左の諸項である。

(1) 早起 早起は一日の仕事の能率と大なる關係がある。主婦た

るものは未明に起き、食事の用意、老幼の世話、主人の身仕度、家内の掃除等をして範を他に示すべきである。

(2) 規律 勤勉な人は又時間を惜むものである。仕事の順序を考へ、敏活に處理して澁滯する如きことはない。主婦たるものは、複雑な家務を巧に處理して、範を他に示すべきである。

(3) 清潔 掃除洗濯手入等を十分にし、清潔整頓につとめなくてはならぬ。清潔は衛生上ばかりでなく、精神上に及ぼす影響も亦大である。

(4) 勤儉 早起する者は勤勞を愛する。勤勞を愛する人は、質素で儉約である。勤と儉とは、一家繁榮の要諦である。勤儉の風が家内に充滿すると、奢侈遊惰の風は自ら消滅する。

(5) 禮讓 親子・夫婦・長幼間の禮儀が正しく、親愛の情が溢れ、敬虔であつて敬神崇祖の念に富むのは一家の美風である。主婦は之が



中心たるべきである。  
⑥趣味 一家には又趣味がなくてはならぬ。音楽・美術・園藝・茶の湯・生花等は人の精神を高尙優雅にするものである。主婦が趣味に乏しい時は家庭は殺風景である。

#### 第四節 家庭と公民的陶冶

公民的陶冶の  
趨勢

●公民的陶冶の趨勢 吾々は家庭の一員であると同時に國家社會の一員である。家庭なる團體に對する本務があると同時に、國家社會に對する本務があり、其の團體生活の完成に奉仕しなくてはならぬ。近時公民教育の聲が漸く高く、國民に社會政治・經濟・法律に關する知識を授け、公共に對する德操を涵養して、之を實際生活に實現させやうとつとめつゝあるのは、時勢の進運上然かあるべきことである。

家庭と公民的  
陶冶

●家庭と公民的陶冶 公民的陶冶は、學校教育ばかりで其の目的

を達成することは出来ぬ。家庭で幼少の時から陶冶しなくてはならぬ。家庭は國家・社會の縮圖であり、亦其の單位であつて、之を國家・社會から切り離しては健全なる意義がない。從來女子は社會政治・經濟・法・經濟等に關する知識に乏しく、家庭生活上に此等の知識を應用することなく、従つて子女に對し、公民的陶冶を施すことに缺けて居たのは遺憾である。今や女子の公民權は時の問題となつて來た。此の點からいつても、女子に此の方面の知識の收得が急務であると思ふ。

(1)社會共同生活の本義を體得し、相互倚存、小我をすて、大我に就き、互に人格を尊重し、共同一致して團體の幸福を増進することは、社會の一員たるもの、本務である。此の陶冶は實に家庭で其の基礎を築かなくてはならぬ。

(2)立憲治下の國民は、國政に參與し、自治の本義を發揮して國家の



隆昌を期すべきである。家庭でも自治的・立憲的に諸事を處理し、責任觀念の養成につとめ、權利あれば必ず義務あることを體得させるやうにすべきである。

(3) 一家の經濟を處理するにも、國家の政策と相俟つにあらざれば其の經濟は徹底しない。食糧問題・燃料問題・衣服材料問題・國內産業振興問題等は何れも其の著しい例である。子女に、一家の消費節約は國家の政策を遂行する所以であることを知らせ、國家意識を養ふことにつとめてはならぬ。

(4) 家事經濟を處理する上に、經濟學の理論を應用すべき範圍が頗る多い。例へば、物價の變動に留意し、物資の購入時期を過たず、販賣組合や購買組合の利用を巧みにして收益を多くし、失費を少くし、銀行・信託會社・信用組合等を利用して貯蓄を有利安全にするのは其の一例である。子女をして此等的一部分を實現させるのは

決して困難なことではない。

◎要約 以上は社會・政治・經濟等に關する知識・德操を與へ、實際生活に實現させる大綱に過ぎない。各家庭では細目に亘り、具體的に攻究し、公民的陶冶の實績を收めなくてはならぬ。之が爲めには女子は先づ自ら此の方面の知識を收得し、之を家庭生活に應用し、家庭を國家・社會の健全な單位たらしめるやうにとつとめなくてはならぬ。かくして我が國の隆昌は始めて期することが出来るのである。

## 第五篇 結論

一家を經營するに必要な知識と實習事項の一般は茲に其の説明を終ることになった。

おもふに家事科の基礎たる科學は其の數多く、且つ各科學は日



進月歩底止する所を知らない有様である。殊に榮養學の進歩の如きは其の著しいものである。故に諸子は諸科學の研究につとめて家事科の内容を豊富にし、世の進展に順應するやうつとめなくてはならぬ。

家事の實習事項は、一家の事情、地方の情況により大に其の趣を異にすべきものである。諸子は既に地方化されて教授を受けられたこと、思ふが、更に一家に適應させることは、今後の自習に俟つべきものである。學校では一通りの指導に止まり、習熟の域に達せしめるだけの時間がない。故に諸子は興味を以て繼續習熟を期すべきである。

女子は相當の年齢に達すると嫁して夫の家に入り、主婦として家政を掌り、母として子女を育成するものである。良妻たり賢母たることによつて女子特有の使命は發揮されるのである。

一家は一國の單位であり、縮圖であることは既に述べておいた。一家の經營に於て、主婦の擔當して居る、(一)衣食住を調達・整理し、病人を看護し、老人を慰安し、以て家人に満足を與へること、(二)家計を調整して一家の經濟的基礎を強固にすること、(三)子女を教養して國家・社會の有用の人たらしめること等は、一國に於ける内務・大藏・文部等の諸大臣の掌る所と其の性質に於て何等の差異を認めない。即ち主婦は此等諸大臣を兼務して居ると見ても決して不當ではない。たゞ望ましいことは、主婦が此の重大な責務を自覺することである。而して一家平和の中心となり、堅實なる家風を樹立し、一家を通じて國家・社會に奉仕貢獻するやう希望に堪へないのである。



現代家事教科書 (再訂版) 下卷 (終)

附 録

第一 家計簿記例題と様式

例題  
或る年の六月  
の収入支出で  
ある。

一	日	前月越高	二〇〇〇(圓單位)
同		主人靴下代	一・六〇
二	日	長男二男長女授業料	一三・〇〇
同		端書切手代	〇・四五
四	日	電車回数券	三・〇〇
五	日	銀行より引出し	五〇・〇〇
同		主人自分小遣	一五・〇〇
六	日	長男夏服一着	一三・六〇
同		食費現金拂(賄帳通)	五・〇〇
同		大正式塵埃箱	五・〇〇
八	日	下水掃除用石灰	〇・五〇
同		石鹼半ダース	一・二〇

附 録 家計簿記例題及び様式



同	谷村へ病氣見舞	二〇〇
十日	浴衣地三反	七五〇
同	客用うちは五本	一〇〇
同	醫師來診に付車代	一〇〇
同	銀行より引出し	五〇〇
十一日	小兒用文房具	一一〇
同	食費現金拂(賄帳通)	五五〇
十三日	托兒所寄附	一〇〇
同	蚊遣線香	〇五〇
同	電報代	一〇三〇
同	〇〇協會本年度分會費	五〇〇
二十日	散髪代 三人	二一〇
同	洋傘 一本	五〇〇
同	食費現金拂(賄帳通)	五〇〇
廿四日	下駄一足	〇八〇

同	夜具綿	五〇〇
同	小包郵便	〇四〇
廿五日	主人俸給	二五〇
同	家賃本月分	四〇〇
同	銀行へ當座預金	二五〇
廿八日	電燈代	三〇〇
同	ガス・薪炭代	七〇〇
同	新聞雜誌代	二七〇
冊日	米代	七〇〇
同	肉屋	五五〇
同	肴屋	六七〇
同	牛乳屋	四八〇
同	乾物屋	一二四〇
同	八百屋	四五〇
同	醬油屋	四二〇
同	書籍一冊	三〇〇
同	銀行へ預金	一二〇〇



月		日 記 ・ 仕				
日	摘 要	收 入	支			
			食物費	衣服費	住居費	
1	前月分越高	2000				
"	主人靴下代			160		
2	長男二男長女授業料					
"	端書・切手代					
4	電車回数券					
5	銀行より引出し	5000				
"	主人・自分小遣					
6	長男夏服一着			1360		
"	食費現金拂 (賄帳通)		500			
"	大正式塵埃箱				500	
8	下水掃除用石灰				50	
"	石鹼半ダース			120		
"	谷村へ病氣見舞					
10	浴衣地三反			750		
"	客用うちは五本				100	
"	醫師來診に付車代					
"	銀行より引出し	5000				
11	小兒用文房具					
"	食費現金拂 (賄帳通)		500			
13	托兒所寄附					
"	蚊遣線香				50	
"	電報代					
"	〇〇協會本年度會費					
		12000	1000	2390	700	

譯 帳				支 出	差 引	備 考
運用費	常備費	教化費		日 計	殘 高	
					2000	
				160	1840	
		1300				
		45		1345	495	
300				300	195	
					5195	
1500				1500	3695	
				2360	1335	
		200		370	965	
	100			950	15	
					5015	
		100				
				600	4415	
		100				
		30				
		500		680	3735	
1800	100	2275		8265	3735	



月		日 記 ・ 仕			
月	摘 要	收 入	支		
			食物費	衣服費	住居費
18	前ヨリ	120 00	10 00	23 90	7 00
20	三人散髪代			1 20	
"	洋 傘			5 00	
"	食費現金拂(賄帳通)		5 00		
24	下駄一足			8 0	
"	夜具綿			5 00	
"	小包郵便				
25	主人俸給	250 00			
"	家賃本月分				40 00
"	銀行へ貯金				
28	電燈代				
"	ガス・薪炭代				
"	新聞雑誌代				
30	米 代		7 00		
"	肉 屋		5 50		
"	肴 屋		6 70		
"	牛乳屋		4 80		
"	乾物屋		12 40		
"	八百屋		4 50		
"	醬油屋		4 20		
"	書物一冊				
"	銀行へ當座預金				
		370 00	60 00	35 90	47 00

譯 帳		出				支 出	差 引	備 考	
運用費	常備費	教化費				日 計	残 高		
18 00	1 00	22 75				82 65	37 35		
						11 20	26 15		
		4 0				6 20	19 95		
							269 95		
	25 00					65 00	204 95		
3 00									
7 00									
		2 70				12 00	192 25		
		3 00							
	120 00					168 10	24 15		
28 00	146 00	28 85				345 85	24 15		



[illegible][illegible]



三	一
三月十六日	一月一日
三月十七日	一月二日
三月十八日	一月三日
三月十九日	一月四日
三月二十日	一月五日
三月二十一日	一月六日
三月二十二日	一月七日
三月二十三日	一月八日
三月二十四日	一月九日
三月二十五日	一月十日
三月二十六日	一月十一日
三月二十七日	一月十二日
三月二十八日	一月十三日
三月二十九日	一月十四日
三月三十日	一月十五日
三月三十一日	一月十六日
三月三十二日	一月十七日
三月三十三日	一月十八日
三月三十四日	一月十九日
三月三十五日	一月二十日
三月三十六日	一月二十一日
三月三十七日	一月二十二日
三月三十八日	一月二十三日
三月三十九日	一月二十四日
三月四十日	一月二十五日
三月四十一日	一月二十六日
三月四十二日	一月二十七日
三月四十三日	一月二十八日
三月四十四日	一月二十九日
三月四十五日	一月三十日
三月四十六日	二月一日
三月四十七日	二月二日
三月四十八日	二月三日
三月四十九日	二月四日
三月五十日	二月五日
三月五十一日	二月六日
三月五十二日	二月七日
三月五十三日	二月八日
三月五十四日	二月九日
三月五十五日	二月十日
三月五十六日	二月十一日
三月五十七日	二月十二日
三月五十八日	二月十三日
三月五十九日	二月十四日
三月六十日	二月十五日
三月六十一日	二月十六日
三月六十二日	二月十七日
三月六十三日	二月十八日
三月六十四日	二月十九日
三月六十五日	二月二十日
三月六十六日	二月二十一日
三月六十七日	二月二十二日
三月六十八日	二月二十三日
三月六十九日	二月二十四日
三月七十日	二月二十五日
三月七十一日	二月二十六日
三月七十二日	二月二十七日
三月七十三日	二月二十八日
三月七十四日	二月二十九日
三月七十五日	二月三十日
三月七十六日	三月一日
三月七十七日	三月二日
三月七十八日	三月三日
三月七十九日	三月四日
三月八十日	三月五日
三月八十一日	三月六日
三月八十二日	三月七日
三月八十三日	三月八日
三月八十四日	三月九日
三月八十五日	三月十日
三月八十六日	三月十一日
三月八十七日	三月十二日
三月八十八日	三月十三日
三月八十九日	三月十四日
三月九十日	三月十五日
三月九十一日	三月十六日
三月九十二日	三月十七日
三月九十三日	三月十八日
三月九十四日	三月十九日
三月九十五日	三月二十日
三月九十六日	三月二十一日
三月九十七日	三月二十二日
三月九十八日	三月二十三日
三月九十九日	三月二十四日
三月一百日	三月二十五日
三月一百一日	三月二十六日
三月一百二日	三月二十七日
三月一百三日	三月二十八日
三月一百四日	三月二十九日
三月一百五日	三月三十日
三月一百六日	三月三十一日
三月一百七日	四月一日
三月一百八日	四月二日
三月一百九日	四月三日
三月一百二十日	四月四日
三月一百二十一日	四月五日
三月一百二十二日	四月六日
三月一百二十三日	四月七日
三月一百二十四日	四月八日
三月一百二十五日	四月九日
三月一百二十六日	四月十日
三月一百二十七日	四月十一日
三月一百二十八日	四月十二日
三月一百二十九日	四月十三日
三月一百三十日	四月十四日
三月一百三十一日	四月十五日
三月一百三十二日	四月十六日
三月一百三十三日	四月十七日
三月一百三十四日	四月十八日
三月一百三十五日	四月十九日
三月一百三十六日	四月二十日
三月一百三十七日	四月二十一日
三月一百三十八日	四月二十二日
三月一百三十九日	四月二十三日
三月一百四十日	四月二十四日
三月一百四十一日	四月二十五日
三月一百四十二日	四月二十六日
三月一百四十三日	四月二十七日
三月一百四十四日	四月二十八日
三月一百四十五日	四月二十九日
三月一百四十六日	四月三十日
三月一百四十七日	五月一日
三月一百四十八日	五月二日
三月一百四十九日	五月三日
三月一百五十日	五月四日
三月一百五十一日	五月五日
三月一百五十二日	五月六日
三月一百五十三日	五月七日
三月一百五十四日	五月八日
三月一百五十五日	五月九日
三月一百五十六日	五月十日
三月一百五十七日	五月十一日
三月一百五十八日	五月十二日
三月一百五十九日	五月十三日
三月一百六十日	五月十四日
三月一百六十一日	五月十五日
三月一百六十二日	五月十六日
三月一百六十三日	五月十七日
三月一百六十四日	五月十八日
三月一百六十五日	五月十九日
三月一百六十六日	五月二十日
三月一百六十七日	五月二十一日
三月一百六十八日	五月二十二日
三月一百六十九日	五月二十三日
三月一百七十日	五月二十四日
三月一百七十一日	五月二十五日
三月一百七十二日	五月二十六日
三月一百七十三日	五月二十七日
三月一百七十四日	五月二十八日
三月一百七十五日	五月二十九日
三月一百七十六日	五月三十日
三月一百七十七日	六月一日
三月一百七十八日	六月二日
三月一百七十九日	六月三日
三月一百八十日	六月四日
三月一百八十一日	六月五日
三月一百八十二日	六月六日
三月一百八十三日	六月七日
三月一百八十四日	六月八日
三月一百八十五日	六月九日
三月一百八十六日	六月十日
三月一百八十七日	六月十一日
三月一百八十八日	六月十二日
三月一百八十九日	六月十三日
三月一百九十日	六月十四日
三月一百九十一日	六月十五日
三月一百九十二日	六月十六日
三月一百九十三日	六月十七日
三月一百九十四日	六月十八日
三月一百九十五日	六月十九日
三月一百九十六日	六月二十日
三月一百九十七日	六月二十一日
三月一百九十八日	六月二十二日
三月一百九十九日	六月二十三日
三月二百日	六月二十四日
三月二百一日	六月二十五日
三月二百二日	六月二十六日
三月二百三日	六月二十七日
三月二百四日	六月二十八日
三月二百五日	六月二十九日
三月二百六日	六月三十日
三月二百七日	七月一日
三月二百八日	七月二日
三月二百九日	七月三日
三月三百日	七月四日
三月三百一日	七月五日
三月三百二日	七月六日
三月三百三日	七月七日
三月三百四日	七月八日
三月三百五日	七月九日
三月三百六日	七月十日
三月三百七日	七月十一日
三月三百八日	七月十二日
三月三百九日	七月十三日
三月四百日	七月十四日
三月四百一日	七月十五日
三月四百二日	七月十六日
三月四百三日	七月十七日
三月四百四日	七月十八日
三月四百五日	七月十九日
三月四百六日	七月二十日
三月四百七日	七月二十一日
三月四百八日	七月二十二日
三月四百九日	七月二十三日
三月五百日	七月二十四日
三月五百一日	七月二十五日
三月五百二日	七月二十六日
三月五百三日	七月二十七日
三月五百四日	七月二十八日
三月五百五日	七月二十九日
三月五百六日	七月三十日
三月五百七日	八月一日
三月五百八日	八月二日
三月五百九日	八月三日
三月六百日	八月四日
三月六百一日	八月五日
三月六百二日	八月六日
三月六百三日	八月七日
三月六百四日	八月八日
三月六百五日	八月九日
三月六百六日	八月十日
三月六百七日	八月十一日
三月六百八日	八月十二日
三月六百九日	八月十三日
三月七百日	八月十四日
三月七百一日	八月十五日
三月七百二日	八月十六日
三月七百三日	八月十七日
三月七百四日	八月十八日
三月七百五日	八月十九日
三月七百六日	八月二十日
三月七百七日	八月二十一日
三月七百八日	八月二十二日
三月七百九日	八月二十三日
三月八百日	八月二十四日
三月八百一日	八月二十五日
三月八百二日	八月二十六日
三月八百三日	八月二十七日
三月八百四日	八月二十八日
三月八百五日	八月二十九日
三月八百六日	八月三十日
三月八百七日	八月三十一日
三月八百八日	九月一日
三月八百九日	九月二日
三月九百日	九月三日
三月九百一日	九月四日
三月九百二日	九月五日
三月九百三日	九月六日
三月九百四日	九月七日
三月九百五日	九月八日
三月九百六日	九月九日
三月九百七日	九月十日
三月九百八日	九月十一日
三月九百九日	九月十二日
三月一千日	九月十三日
三月一千一日	九月十四日
三月一千二日	九月十五日
三月一千三日	九月十六日
三月一千四日	九月十七日
三月一千五日	九月十八日
三月一千六日	九月十九日
三月一千七日	九月二十日
三月一千八日	九月二十一日
三月一千九日	九月二十二日
三月二千日	九月二十三日
三月二千一日	九月二十四日
三月二千二日	九月二十五日
三月二千三日	九月二十六日
三月二千四日	九月二十七日
三月二千五日	九月二十八日
三月二千六日	九月二十九日
三月二千七日	九月三十日
三月二千八日	十月一日
三月二千九日	十月二日
三月三千日	十月三日
三月三千一日	十月四日
三月三千二日	十月五日
三月三千三日	十月六日
三月三千四日	十月七日
三月三千五日	十月八日
三月三千六日	十月九日
三月三千七日	十月十日
三月三千八日	十月十一日
三月三千九日	十月十二日
三月四千日	十月十三日
三月四千一日	十月十四日
三月四千二日	十月十五日
三月四千三日	十月十六日
三月四千四日	十月十七日
三月四千五日	十月十八日
三月四千六日	十月十九日
三月四千七日	十月二十日
三月四千八日	十月二十一日
三月四千九日	十月二十二日
三月五千日	十月二十三日
三月五千一日	十月二十四日
三月五千二日	十月二十五日
三月五千三日	十月二十六日
三月五千四日	十月二十七日
三月五千五日	十月二十八日
三月五千六日	十月二十九日
三月五千七日	十月三十日
三月五千八日	十月三十一日
三月五千九日	十一月一日
三月六千日	十一月二日
三月六千一日	十一月三日
三月六千二日	十一月四日
三月六千三日	十一月五日
三月六千四日	十一月六日
三月六千五日	十一月七日
三月六千六日	十一月八日
三月六千七日	十一月九日
三月六千八日	十一月十日
三月六千九日	十一月十一日
三月七千日	十一月十二日
三月七千一日	十一月十三日
三月七千二日	十一月十四日
三月七千三日	十一月十五日
三月七千四日	十一月十六日
三月七千五日	十一月十七日
三月七千六日	十一月十八日
三月七千七日	十一月十九日
三月七千八日	十一月二十日
三月七千九日	十一月二十一日
三月八千日	十一月二十二日
三月八千一日	十一月二十三日
三月八千二日	十一月二十四日
三月八千三日	十一月二十五日
三月八千四日	十一月二十六日
三月八千五日	十一月二十七日
三月八千六日	十一月二十八日
三月八千七日	十一月二十九日
三月八千八日	十一月三十日
三月八千九日	十二月一日
三月九千日	十二月二日
三月九千一日	十二月三日
三月九千二日	十二月四日
三月九千三日	十二月五日
三月九千四日	十二月六日
三月九千五日	十二月七日
三月九千六日	十二月八日
三月九千七日	十二月九日
三月九千八日	十二月十日
三月九千九日	十二月十一日
三月四千日	十二月十二日
三月四千一日	十二月十三日
三月四千二日	十二月十四日
三月四千三日	十二月十五日
三月四千四日	十二月十六日
三月四千五日	十二月十七日
三月四千六日	十二月十八日
三月四千七日	十二月十九日
三月四千八日	十二月二十日
三月四千九日	十二月二十一日
三月五千日	十二月二十二日
三月五千一日	十二月二十三日
三月五千二日	十二月二十四日
三月五千三日	十二月二十五日
三月五千四日	十二月二十六日
三月五千五日	十二月二十七日
三月五千六日	十二月二十八日
三月五千七日	十二月二十九日
三月五千八日	十二月三十日
三月五千九日	十二月三十一日
三月六千日	一月一日
三月六千一日	一月二日
三月六千二日	一月三日
三月六千三日	一月四日
三月六千四日	一月五日
三月六千五日	一月六日
三月六千六日	一月七日
三月六千七日	一月八日
三月六千八日	一月九日
三月六千九日	一月十日
三月七千日	一月十一日
三月七千一日	一月十二日
三月七千二日	一月十三日
三月七千三日	一月十四日
三月七千四日	一月十五日
三月七千五日	一月十六日
三月七千六日	一月十七日
三月七千七日	一月十八日
三月七千八日	一月十九日
三月七千九日	一月二十日
三月八千日	一月二十一日
三月八千一日	一月二十二日
三月八千二日	一月二十三日
三月八千三日	一月二十四日
三月八千四日	一月二十五日
三月八千五日	一月二十六日
三月八千六日	一月二十七日
三月八千七日	一月二十八日
三月八千八日	一月二十九日
三月八千九日	一月三十日
三月九千日	一月三十一日
三月九千一日	二月一日
三月九千二日	二月二日
三月九千三日	二月三日
三月九千四日	二月四日
三月九千五日	二月五日
三月九千六日	二月六日
三月九千七日	二月七日
三月九千八日	二月八日
三月九千九日	二月九日
三月四千日	二月十日
三月四千一日	二月十一日
三月四千二日	二月十二日
三月四千三日	二月十三日
三月四千四日	二月十四日
三月四千五日	二月十五日
三月四千六日	二月十六日
三月四千七日	二月十七日
三月四千八日	二月十八日
三月四千九日	二月十九日
三月五千日	二月二十日
三月五千一日	二月二十一日
三月五千二日	二月二十二日
三月五千三日	二月二十三日
三月五千四日	二月二十四日
三月五千五日	二月二十五日
三月五千六日	二月二十六日
三月五千七日	二月二十七日
三月五千八日	二月二十八日
三月五千九日	二月二十九日
三月六千日	二月三十日
三月六千一日	三月一日
三月六千二日	三月二日
三月六千三日	三月三日
三月六千四日	三月四日
三月六千五日	三月五日
三月六千六日	三月六日
三月六千七日	三月七日
三月六千八日	三月八日
三月六千九日	三月九日
三月七千日	三月十日
三月七千一日	三月十一日
三月七千二日	三月十二日
三月七千三日	三月十三日
三月七千四日	三月十四日
三月七千五日	三月十五日
三月七千六日	三月十六日
三月七千七日	三月十七日
三月七千八日	三月十八日
三月七千九日	三月十九日
三月八千日	三月二十日
三月八千一日	三月二十一日
三月八千二日	三月二十二日
三月八千三日	三月二十三日
三月八千四日	三月二十四日
三月八千五日	三月二十五日
三月八千六日	三月二十六日
三月八千七日	三月二十七日
三月八千八日	三月二十八日
三月八千九日	三月二十九日
三月九千日	三月三十日
三月九千一日	三月三十一日
三月九千二日	四月一日
三月九千三日	四月二日
三月九千四日	四月三日
三月九千五日	四月四日
三月九千六日	四月五日
三月九千七日	四月六日
三月九千八日	四月七日
三月九千九日	四月八日
三月四千日	四月九日
三月四千一日	四月十日
三月四千二日	四月十一日
三月四千三日	四月十二日
三月四千四日	四月十三日
三月四千五日	四月十四日
三月四千六日	四月十五日
三月四千七日	四月十六日
三月四千八日	四月十七日
三月四千九日	四月十八日
三月五千日	四月十九日
三月五千一日	四月二十日
三月五千二日	四月二十一日
三月五千三日	四月二十二日
三月五千四日	四月二十三日
三月五千五日	四月二十四日
三月五千六日	四月二十五日
三月五千七日	四月二十六日
三月五千八日	四月二十七日
三月五千九日	四月二十八日
三月六千日	四月二十九日
三月六千一日	四月三十日
三月六千二日	五月一日
三月六千三日	五月二日
三月六千四日	五月三日
三月六千五日	五月四日
三月六千六日	五月五日
三月六千七日	五月六日
三月六千八日	五月七日
三月六千九日	五月八日
三月七千日	五月九日
三月七千一日	五月十日
三月七千二日	五月十一日
三月七千三日	五月十二日
三月七千四日	五月十三日
三月七千五日	五月十四日
三月七千六日	五月十五日
三月七千七日	五月十六日
三月七千八日	五月十七日
三月七千九日	五月十八日
三月八千日	五月十九日
三月八千一日	五月二十日
三月八千二日	五月二十一日
三月八千三日	五月二十二日
三月八千四日	五月二十三日
三月八千五日	五月二十四日
三月八千六日	五月二十五日
三月八千七日	五月二十六日
三月八千八日	五月二十七日
三月八千九日	五月二十八日
三月九千日	五月二十九日
三月九千一日	五月三十日
三月九千二日	五月三十一日
三月九千三日	六月一日
三月九千四日	六月二日
三月九千五日	六月三日
三月九千六日	六月四日
三月九千七日	六月五日
三月九千八日	六月六日
三月九千九日	六月七日
三月四千日	六月八日
三月四千一日	六月九日
三月四千二日	六月十日
三月四千三日	六月十一日
三月四千四日	六月十二日
三月四千五日	六月十三日
三月四千六日	六月十四日
三月四千七日	六月十五日
三月四千八日	六月十六日
三月四千九日	六月十七日
三月五千日	六月十八日
三月五千一日	六月十九日
三月五千二日	六月二十日
三月五千三日	六月二十一日
三月五千四日	六月二十二日
三月五千五日	六月二十三日
三月五千六日	六月二十四日
三月五千七日	六月二十五日
三月五千八日	六月二十六日
三月五千九日	六月二十七日
三月六千日	六月二十八日
三月六千一日	六月二十九日
三月六千二日	六月三十日
三月六千三日	七月一日
三月六千四日	七月二日
三月六千五日	七月三日
三月六千六日	七月四日
三月六千七日	七月五日
三月六千八日	七月六日
三月六千九日	七月七日
三月七千日	七月八日
三月七千一日	七月九日
三月七千二日	七月十日
三月七千三日	七月十一日
三月七千四日	七月十二日
三月七千五日	七月十三日
三月七千六日	七月十四日
三月七千七日	七月十五日
三月七千八日	七月十六日
三月七千九日	七月十七日
三月八千日	七月十八日
三月八千一日	七月十九日
三月八千二日	七月二十日
三月八千三日	七月二十一日
三月八千四日	七月二十二日
三月八千五日	七月二十三日
三月八千六日	七月二十四日
三月八千七日	七月二十五日
三月八千八日	七月二十六日
三月八千九日	七月二十七日
三月九千日	七月二十八日
三月九千一日	七月二十九日
三月九千二日	七月三十日
三月九千三日	七月三十一日
三月九千四日	八月一日
三月九千五日	八月二日
三月九千六日	八月三日
三月九千七日	八月四日
三月九千八日	八月五日
三月九千九日	八月六日
三月四千日	八月七日
三月四千一日	八月八日
三月四千二日	八月九日
三月四千三日	八月十日
三月四千四日	八月十一日
三月四千五日	八月十二日
三月四千六日	八月十三日
三月四千七日	八月十四日
三月四千八日	八月十五日
三月	

五月	端午の節句 夏服の用意 特別大掃除 更衣(ネル)・冬物洗濯 冬物と夏物との入換を行ふ。 海軍記念日	五月 上旬 中旬 下旬 二十七日
七月	七夕祭 梅雨晴後蚊帳を干す。 中元の贈物 先祖祭・墓參 中元 藪入 <small>奉公人に 休暇を與ふ。</small> 暑中見舞發送 土用干・月末大掃除	七月 上旬 中旬 十三日 十四日 十五日 十六日 下旬
八月	避暑旅行 庭園の手入 學校行きの準備。 月末大掃除	八月 上旬 下旬
六月	夏着の準備 更衣(單衣) 梅干漬をなす。 薪炭の購入 月末大掃除	六月 上旬 下旬 下旬 下旬
十月	更衣(裕)・冬着の準備・蟲干	十月 上旬
九月	學校始まる。	九月 上旬

一一

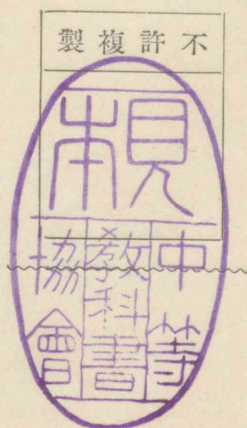


九月日	重陽の節句
十五日	觀月 蚊帳を納む。秋季皇靈祭・墓參 秋蒔種を下す。郊外遠足。 夏物の整理・更衣(ネル)
下旬	月末大掃除
十一月	
三日	明治節
上旬	紅葉狩遠足
十五日	七五三の祝
二十三日	新嘗祭
下旬	菜漬・淺漬を爲す。
	更衣
	月末大掃除
十二月	
中旬	障子の張替 特別大掃除
十七日	神嘗祭
下旬	庭園の手入 菊見
	月末大掃除
十二月	
上旬	澤庵漬
中旬	年始狀の準備 歳暮の贈物
二十五日	疊替
	大正天皇祭
	クリスマス
下旬	忘年会
	年末大掃除
	一ケ年間の決算・次年度豫算 新年の買物・餅つき其の他新年の準備。
三十一日	除夜

大正十四年九月十二日印  
大正十四年十二月十八日修訂三版印刷  
昭和二年十二月廿五日修正四版印刷  
昭和六年九月十五日再訂五版印刷

大正十四年九月十五日發行  
大正十四年十二月廿一日發行  
昭和三年十一月三十日修正訂正三版發行  
昭和六年九月廿五日修正訂正五版發行

定價金壹圓



著 者 井 上 秀 子

發行者  
會合資  
社文  
光  
社

右代表者  
大元茂一郎

東京市京橋區木挽町二丁目十一番地

印刷者 水村 冬二

發行所 發賣所

東京市四谷區本村町廿七番地  
振替口座東京六六二二一番  
東京市京橋區京橋二ノ三  
振替口座東京二八〇九番

會社  
目  
黑  
書  
店

文  
光  
社









広島大学図書

2000050965

